川口町埋蔵文化財報告第４輯

西　倉　遺　跡

－　第３次発掘調査報告書　－

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書

2003

新　　潟　　県
川口町教育委員会

西　倉　遺　跡

－　第３次発掘調査報告書　－

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書

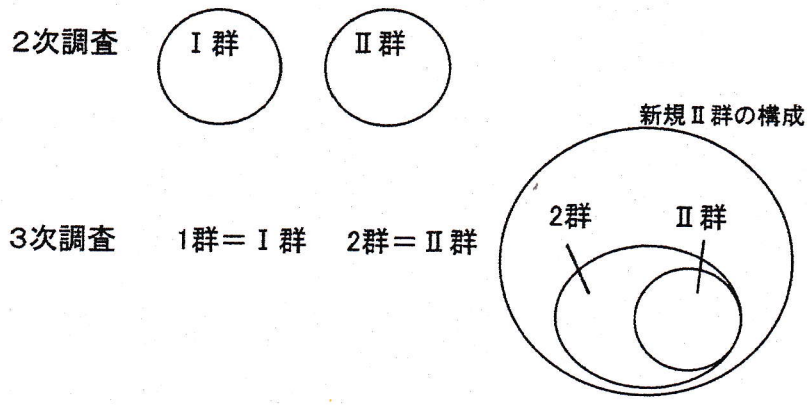
2003

新　　潟　　県
川口町教育委員会

西倉遺跡第3次発掘調査報告書

正誤表

	誤	正
P8　第1表	TP11　石器1点	TP11　石器2点
P11　L24	後期前葉時群	後期前葉土器群
P20　L24	概期	該期
P26　L28・32	並行	平行
P37　L21	定格式の磨製石斧	定角式の磨製石斧
P37　L30	5点を図示した	3点を図示した
P42　L25	約20㎡	約4000㎡
P43　L1	西倉第1群土器	第1群土器
P43　L2	西倉第1群土器	西倉第Ⅰ群土器
P44　L15	西倉第2群土器	第2群土器
P45　L16	西倉第2群土器	このたびの西倉第2群土器



このたび使用した第2群土器は、第2次発掘調査報告の「西倉第Ⅱ群土器」に含まれるものと考える。したがって、第2次発掘調査報告で示した「西倉第Ⅱ群土器」に第3次発掘調査報告書で確認した1類～5類、7類～9類を「西倉第Ⅱ群土器」に含める。すなわち、このたびの第3次発掘調査によって、西倉第Ⅱ群土器の内容が増強されたことになる。

序　　文

川口町は、悠久の大河信濃川と谷川連峰に源を発する清流魚野川の合流地点の、扇状地と河岸段丘に拓けた風光明媚な水と緑の豊な町であります。

歴史は遠く旧石器時代にはじまり、古来信濃川・魚野川両川が合流する我が町は、近世において水上交通の要衝として、更には越後と関東を結ぶ三国街道の宿場町として発展して来ました。

これまで、川口町では貴重な遺跡が数多く発見されておりますが、両川が織り成す段丘上には、日本の旧石器時代の遺跡を代表するといわれる西川口地区の「荒屋遺跡（およそ一万四千年前）」が、更に今回調査の縄文時代最古に属する西倉地区の「西倉遺跡（およそ一万年前）」があります。

この地に古代人が住み生活していたことは間違いなく、どのような生活、活動をしていたのか……手がかりはその遺物（石器、土器等）からしか知る由は有りません。これまでの研究によれば、川猟（サケ、マスなどの捕獲）などに精を出していたと考えられており、この地が如何に当時の人々の暮らしに好適であったかが知れます。更に、荒屋遺跡から出土した石器技術は、シベリアのバイカル湖の沿岸地方に始まり、北海道から東北地方・新潟に伝わり、その技法は東アジアの北側に大きく広がっており、世界的に注目され、歴史上、学術上貴重な遺跡です。

恵まれた自然・豊かな環境は今も昔も変わりなく、真に町の歴史の原点はここにあります。これら祖先の歴史を知ると同時に、先人達が築いてきた文化財を保護・活用し、更に未来に継承することが、私たちに課せられた重要な責務であります。そして、当時の文化、生活の様子を知ることにより、郷土の理解が深まり、郷土愛に繋がっていくものと思います。

この度の、西倉遺跡第三次調査では、一次・二次調査に引き続き、縄文時代最古に属する爪形文系土器群の発見や早期・中期の遺構検出があり、学術的に数多くの成果をおさめることができました。特に前述した旧石器時代の終わりころの荒屋遺跡と縄文時代草創期の西倉遺跡が、魚野川と信濃川が合流する段丘上に存在する史実は、町の歴史の解明に大きな意義があり興味深いものがあります。このたびの本書刊行が川口町の埋蔵文化財に対する保護思想の普及と活用の一端を担えれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご指導・ご尽力いただいた田海義正氏、調査担当の佐藤雅一氏、倉石広太氏、更に発掘作業にご協力いただいた地元作業員の皆様に、深く感謝の意を表します。

平成15年３月

川口町教育委員会

教育長　　大　渕　公　男

例　　言

1．本書は、新潟県北魚沼郡川口町大字西川口字岩平4981・4982番地他における「農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」に伴う発掘調査報告書である。

2．発掘調査期間は平成14年９月24日～11月１日であった。

3．発掘調査体制は次の通りである。

調査主体者　川口町教育委員会　教育長　大渕公男

調査指導　田海義正（新潟県教育庁文化行政課）

調査担当　佐藤雅一（津南町教育委員会生涯学習課）

主任調査員　倉石広太（下宅部遺跡調査団）

調査協力作業員　星野藤夫　関　英夫　中林昭司　覚張次郎　石坂忠雄　角張和太郎
山田利吉　小宮山時彦　喜多村福義　石井文雄　岡村　清　大渕富一
桜井　実　水落佐一郎　喜多村東作　星野淳作　桜井藤一郎　丸山　進
丸山一栄　小西蓉子　真島テイ　山田廉子　関　ミツエ　渡辺　真
桜井兵治

事務局　川口町教育委員会
課　長　関　達市
主　任　水落達也

4．発掘調査から発掘調査報告書作成に至る一連の作業は、田海義正の指導の下、佐藤雅一が担当となり、主任調査員倉石広太と協議・検討し進行させた。なお出土遺物の注記・実測・写真撮影については有限会社ペンタラボに委託した。

5．出土遺物の注記は「西倉第３次調査」から「ＳＧ３」とした。

6．本文の執筆は、第Ⅲ章 第６節 第１項から２項及び第Ⅳ章 第１節から３節を佐藤、第Ⅲ章第３節を卜部が執筆し、それ以外については佐藤と協議した上、倉石が執筆した。

7．出土遺物の取り上げの一部と航空写真測量、及び遺跡平面図、遺構図、遺物分布図の作成に関しては有限会社オフィスＲ＆Ｐに委託した。

8．土壌理化学分析は新潟大学の卜部厚志助教授に依頼し、分析結果についての玉稿を賜った。

9．出土した石器・礫の石材鑑定は堀川秀夫（新潟県立小千谷高校教諭）に依頼し、ご教示を得た。

10．本発掘調査によって出土した遺物・調査記録原図は川口町教育委員会で保管している。

11．発掘調査から本報告書作成に至るまで下記の諸氏並びに諸機関より多大な御指導・ご協力を賜った。
（敬称略）

安藤正美・秋本雅彦・阿部昭典・安部英二・石坂圭介・梅川勝史・大久保次男
小熊博史・古谷雅彦・関　ヨシ・高橋清文・千葉敏朗・土田隆夫・長澤展生
新田康則・本多啓太・山本　克・山田和子・新潟大学積雪地域災害研究センター
新潟県小出農地事務所・川口町建設企業課・関越地域地質研究所・江東工業株式会社
川口町シルバー人材センター

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯……1
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……4
第Ⅲ章　発掘調査
　第１節　調査の方法と経過
　　第１項　試掘調査……7
　　第２項　調査区の設定……10
　　第３項　調査の経過……11
　第２節　土層堆積
　　第１項　基本土層……12
　　第２項　土壌採取……13
　第３節　土壌理化学分析
　　第１項　はじめに……14
　　第２項　火山灰の分析方法……14
　　第３項　各試料の分析結果……14
　　第４項　考　察……16
　第４節　遺物の出土状況
　　第１項　概　要……18
　　第２項　垂直分布……20
　　第３項　平面分布……20
　第５節　検出遺構
　　第１項　M3－1号土坑……23
　　第２項　M3－2号土坑……23
　　第３項　M3－3号土坑……23
　　第４項　M4－1号土坑……23
　　第５項　M5－1号土坑……23
　　第６項　M6－1～3号土坑……25
　第６節　出土遺物
　　第１項　縄文土器……26
　　第２項　中世陶質土器……33
　　第３項　石　器……35
第Ⅳ章　ま と め
　第１節　総　括……42
　第２節　西倉第１群土器について……43
　第３節　西倉第２群土器について……44
　第４節　西倉遺跡の石器群とその組成……47

挿　図　目　次

第１図　川口町周辺の段丘分布図……2
第２図　遺跡周辺図……3
第３図　周辺遺跡分布図……5
第４図　中世遺跡・史跡分布図……6
第５図　試掘調査出土遺物……7
第６図　土層柱状図……8
第７図　遺跡全体図……9
第８図　調査区周辺地形図・グリッド配置図…10
第９図　Ａ区 基本土層図……12
第10図　土層断面位置図……13
第11図　サンプル柱状図……13
第12図　西倉遺跡サンプル２－８に含まれる
　　火山ガラスの化学組成……15
第13図　Ａ区遺物分布図(1)……18
第14図　Ａ区遺物分布図(2)……19
第15図　早期・草創期土器出土分布図……21
第16図　石器出土分布図……22
第17図　Ａ区遺構全体図……23
第18図　土坑実測図(1)……24
第19図　土坑実測図(2)……25
第20図　土　器(1)……28
第21図　土　器(2)……29
第22図　土　器(3)……31
第23図　土　器(4)……32
第24図　土　器(5)……34
第25図　遺跡周辺の石材環境……35
第26図　石　器(1)……38
第27図　石　器(2)……39
第28図　石　器(3)……40
第29図　石　器(4)……41
第30図　爪形文の比較……43
第31図　西倉第Ⅱ群土器の類例……44
第32図　類例資料……45
第33図　遺跡位置図……47
第34図　石錘の大きさ……48

表　目　次

第１表　試掘出土遺物表……8
第２表　発掘調査工程表……11
第３表　各試料の鉱物組成と
　　火山ガラスの形態……17
第４表　Ａ区石器組成表……36
第５表　石器組成表……47
第６表　三角稜磨石出土遺跡表……48

写　真　図　版

図版１　西倉遺跡遠景ほか
図版２　遺物検出状況ほか
図版３　遺構写真
図版４　出土土器（１）
図版５　出土土器（２）
図版６　出土土器（３）
図版７　出土石器（１）
図版８　出土石器（２）
図版９　出土石器（３）

凡　　例

１．遺物の実測図の縮尺は土器が１／２を原則としたが、石器は新潟県埋蔵文化財調査事業団の報告書に倣い、器種により縮尺が異なるものとしている。各図面の下にスケールを記したので参照いただきたい。

２．遺物の実測図には、土器、石器ごとに通し番号を記し、出土層位はローマ数字で記載した。また、石器の実測図には、注記番号の横に石材名と重量を略記した。石材名の略記の方法は、頁岩：Sh、黒色安山岩：BAn、安山岩：An、凝灰岩：Tuf、ホルンフェルス：Ho、粘板岩：Sl 、ハンレイ岩：Gab、閃緑岩：Dio、花崗岩：Gra、蛇紋岩：Ser、とした。

３．遺構の実測図の縮尺は１／20を原則とした。

第Ⅰ章　調査に至る経緯

西倉遺跡は、古くから土器や石器が拾える畑として知られていた。本格的な学術的な調査は、昭和56年に計画された「西倉地区農村基盤総合整備事業」に伴う第１次調査である。調査は安藤文一氏（神奈川県・当時岩倉高校講師）に依頼し約７万㎡の畑地を対象に範囲確認調査を実施した。

調査は対象面積全面に対して表面採集調査を実施し、その成果から試掘調査区の設定を行った。試掘調査および道路拡張工事に伴う緊急発掘調査の結果、全体に均一的に遺物散布が無く、濃淡分布を示し、複数遺跡の存在が推定された。遺物分布の中心は、上部段丘の南半に広がり、下部段丘との比高差２～３ｍを計測した（北半の下部段丘面との比高）。

上部段丘南半に広がる遺跡範囲から縄文時代中期初頭～前葉と中期終末～後期初頭に亘る２段階の活動が確認された。この調査をもって上部段丘南半の範囲を指して「西倉遺跡」として周知した。

昭和61年に圃場整備計画に対して、新潟県教育庁文化行政課（以下、県文化行政課と略す）から掘削せずに1.5m 範囲内の盛土工法を採用し、やむを得ず切土工法になる範囲は表土から30㎝ 以内であれば埋蔵文化財保護行政上の措置を必要としないが、30㎝ 以上の切土工法範囲は記録保存措置として発掘調査を実施する旨、指導があった。よって、佐藤雅一氏（当時・三条考古学会）に調査担当を依頼し、道路拡張法線および新規排水路用地に対して第２次調査を実施した。まずは４日間の試掘調査を実施し、その結果を踏まえてのべ23.5日間の発掘調査を行った。その結果、第１次調査の成果を追認すると共に、第１次調査で後期初頭の三十稲葉式土器に伴出したと思われた出自不明の貝殻文土器と櫛状刺突文土器が早期まで遡る資料であること、さらに段丘離水期の縄文時代草創期にも活動痕跡があるという重要な情報が記録された。

川口町教育委員会は、西倉遺跡が縄文時代草創期まで遡る極めて貴重な遺跡であることが判明したことから後世に保存して残す意味を持って平成３年に町指定史跡に登録した。

平成14年５月20日に新潟県小出農地事務所（以下、県農地と略す）と川口町建設企業課（以下、町建企課と略す）が平成15年度計画している「農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」を打ち合わせしたところ、西倉遺跡の一部が掘削されることが判明したことから町建企課は川口町教育委員会（以下、町教委と略す）に連絡をした。町教委は速やかに県文化行政課に開発行為が遺跡範囲で行われることを伝え、発掘調査の必要性と関連事務手続きの提出などの指導を受けた。町教委には発掘調査を指導できる文化財専門員がいないことから調査担当者依頼について県文化行政課に相談したところ、「第２次調査を担当した佐藤氏が現在津南町教育委員会に在籍されていること、職員派遣協力の対応について」指導を得たことから急遽、７月１日に津南町教育委員会に赴き職員派遣の協力を頂けるようお願いをし、了解いただいた。

職員派遣の了解を得た後、８月23日に県文化行政課・県農地および町建企課・町教委と担当をお願いする佐藤氏との事前協議を実施した。事前協議では、調査方法と調査期間・調査体制などを協議した。特に、調査方法については現地に赴き、開発範囲の確認と試掘調査⇒本調査の２段階方式の進め方、残土置き場の詳細を討議した。また、体制については担当のほかに、主任調査員として倉石広太氏（東村山市・下宅部遺跡調査団）の着任の了解を得た。９月２日には地元住民を対象に開発事業概要と発掘調査実施についての説明会を開催し、協力要請について承諾いただいた。９月13日に佐藤担当と倉石主任調査員が現地で調査範囲と調査方法などの再確認を行った。そして、９月24日から発掘調査に着手した。

（関　　達市）

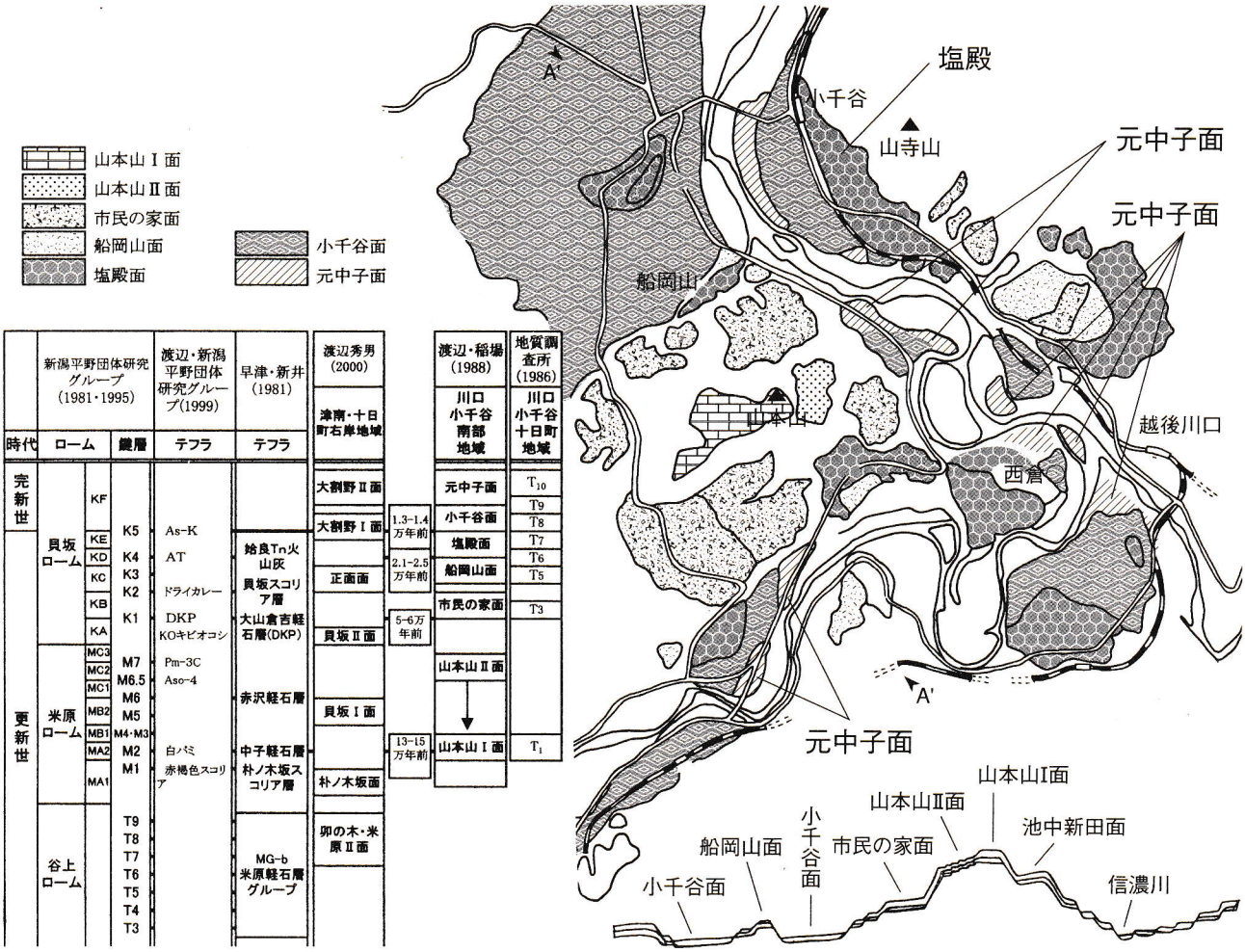
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境（第1・2図）

西倉遺跡は信濃川・魚野川両河川の合流点よりやや上流の信濃川左岸の段丘上、標高は83.7m付近に立地し、信濃川との比高差は27mを測る。秩父山地甲武信ヶ岳に端を発する信濃川は、長野県では千曲川、新潟県に入って信濃川と名を変える日本最長の大河である。中津川や清津川を合わせ、大きく曲流しながら川口町に入り谷川岳を源とする魚野川と合流、さらに新潟平野を北上し日本海に注ぎ込む。

遺跡が所在する川口町は、信濃川と魚野川両河川の合流域に位置し、信濃川に沿って北に小千谷、南には十日町と接する。古くは、信濃川上流の妻有郷・魚野川上流の上田郷への物資運搬・水上交通の要衝、三国街道の宿場として栄えた街である。また、簗や打ち切りなどによる漁労は、昭和の始めまで沿岸住民の生活の特色を示す農閑期の副業として盛んに行なわれ、鮭、鮎、鱒、鰻、鮠の漁獲が知られた。特に鮭が信濃川・魚野川の特産であることは『北越雪譜』に「古志の長岡、魚沼の川口あたりにて漁したる一番の初鮭を漁師、長岡（領主）へたてまつれば例として鮭一頭の米７俵の値を賜ふ。（云々）」と記されていることからも古来珍重されたことが窺える。

信濃川沿岸、特に魚沼層を基盤とした地域はまた河岸段丘が発達した場所として知られ、長岡以北の新潟平野とは著しく異なった様相を見せる。魚沼層群は更新世前期を通じ堆積した陸成の河川堆積物と



第１図　　川口町周辺の段丘分布図

内湾性海成堆積物の互層から構成される最大厚が300m以上にも及ぶ基盤層であり、信濃川中･下流域における河岸段丘の発達の違いは魚沼層群の地盤運動に起因する。更新世後期に入り魚沼層群の急激な上昇運動の広がりと信濃川の下刻作用が反映されたもので、現在まで及ぶものと考えられる。

川口町・小千谷地域は十日町盆地と新潟平野の境界部であるとともに魚沼丘陵と東山丘陵の接合部にあたり信濃川段丘群の中で最も隆起量の大きい地域とされ、こうした激しい隆起活動は信濃川が曲流する一因となる。本地域では信濃川が魚沼層群の向･背斜軸と斜交して流れており、段丘分布については「活褶曲による段丘面の変位が大きいため、段丘面の識別にもっとも有効な標高と比高による識別法には限界」（地質調査所1986）とされる。そのため、ここでは新潟平野団体研究グループ（1979）によって区分された段丘分布図を基礎に、テフラ層から段丘形成年代の推定値と対比したものを整理した（註1）（第1図）。各段丘の形成年代は高位段丘から山本山Ⅰ・山本山Ⅱ面で14－13万年前、市民の家（池中新田）面で3万年前、船岡山（海潮寺）面で2.3万年前、塩殿面2.1万年前、小千谷面で1.3万年前、元中子面で6千年前とされる。西倉遺跡の立地する小千谷面は完新世に入って離水したと考えられており、信濃川対岸の新敷遺跡（縄文時代早期 押型文）が立地する他、小千谷市の百塚西C遺跡では自然流路内から縄文時代草創期 隆起線文が出土している。また新敷遺跡より一段高い塩殿面は、更新世の最も新しい時期に形成された段丘面と考えられており、荒屋遺跡（旧石器時代）が立地している。

第2図は西倉周辺の段丘地形の細別図（1.元中子面、2・3・4.小千谷面、5.塩殿面）である（註2）。信濃川と魚野川の合流付近では、高さ数m以下の小段丘崖によって隔てられた数個の段丘面が生成され、段丘が複雑化している。新潟平野団体研究グループ（1979）によれば、信濃川の蛇行や隆起活動だけではなく、魚野川の合流による流路の移動も関与したためとされる。こうした微地形レベルでの段丘区分･対比が明らかになることによって、当時のより詳細な地形環境の復元が可能であると考える。

第2図　　遺跡周辺図（佐藤1988を改変）

第２節　歴史的環境（第３図）

川口町に所在する遺跡は登録されているもので68遺跡が確認されており、古くは木沢集落（現在の行塚遺跡周辺）などの遺物を収集保存して村民に遺跡の大切さを啓蒙した星野亀吉（註３）や堀之内町の井口通泰、長岡市の星野芳郎といった研究者らの精力的な遺跡分布調査（註４）によるところが大きい。

川口町における遺跡発掘調査は、1958年、芹沢長介（当時）明治大学助教授らによって行なわれた荒屋遺跡（註５）の発掘調査が初例である。荒屋遺跡はその後、1988・1989年に芹沢を中心とする東北大学によって第２次・第３次発掘調査、2001年には新潟県教育委員会によって遺跡分布調査が行なわれている。荒屋遺跡以外では、1979年に新潟県教育委員会により関越高速自動車道建設に伴って、上の原Ⅱ・Ⅲ、岩出原天神、木ノ下屋敷遺跡の調査（藤巻ほか1980）が行われた他、川口町教育委員会によって1981年に西倉第１次発掘調査（安藤1982）、1987年に西倉第２次発掘調査（佐藤1988）が実施されている。木ノ下屋敷では縄文時代草創期とみられる尖頭器が出土し、西倉遺跡では縄文時代早期「貝殻沈線文系」の他、前期・中期・後期の遺物が検出されている。特に第２次発掘調査では縄文時代草創期後半の爪形文土器を伴う遺跡であることが確認されている。

川口町には他に発掘調査のなされていない遺跡として、押型文土器が出土した新敷遺跡（３）、縄文時代前期後半から後期前半までの遺物量の多い荒屋Ｃ（４）、行塚（14）、また縄文時代中期以降では、石囲炉が確認された蟹沢（９）、強清水（10）、狐原（11）、上の原Ⅱ（５）（註６）や、縄文時代後期遺物の確認された中山Ⅰ・Ⅱ（12・13）などが知られる。

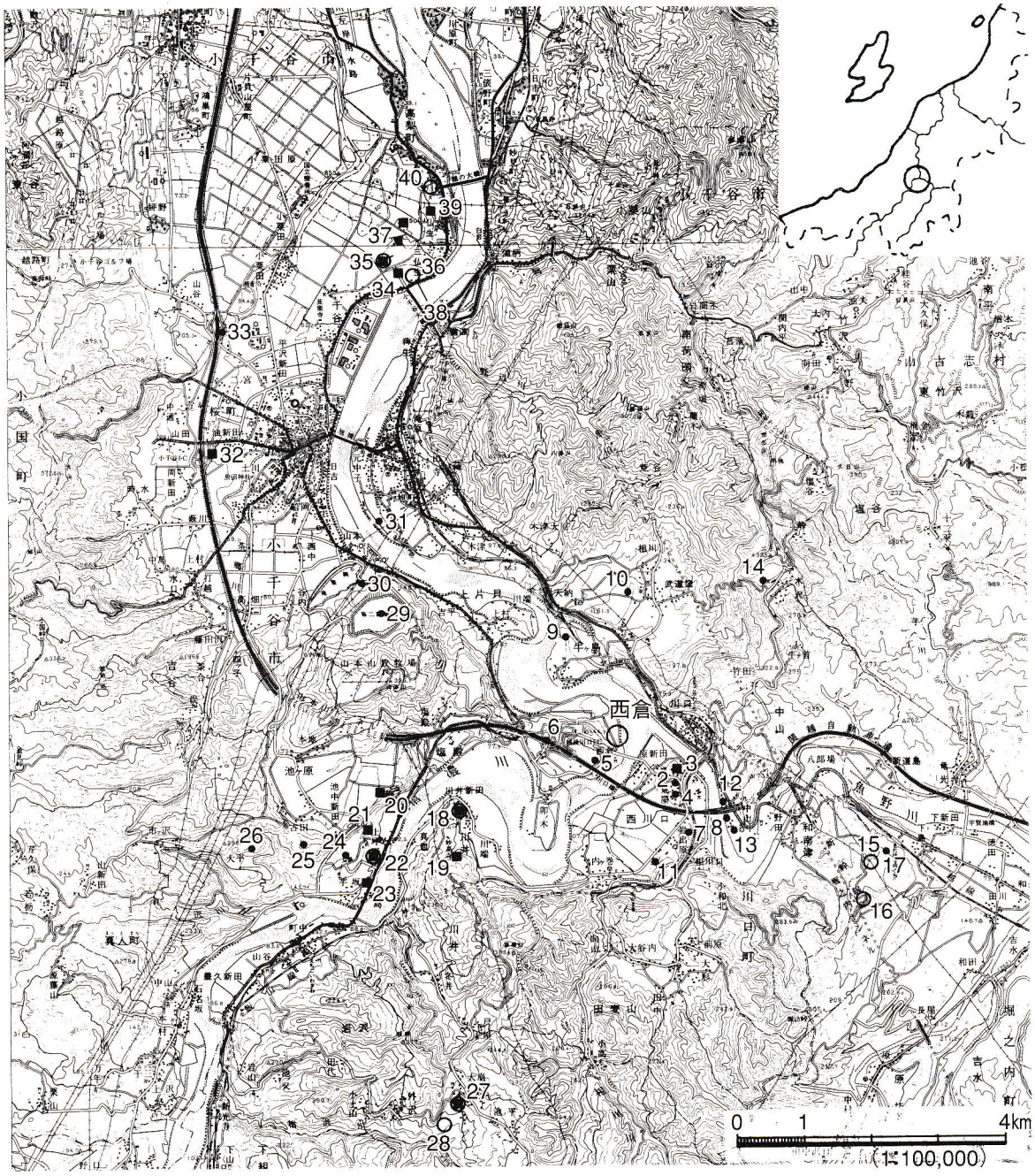
上記遺跡を含め川口町域では、縄文土器片がわずかに確認される遺物包蔵地や時期不明の塚、といった時期や実態の掴めない遺跡が多い、そのため縄文時代の遺跡分布については信濃川と魚野川が合流する地域における様相を、特に縄文時代早期中心に概観する。また中世についても、当該期での遺跡は不明なものが多いことから、史跡や伝承など含めた分布をみることにする。

縄文時代（第３図）　縄文時代草創期の遺跡として、西倉、木ノ下屋敷（８）の他、上ノ原Ａ（15）、本田（18）、妙高寺（19）、三仏生（39）、百塚西Ｃ（38）、城之腰（33）がある。百塚西Ｃで隆起線文土器、三仏生と金塚（35）では爪形文が出土している。上ノ原Ａ、城之腰では局部磨製石斧が確認されている。

縄文時代早期では三仏生と芋坂地域に遺跡が集中しており、前者では三仏生、割目Ａ（37）、百塚東Ｅ（34）、両新田（32）、後者では細島（20）、下蟹沢（21）、墓地の下（23）など押型文土器が出土する遺跡が多い。一方、押型文の他、沈線文が確認されるのは、上蟹沢（22）、大崩北（27）、本田がある。また貝殻･沈線文のみ出土する遺跡では、西倉、上ノ原Ａ、上ノ原Ｂ（16）、上ノ原Ｅ（17）で確認される。遺跡分布を見た場合、本地域では、押型文は信濃川左岸に分布する傾向が強く、沈線文の出土する遺跡は魚沼丘陵に近い範囲に分布する傾向があり、視覚的に異なる分布傾向が見られる。縄文時代早期末～前期では、堂付（40）、百塚東Ｄ（36）で絡条体圧痕文が出土しており、両新田、本田、下蟹沢、中原（24）、中道（29）で羽状縄文を有する繊維土器が確認されている。

縄文時代中期から後期の遺跡としては城之腰、元中子（31）、徳右ヱ衛門山（30）、大平（26）などが規模の大きい遺跡としてあげられる。

本地域での縄文時代での遺跡分布は河川沿岸部に遺跡が集中する特徴があり、縄文時代草創期・早期



■　貝殻・沈線文系土器を出土した遺跡　　○押型文土器を出土した遺跡

No.	遺跡名	時　期	No.	遺跡名	時　期	No.	遺跡名	時　期
1	西倉		15	上ノ原A	旧石器／縄文早～中期	29	中道	縄文時代前期～後期
2	荒屋A	旧石器時代	16	上ノ原B	縄文時代早期	30	徳右ヱ衛門山	縄文時代中期
3	新敷	縄文時代早期／中期	17	上ノ原E	縄文時代早期・中期	31	元中子	縄文時代中期～後期
4	荒屋C	縄文時代前期～後期	18	本田	縄文時代草創期～前期	32	両新田	縄文時代早期～前期／後期
5	上の原Ⅱ	縄文時代中期	19	妙高寺	縄文時代草創期～後期	33	城之腰	縄文時代草創期／中期～後期
6	上の原Ⅲ	縄文時代中期	20	細島	縄文時代早期／中～後期	34	百塚東E	縄文時代中期～晩期
7	(岩出原)天神	縄文時代中期末	21	下蟹沢	縄文時代早期～前期	35	金塚	縄文時代草創期～前期
8	木ノ下屋敷	縄文時代	22	上蟹沢	縄文時代早期～前期	36	百塚東D	縄文時代早期～晩期
9	蟹沢	縄文時代中期	23	墓地の下	縄文時代早期～中期	37	割目A	縄文時代早期～前期
10	強清水	縄文時代中期	24	中原	縄文時代前期～後期	38	百塚西C	縄文時代草創期～晩期
11	狐原	縄文時代中期	25	大石畑	縄文時代早期～中期	39	三仏生	縄文時代草創期～前期／後期
12	中山Ⅱ	縄文時代中期～後期	26	大平	縄文時代中期～後期	40	堂付	縄文時代早期～晩期
13	中山Ⅰ	縄文時代中期～後期	27	大崩北	縄文時代早期～後期			
14	行塚	縄文時代前期～後期	28	大崩南	縄文時代早期～後期			

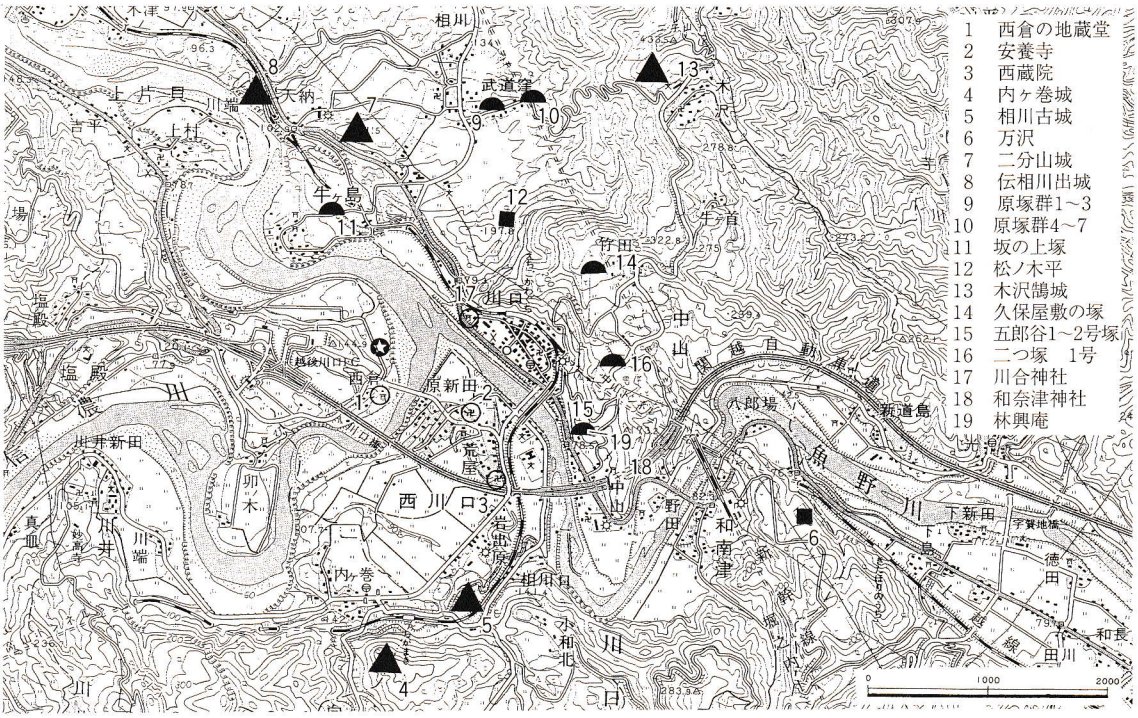
国土地理院発行「ながおか」「おじや」1/50,000使用

第３図　周辺遺跡分布図

の段階でもそうした傾向は変わらない。ただしその場合、河川の下刻を考慮に入れなければならず、河川沿岸部の小千谷面などの低位段丘上は草創期においてはシルトロームが堆積する自然堤防上のような環境と考えられる。それに対し、同様の遺跡でも早期においては河川の後退によって、後背湿地を一段下の段丘面に望むような川辺環境にあったものと推測される(註7)。こうした縄文時代草創期から早期の遺跡立地の変化については「礫河床を有する河川」(草創期)から「沼沢地の水辺環境」(早期)(佐藤・石坂・岡1991)という言葉で捉えられる。すなわち豊富なサケ・マスなどの水産資源獲得に対し積極的な環境から沢や湧水などの水資源供給や洪水などに見舞われない比較的安定した環境への立地選択の変化であり、そこには植物資源獲得への対応といった意味もあったものと考えられる。

中　世(第4図)　小千谷市や堀之内町では中世に所属する遺跡として、山頂や尾根を利用した山城が多く残されており、川口に近いところでは新田一族の田中氏の居城とされる内ヶ巻城(4)がある。川口町域では、この時期の遺跡は万沢(6)で確認されているだけだが、山城と伝えられるものとして、木沢鵠城(13)、星野親忠の居城と伝えられる二分山城〈相川城〉(7)や相川城の出城跡(8)、内ヶ巻城と関係が深い相川古城(5)、屋敷跡と伝えられる松ノ木平(12)が知られる。また塚については相川と中山地域に小規模ながら群集しており、山城・塚の分布は魚野川との合流地点より上流の信濃川南岸域と魚野川と信濃川の合流域東岸に集中が認められる。

遺跡付近の古文化財としては、安養寺(2)や西蔵院(3)、西倉の地蔵堂(1)がある。万慶の作と伝えられる西倉の地蔵堂はかつて西倉遺跡の所在する岩平にあったともいわれる。この他、川口町域では魚沼五座の一つである川合神社(17)や古事記にも登場する和奈津神社(18)などがあり、古くからの要衝として栄えていたことを窺わせるが、文献に残された情報が少ないため、当該期の様相は不明な点が多く、今後の調査により川口の歴史が明らかにされていくことを期待したい。



第4図　中世遺跡・史跡分布図

第Ⅲ章　発掘調査

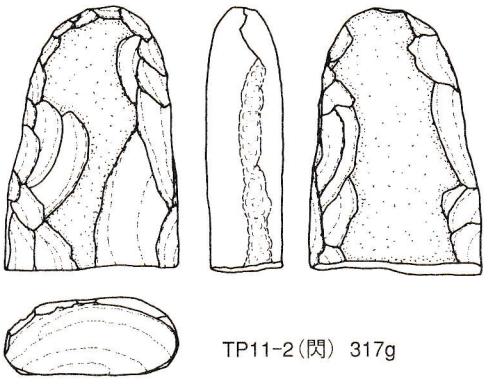
第１節　調査の方法と経過

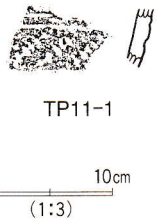
第１項　試掘調査（第５図～第７図・第１表）

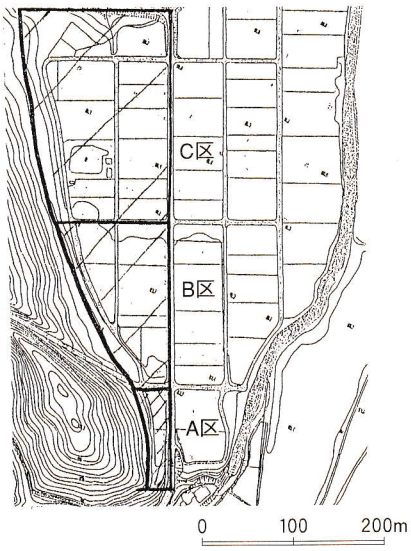
今回の西倉遺跡確認調査範囲は農道の両端１～２ｍの拡幅範囲となる部分が大半であった。そのため発掘調査は農道拡幅範囲が比較的広く設定される段丘入り口部分を全面廃土調査とし、拡幅範囲の幅が２ｍに満たない部分に関しては、遺跡確認調査面積に対して10％面積の試掘調査を発掘調査期間と並行して行ない、遺物の分布状況如何によって適宜調査範囲の拡張を検討することとした。なお調査に際し、圃場区画に合わせて調査区を設定した。南からＡ区・Ｂ区・Ｃ区と呼称している（第５図）。

試掘調査の目的は、①第２次発掘調査で遺構及び遺物の集中が認められたＡ区北側およびＢ区南側での包含層の依存状況の確認。②同調査で遺物出土が確認された黄褐色シルトローム層（７層）と漸移層（６層）での文化層の追認。③第１次調査の表面採集で遺物集中の傾向が見られたＣ区での遺物のあり方とＢ区（上部段丘）からＣ区（下部段丘）への変換を土層から確認すること。以上３項目である。

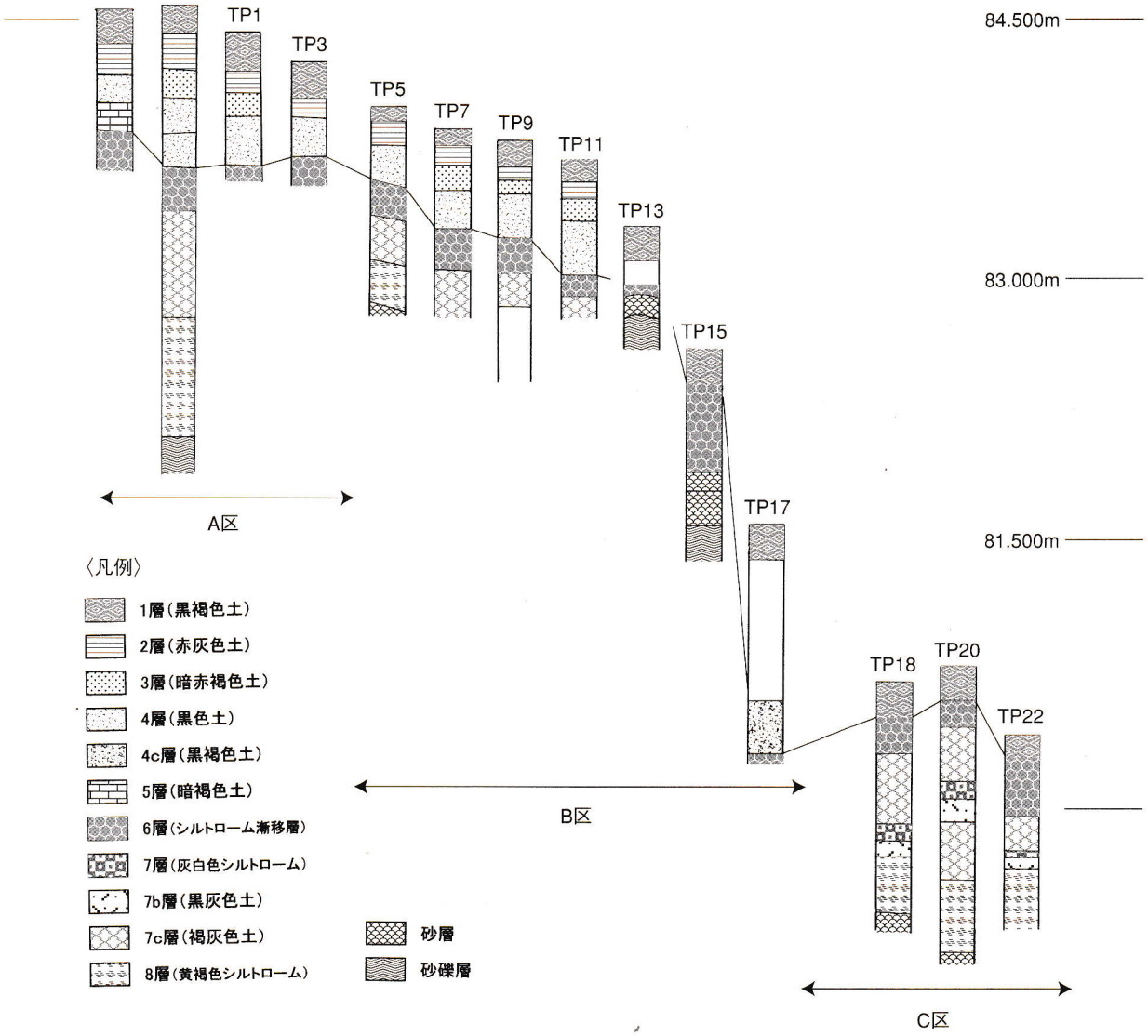
試掘調査は任意に設定した１×２ｍの試掘抗27地点を調査予定としていたが、収穫期のため設定できない所が多く、結果的に22地点に関しての調査となった。期間は2002年９月26日～10月８日（のべ6.5日間）まで行なった。試掘調査の結果、Ｂ区の北側およびＣ区では表層以下の包含層がほとんど削平を受けていたため、表層以下での遺物は検出されなかったが、Ａ区のＴＰ１～３で遺物が纏まって検出された他、Ｂ区においてもＴＰ４・ＴＰ10～ＴＰ11においてわずかではあるが、磨石１点の他、磨製石斧１点、土器１点などの出土が認められている（第５図）。遺物はすべて２～４層中からの出土であり、期待した６層および７層中での遺物は確認されなかった。土層堆積に関する新たに得られた情報として、Ｃ区（下部段丘）の土層でシルトロームに挟まれるように腐食土が確認されている。上部段丘（Ａ区・Ｂ区）との段丘形成時期が異なることに由来するものと考えられる。これらの成果を検討した結果、Ａ区の拡張調査とＣ区（下部段丘）の理化学土壌分析用のサンプル採取作業を行なうことが決定し、Ａ区拡張調査については10月15日より開始した。







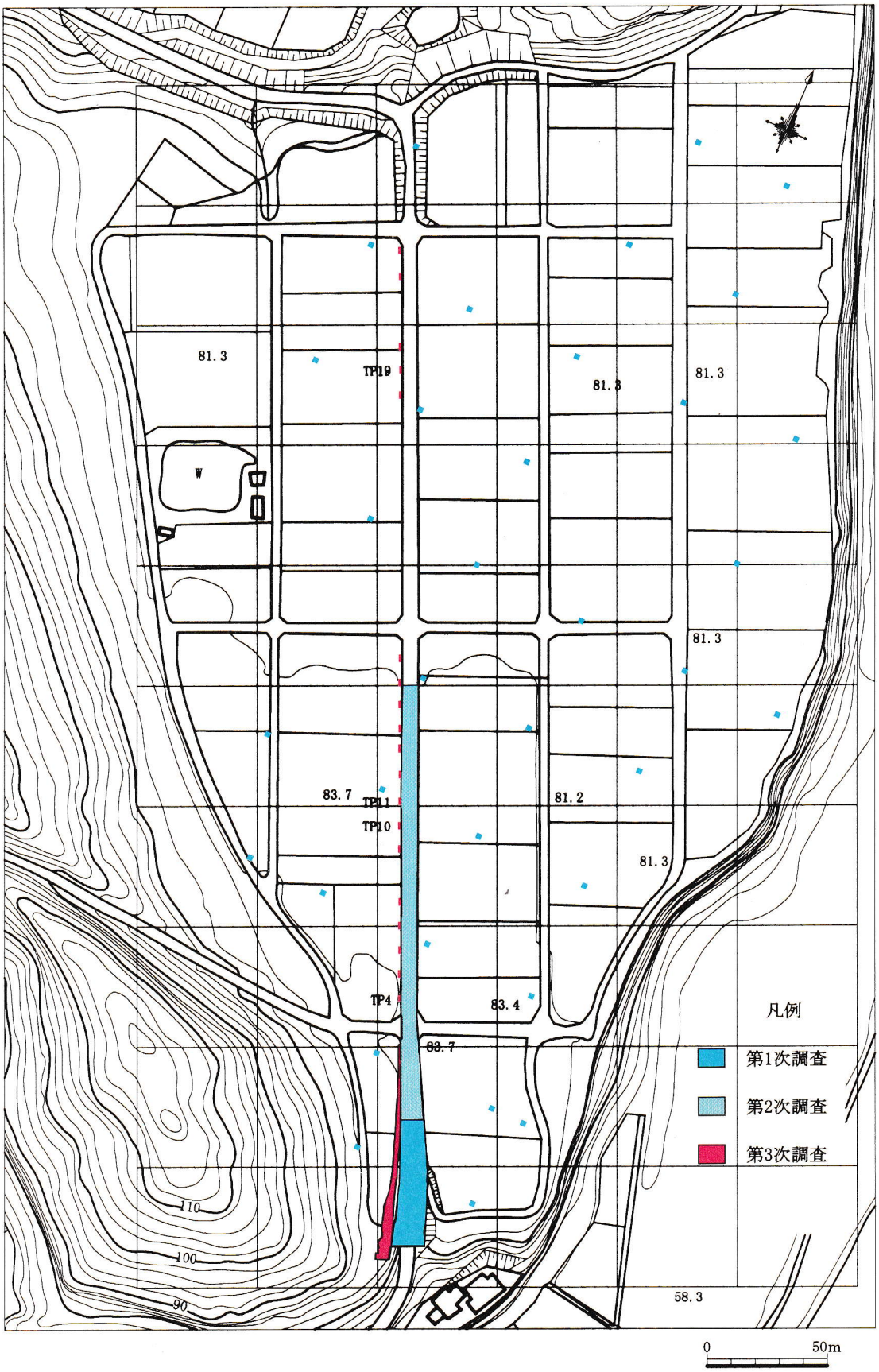
第５図　試掘調査出土遺物



第６図　土層柱状図

	土器	石器	主　要　遺　物	備　　考
ＴＰ１	1	5	剥片5点	
ＴＰ２	2	1	三角稜磨石1点・ 平行沈線文・前期土器片	
ＴＰ３	2	4	剥片4点	
ＴＰ４		1	剥片1点	
ＴＰ10		4	剥片4点	焼け礫1点
ＴＰ11	1	1	磨製石斧1点・磨石1点 絡条体圧痕文土器片	

第１表　試掘出土遺物表

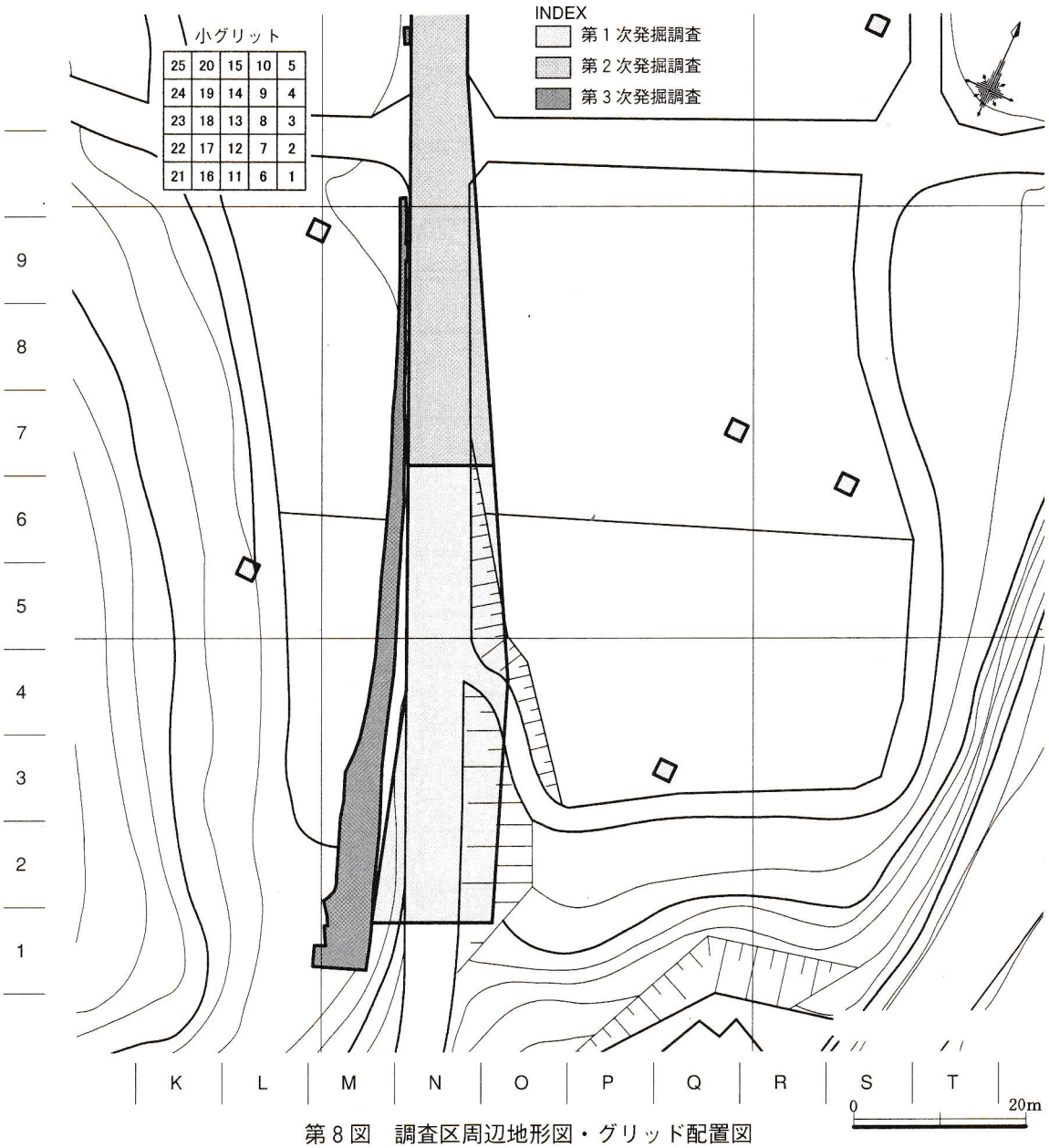

81.3
TP19
81.3
81.3
W
81.3
83.7
TP11
TP10
81.2
81.3
TP4
83.4
83.7
凡例
第1次調査
第2次調査
第3次調査
110
100
90
58.3
0
50m

第７図　遺跡全体図

第２項　調査区の設定（第８図）

第３次発掘調査区の設定は第２次発掘調査の調査区に合わせるため、道路法線センター軸№７（国家座標Ｘ＝140546.066　Ｙ＝31212.810）と同№９（国家座標Ｘ＝140509.576　Ｙ＝31229.197）を見通すラインをＹ軸、それに直交する直線をＸ軸とする座標軸を使用した。調査区はＹ軸から３ｍ西に寄ったラインをグリッド境として10×10mのグリッドを西倉遺跡全体に区画し、大グリッドとした。グリッドの配列については、南北軸では南からアルファベット数字で１から連番に、東西軸では西からＡから連番となるよう設定した。また大グリッドの中をさらに２×２ｍのグリッドを25区画し、グリッド配置図（第８図に示した）のように配置し、小グリッドとした。第３次発掘調査ではＭ１～Ｍ９グリッド（大グリッド）までを使用し、小グリッドについてはＭ１－１Ｇ（小グリッド数字の後にＧをつけた形）と表記した。

なお、国家座標には日本測地系を使用している。



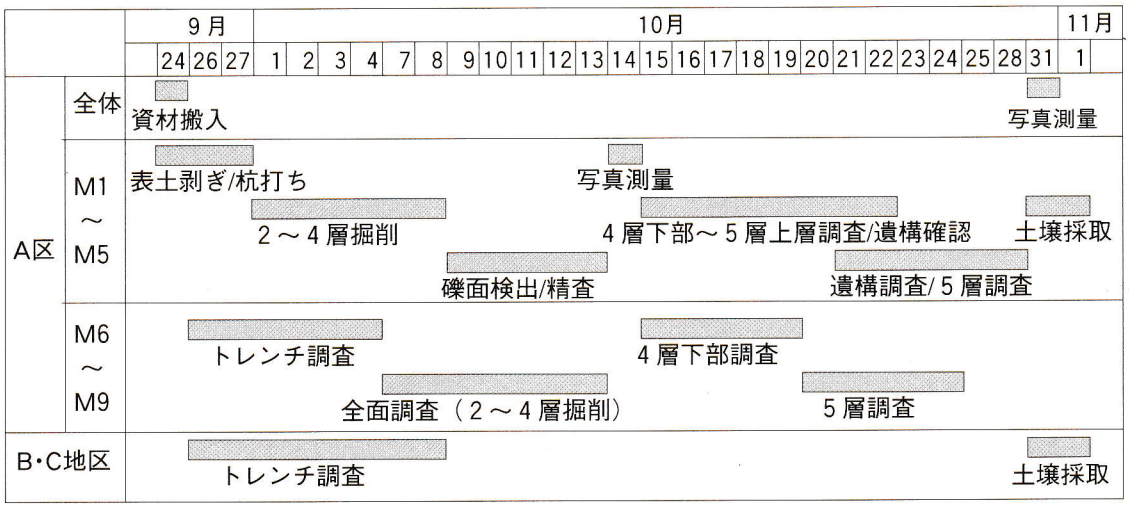
第８図　調査区周辺地形図・グリッド配置図

第３項　調査の経過（第２表）

今年度実施した発掘調査は、第１次発掘調査及び第２次発掘調査の成果を踏まえて実施したものであり、調査目的として①前回調査までに出土した縄文時代草創期中葉（爪形文）・早期後半（常世式）・中期前葉・後期前葉時群の検出。②これら遺物群の層位的発掘及び出土層位の認識と遺構の確認。以上の二項目を掲げ実施した。

調査前の状況は杉林の一部が調査範囲に含まれており、さらに東壁際には崩落防止の金網が包含層中に残っていた。そのため、表土剥ぎ前に包含層散乱に注意しつつ、立木伐採と下草刈り、障害物の除去が行なわれた。調査は、当初の本調査予定範囲より東側40cm 幅の範囲を除いた約200m² の表土剥ぎ作業から開始し、表土剥ぎは極力、重機（バックホー）によったが、畑地にため重機の届かない南側や調査幅の狭い北側については人力で対応した。遺物包含層の掘削はすべて人力で行ない、排土処理にはベルトコンベアーを使用して作業の迅速化を図った。排土置き場は事前協議の際に地権者の承諾をお願いしていた西側の調査区外を借用した。なお、拡張調査の決まったＭ６以北については調査歩道とベルトコンベアー置き場として急遽、法線外２ｍの範囲の借用をお願いした。

表土除去後、土層堆積確認用のトレンチを３ヶ所設定した。その結果２層が近代以降遺物との混在が確認されたため、３層上面までは小グリッドによる遺物取り上げとした。なお表層と２層から中世遺物が確認された。わずか２点のみであったが、本遺跡での新確認事項と言える。３層下位より４層中位にかけて縄文時代早期から後期前葉の遺物とともに、円礫の集中が確認された。集石が混在している可能性を考え、礫面の検出と図化を行なった。４層上面では礫を残しての作業であったため、壁面等断面での遺構の確認に努めた。遺構検出のための精査は５層上面から遺構のプランが明確に確認できる６層上位にかけて草創期遺物を検出する目的も含め行なった。明らかに植物痕と判断したプランに関しては遺構とせず、遺物の抽出のみとした。また第２次調査で６層中位より石核・チョッパー出土の事実から、発掘調査範囲面積に対し、10％面積分の確認調査区を設定したが、６層以下からの遺物の検出はされなかった。

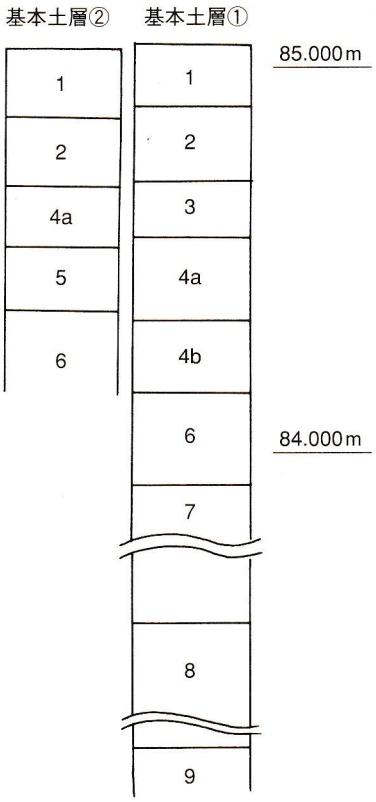


第２表　発掘調査工程表

第2節　土層堆積

第１項　基本層序（第９図）

西倉遺跡における土層堆積状況を把握するため、発掘調査範囲に３ヶ所のトレンチを設定し、調査区全体での土層と対応を図った。その結果、堆積の良好な２本の土層断面を基本層序とした。基本層序は試掘調査の土層ともほぼ対応するが、第１次および第２次調査での基本土層との対応は取れていなかったため、整理作業時に報告書の記述と出土遺物から層序の整理を行ない、相当層と判断されるものを所見として残すこととした。そのため、これまで使用していたローマ数字での層位名と区別するため、本報告では層位名をアルファベット数字で記載することとした。



第９図　Ａ区基本土層図

Ａ区：基本土層（第９図）

１層…（黒褐色土）耕作土。 粘性ややあり、しまりなし。

２層…（赤灰色土） 粘性ややあり、しまりややあり。
層厚は10～15cm を測る。粒径１－２㎜の黄白色粒子を多く含む。遺物は近代のものを含むことから比較的新しい堆積土と考えられる。（第１・２次調査のⅡａ層に相当する）

３層…（暗赤褐色土） 粘性ややあり、しまりなし。層厚は10～15cm を測る。２層よりも含まれる粒子は少なく、より赤みを帯びる。縄文後期から早期の遺物が出土した。（いわゆる「栗褐色土」（註８）と呼ばれる土層で、第１・２次調査のⅡｂ層に相当する。）

４層…（黒色土） 粘性ややあり、しまりなし。層厚は20～40cm を測る。砂粒の含有によって上・下（４ａ・４ｂ）に細分され、下層ほど砂粒の含有率が高く、また粘性が増す。縄文時代早期の遺物を上層中心に包含する。（２次調査でのⅢ層に相当。）

５層…（暗褐色土） 粘性ややあり、しまりややあり。調査区の南側でのみ確認され、４層と６層の間に挟在する層。４層同様、縄文時代早期の遺物を包含する。（第１次調査でのⅢｂ層に相当する。）

６層…（シルトローム漸移層） 粘性あり、しまり強い。層厚は15cm ～20cm を測る。砂質シルトローム。（第２次調査で縄文時代草創期爪形文が出土している。 Ⅳ層）。

７層…（灰白色土）粘性なし、しまり弱い。砂質の強いシルトローム。７層以下に火山ガラスと見られる白色粒子が顕著に確認される。（第２次調査で石核、局部磨製石斧の再生剥片が出土 Ⅴ層）。

８層…（黄褐色土）
粘性、しまりとも強い。ハードシルトローム

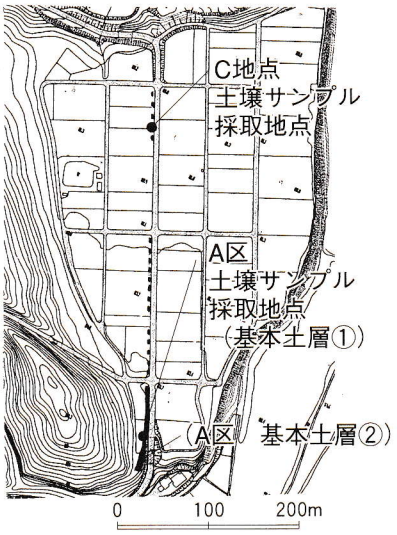
９層…砂礫層
粒径10～20cm の礫からなる信濃川旧河道跡。Ｂ区では上層に粗粒砂が堆積するが、これがＡ区での９層と一連のものであるかは不明である。

第２項 サンプリング（第10・11図）

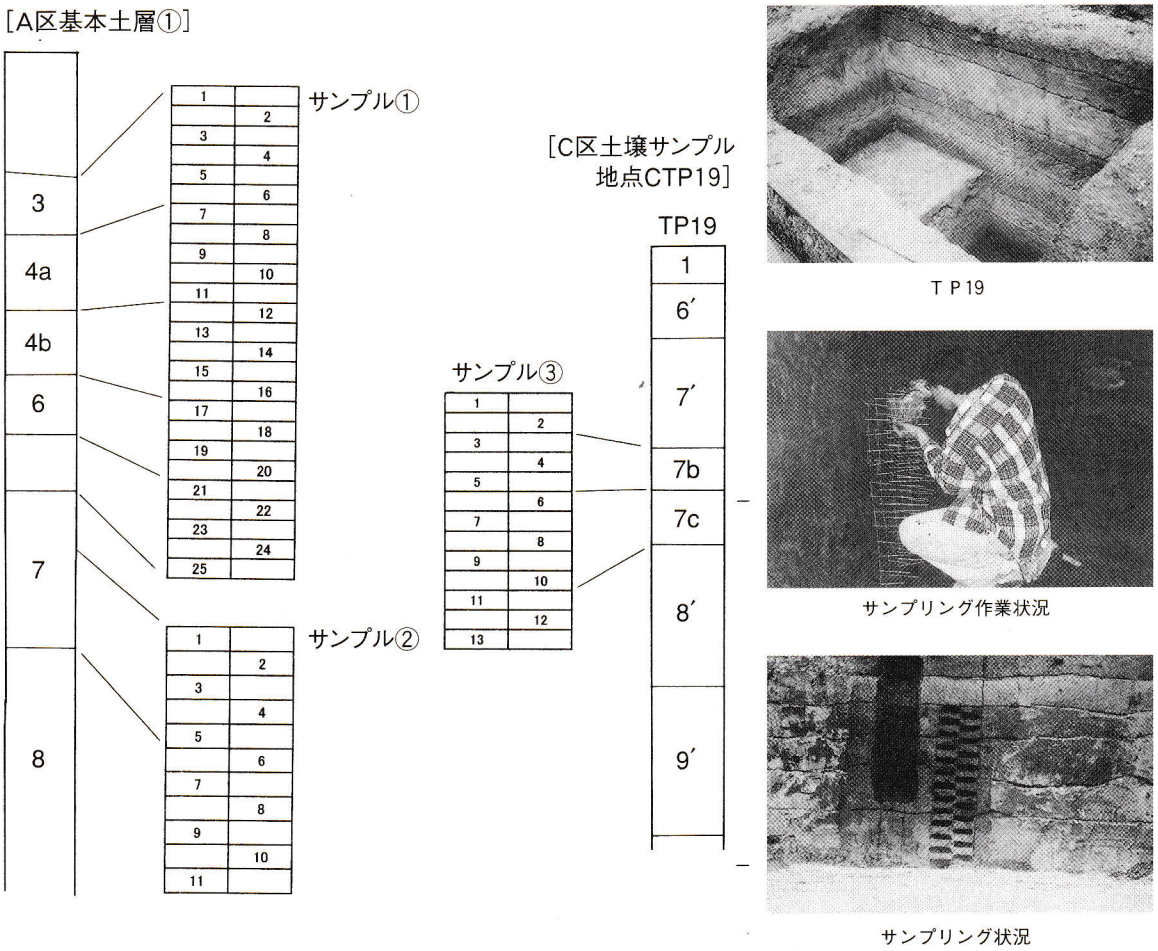
本調査では火山灰分析用にＡ区（上部段丘）でサンプル①・サンプル②の２箇所、Ｃ区（下部段丘）でサンプル③の１箇所の計２地点で３箇所に柱状の土壌サンプル採取をおこなった。

サンプル①・③は３×10cm のメッシュを張り採取した。サンプル①・②はＡ区調査区、サンプル③は試掘調査区（ＴＰ19）に位置する。なお、サンプル②は道路脇の切りとおしの壁面で採取を行なっており、壁面が斜面となっていたため、５×10cm のメッシュを設定しサンプル採取を行なっている。

分析の目的として、第２次調査において確認された４層中のアカホヤ火山灰（町田・新井1978）の確認、上部段丘、下部段丘の形成時期を明らかにすることである。なお、本遺跡は更新世形成段丘であるが、信濃川離水以前の河川堆積層中であっても層序中に火山ガラスのピークが認められれば、火山灰の降灰層準を絞り込むことも可能と考えられる。



第10図　土層断面位置図



第11図　サンプル柱状図

第3節　土壌理化学分析

第１項　はじめに

本稿は、新潟県川口町において発掘調査された西倉遺跡に関する火山灰分析を行い、火山灰層序、遺物包含層の年代および段丘の形成年代を明らかにすることを目的とする。

これまで行われてきた多くの検討では、一般にローム層中に含まれる火山灰は、鉱物組成、重鉱物組成、構成鉱物の屈折率などにより個々の火山灰を同定･対比を行っている。新潟地域において、約13,000年前の浅間草津火山灰（町田・新井、1992：以下Ａｓ-Ｋ火山灰）より下位に関しては、新潟火山灰グループ（1981、1995）、早津･新井（1981）の検討により基本的な火山灰層序が明らかにされている。しかし、いわゆる“黒土”に含まれる火山灰（火山ガラス）については、検討がおこなわれていない。

近年、渡辺ほか（1999）は、従来の検討に加えて火山ガラスの形態、火山ガラスの化学組成を検討し、火山ガラスの化学組成が個々の火山灰の同定に非常に有効であることを示している。また、卜部ほか（2000）は、従来の検討によって知られていたＡＴ火山灰やＡｓ-Ｋ火山灰に加えて、ＡＴ火山灰より上位のローム層から黒褐色土層中に複数の火山灰が挟在されることを明らかにしている。さらに、信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ（2002）は、いわゆる黒土層中に複数の火山灰を認定して、信濃川中流域の河成段丘のローム層から黒土層にいたる火山灰層序を明らかにし、段丘の編年と対比を行っている。

ここではまず基本的な作業として各試料の重鉱物と火山ガラスの有無を検討し、これらが含まれる場合は、重鉱物組成と火山ガラスの形態および火山ガラスの化学組成を明らかにして、広域火山灰との対比についても検討した。

第２項　火山灰の分析方法

試料は、60、120、250メッシュの篩を用いて水洗した。従来の火山灰層（ローム層）の検討で行われていた標準的な作業方法である椀がけ法は、火山ガラスを破砕する可能性が高いので行わない。また、脱鉄処理も少量含まれる薄い火山ガラスを溶出する可能性があるので行っていない。なお、重鉱物組成が観察しにくい場合は、試料を２分し脱鉄処理を行った。

水洗した試料はそれぞれの粒度ごとに乾燥させた。構成粒度による構成鉱物の差異を考慮するため、120メッシュおよび250メッシュの篩分試料を実体顕微鏡および必要に応じて偏光顕微鏡により観察した。

各試料の重鉱物組成と火山ガラスの形態は、それぞれの相対的量比を第３表に示した。火山ガラスの形態は吉川（1976）による区分を用いた。

火山ガラスの化学組成は、新潟大学のＪＸＡ8600型Ｘ線マイクロアナライザーによって測定した。測定条件は、加速電圧15ＫＶ、試料電流1.2×10^{-8}Ａ、ビーム径15μｍである。測定は、ＡＴ火山灰の火山ガラスを標準試料として測定時の補正を行った。各試料は、20粒子以上測定を行った。また、単一粒子内における化学組成のばらつきは極わずかである。分析結果を第12図に示す。

第３項　各試料の分析結果

試料は、Ａ区道路わきの掘削面において、サンプル①、②として連続的に採取したものと、ＴＰ19地点において採取したサンプル③を用いた。各試料の鉱物組成、重鉱物組成、火山ガラスの形態を第３表

に示す。なお、火山ガラスの化学組成分析は、層位区分を参考に１層準について行った。

１．サンプル①

層位区分：３層（試料番号１～５）

重鉱物組成は、全体として斜方輝石を普通に、単斜輝石をわずかに含む（第３表）。

火山ガラスは、全体として極わずかに含む。試料番号１では、扁平型（Ｈａ）、扁平型（Ｈｂ）、試料番号３～５では中間型（Ｃｂ）と多孔質型（Ｔｂ）の火山ガラスを極わずかに含む（第３表）。

層位区分：４ａ層（試料番号６～11）

重鉱物は全体として含有量が少なく、重鉱物組成は、普通角閃石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱物を極わずかに含む（第３表）。

火山ガラスは、全体として極わずかに含む。試料番号７、９では中間型（Ｃｂ）、試料番号10では扁平型（Ｈｂ）の火山ガラスを極わずかに含む（第３表）。

層位区分：４ｂ層（試料番号12～16）

重鉱物は、上位の層位区分４ａ層よりは若干多く含む。重鉱物組成は、全体として斜方輝石を普通に、単斜輝石をわずかに含む（第３表）。

火山ガラスは、含まれない。

層位区分：６層シルトローム漸移層（試料番号17～20）

重鉱物組成は、全体として斜方輝石をわずかに単斜輝石を極わずかに含む（第３表）。

火山ガラスは、試料番号19に多孔質型（Ｔｂ）が極わずかに含まれる。

層位区分：７層シルトローム（試料番号21～25）

本層位区分のうち、試料番号21～23はシルト層、試料番号24～25は砂質シルト層である（段丘の離水以前の堆積物）。

重鉱物組成は、全体として斜方輝石をわずかに単斜輝石を極わずかに含む（第３表）。

火山ガラスは、試料番号21、22に多孔質型（Ｔｂ）が極わずかに混入する。

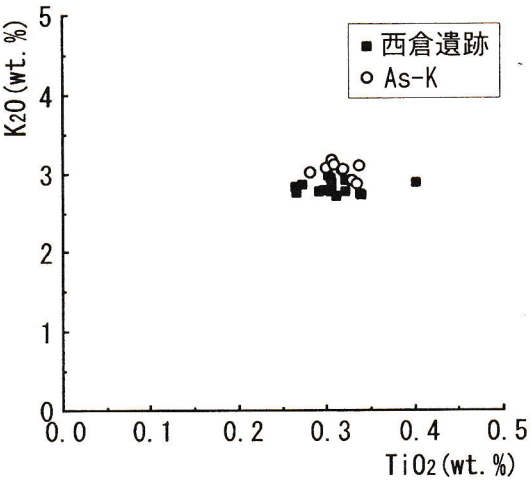
２．サンプル②

層位区分：８層ハードシルトローム（試料番号１～11）

本層位区分は全体に砂質シルト層である（段丘の離水以前の堆積物）。

重鉱物は、砂質であるため比較的多く含まれる。重鉱物組成は、全体として斜方輝石を普通に、単斜輝石をわずかに含む。上位層準では普通角閃石、黒雲母もわずかに含む（第３表）。また、試料番号８において、自形の斜方輝石が多く含まれることが特徴である。

火山ガラスは、全体として中間型（Ｃｂ）と多孔質型（Ｔｂ）の火山ガラスを普通に含む（第３表）。特に、試料番号８は、上下層準と比較しても中間型（Ｃ



第12図　西倉遺跡サンプル2―8に含まれる火山ガラスの化学組成（TiO_2 ― K_2O）

ｂ）と多孔質型（Ｔｂ）の火山ガラスを非常に多く含む特徴がある。

試料番号８に含まれる火山ガラスについては、化学組成を分析した。

３．サンプル③

層位区分：８層シルトローム、ハードシルトローム（試料番号１～13）

本層位区分は全体に砂質シルト層である(段丘の離水以前の堆積物)。下位の試料番号11～13は特に砂質である。

重鉱物は、砂質であるが上記のサンプル②よりは少ない。重鉱物組成は、全体として岩片を多く含む。斜方輝石を極わずかに含む。上位層準では普通角閃石も極わずかに含む（第３表)。

火山ガラスは、全体として中間型（Ｃｂ）と多孔質型（Ｔｂ）の火山ガラスをわずかに含む（第３表)。

第４項　考　察

１．火山灰の対比

信濃川中流域の黒土層に関しては、火山ガラスの有無と形態的特徴および化学組成によっていくつかの広域的に対比が可能な火山灰が認められる（信濃川ネオテクトニクス団研、2002等)。

サンプル①は、信濃川中流域の火山灰層序と比較検討すると、火山ガラスの絶対的な含有量が少なく、分布ピークがなく散在的に極少量の火山ガラスが含まれている。よって、火山灰の層序の組み立てと対比が行えなかった。上位の３層や4ａ層では、火山ガラスがわずかに認定できるが、層序的な組み立てができないことは、遺物が縄文時代早期から後期まで混在することと整合的な結果である。

サンプル②は、全体にシルトや砂質シルトからなり、段丘面が完全に離水するまえの河川の氾濫原での層相を示している。火山ガラスは、全体にＡｓ-Ｋ火山灰（浅間火山起源：約13,000年前）の特徴である多孔質型（Ｔｂ）や中間型（Ｃｂ）を比較的多く含む。特に、試料番号８では、重鉱物に自形の斜方輝石を多く含み、Ａｓ-Ｋ火山灰の特徴を示す。また、この試料は、前後の層準と比較しても多孔質型（Ｔｂ）や中間型（Ｃｂ）の火山ガラスを非常に多く含み、これらの火山ガラスの化学組成は、Ａｓ-Ｋの比較試料の組成領域が一致することから（第12図)、Ａｓ-Ｋの降灰層準であると考えられる。

サンプル③は、サンプル②よりも全体に砂質であり、サンプル②と同様に段丘面が完全に離水するまえの河川の氾濫原での層相を示す。火山ガラスは、サンプル②と同様にＡｓ-Ｋ火山灰の特徴である多孔質型（Ｔｂ）や中間型（Ｃｂ）を含むが含有量が少なく、Ａｓ-Ｋ火山灰の降灰層準は特定できない。

２．段丘面の形成時期

試料の検討から、西倉遺跡の段丘面は、サンプル①、②の地点においてＡｓ-Ｋ火山灰の降灰時期には氾濫原であり、現在の標高差で２ｍほど下位のサンプル③地点はＡｓ-Ｋ火山灰の降灰時には河川の流路ではないが、氾濫原の中でも流路に近く降灰した火山灰が撹乱を受けているものと考えられる。よって、両面はほぼ同時期に氾濫原化して徐々に離水していくが、氾濫原上の地形的な違いにより野外での層相と火山灰の組成が異なっている。これらの面が完全に離水するのは、火山灰層序からは特定できないが、遺物の産出状況から、縄文時代草創期（Ａｓ-Ｋ火山灰降灰以降）であると判断できる。

西倉遺跡　サンプル①

			構成鉱物				重鉱物						火山ガラス							
層位	試料番号	層相	重鉱物	斜長石	軽石	火山ガラス	黒雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	鉄鉱物	その他	扁平型(Ha)	扁平型(Hb)	中間型(Ca)	中間型(Cb)	多孔質型(Ta)	多孔質型(Tb)	その他	備考
3	1	黒土	△	◎	△	△△	×	×	○	△	×	△	△△	△△	×	×	×	×	×	
	2	黒土	△	○	△	×	×	△	△△	△△	×	△△	×	×	×	×	×	×	×	
	3	黒土	△	◎	×	△△△	×	△	○	△△	×	△△	×	×	×	△△△	×	△△△	×	
	4	黒土	△	○	△	△△△	×	△	○	○	△	○	×	×	×	×	×	△△△	×	
	5	黒土	△	○	×	△△	×	×	○	△	×	△	×	×	×	△△△	×	×	×	
4a	6	黒土	△	◎	×	×	×	×	○	○	△	○	×	×	×	×	×	×	×	
	7	黒土	△	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	8	黒土	△	△	×	×	×	△△△	△△	△△△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	9	黒土	△△△	△△	×	△△△	×	×	×	×	△△△	×	×	×	×	△△△	×	×	×	
	10	黒土	△	×	×	△△△	×	×	△	×	×	×	×	△△△	×	△△△	×	×	×	
	11	黒土	△	×	×	×	△△△	△△△	△	△△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
4b	12	黒土	△	△	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	13	漸移	○	○	×	×	×	△	○	△	×	△△	×	×	×	×	×	×	×	
	14	漸移	○	○	×	×	×	×	○	△	×	△	×	×	×	×	×	×	×	
	15	漸移	△	○	×	×	×	×	△	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	16	漸移	△	△	×	×	×	×	△	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
6	17	漸移	△	△	×	×	×	×	△	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	18	漸移	△	△	×	×	×	×	△	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	
	19	シルト	△	△	×	△△△	×	×	△	△△	×	×	×	×	×	×	×	△△△	×	
	20	シルト	○	△	×	×	×	×	○	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
7	21	シルト	△	△	×	△△△	×	×	△	△△	×	×	×	×	×	×	×	△△△	×	
	22	シルト	△	◎	×	△△△	×	△	△	△	×	×	×	×	×	×	×	△△△	×	
	23	砂質	△	△	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	24	砂質	△	○	×	×	×	△	△	△△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	25	砂質	○	○	△	×	×	△	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	

西倉遺跡　サンプル②

			構成鉱物				重鉱物						火山ガラス							
層位	試料番号	層相	重鉱物	斜長石	軽石	火山ガラス	黒雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	鉄鉱物	その他	扁平型(Ha)	扁平型(Hb)	中間型(Ca)	中間型(Cb)	多孔質型(Ta)	多孔質型(Tb)	その他	備考
7	1	砂質	○	◎	×	△	△△	△	○	△	×	△	×	×	×	△△	×	△△	×	
	2	砂質	○	○	×	◎	×	△	○	△	×	×	×	△	×	○	×	○	×	
	3	砂質	○	○	×	○	△△	△△	△	△	×	△	×	△△	×	△	×	△	×	
	4	砂質	○	○	×	△	△△	△	△	△△	×	○	×	△△	×	△	×	△△△	×	
	5	砂質	○	○	×	×	×	△△	△	△△	×	○	×	×	×	△△	×	△△	×	
8	6	砂質	○	○	×	◎	△	×	○	△	△	○	×	×	×	○	×	◎	×	
	7	砂質	○	○	×	△	×	×	○	△△	△	△	×	×	×	△	×	△△	×	
	8	砂質	◎	○	○	◎	×	×	◎	○	○	△	×	×	×	◎	×	◎	×	
	9	砂質	○	○	△	○	×	×	○	△	△	△	×	×	×	○	×	△	×	
	10	砂	△	○	×	△	×	×	○	△	△	△	×	×	×	△	×	△△	×	
	11	砂	○	○	△	○	×	×	○	△△	△△	△△	×	×	×	△	×	○	×	

西倉遺跡　サンプル③

			構成鉱物				重鉱物						火山ガラス							
層位	試料番号	層相	重鉱物	斜長石	軽石	火山ガラス	黒雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	鉄鉱物	その他	扁平型(Ha)	扁平型(Hb)	中間型(Ca)	中間型(Cb)	多孔質型(Ta)	多孔質型(Tb)	その他	備考
7′	1	砂質	△	○	×	△△△	△△△	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	△△△	×	
	2	砂質	△	○	×	△△△	△△△	△△△	×	×	×	○	×	×	×	△△△	×	△△△	×	
7b	3	砂質	△	○	×	△△	△△△	×	×	×	×	△	×	×	×	△△	×	△△	×	
	4	砂質	△	○	×	△△	△△△	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	△△	×	
	5	砂質	△	○	×	△△	△△△	×	×	×	×	△	×	△△△	×	△△△	×	△△	×	
7c	6	砂質	△	△	×	△△△	△△△	×	△△	×	×	△	×	×	×	△△△	×	△△△	×	
	7	砂質	△	△	×	△△△	△△	×	×	×	×	△	×	△△△	×	△△△	×	△△△	×	
	8	砂質	△	△	×	△△	×	×	×	×	×	△	×	△△	×	△△△	×	△△	×	
	9	砂質	△	△	×	△	△△	×	×	×	×	△	×	△△△	×	△	×	△	×	
	10	砂質	△	△	×	△△	△△△	×	△△△	×	×	△	×	△△△	×	△△	×	×	×	
8′	11	砂	△	○	×	△△	△△△	×	△△△	×	×	△	×	×	×	△△△	×	△△△	×	
	12	砂	△	○	×	△△	△△△	×	×	×	×	△	×	×	×	△△	×	×	×	
	13	砂	△	△	×	△△	△△△	×	×	×	×	△	×	×	×	△△△	×	△△	×	

◎：多い、○：普通、△：わずか、
△△：ごくわずか、△△△：まれ、
×：含まない

第３表　各試料の鉱物組成と火山ガラスの形態

第４節　遺物の出土状況　（第13～16図）

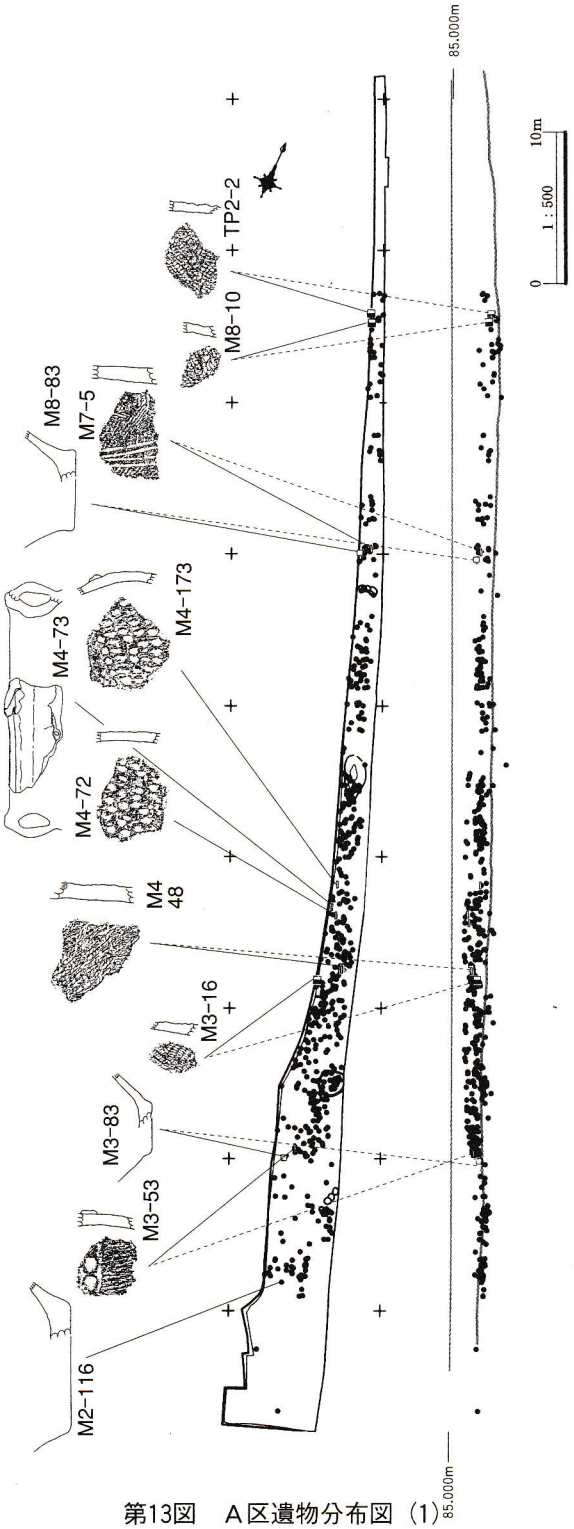
第１項　概　要

Ａ区（以下、調査区とする）での出土遺物はＭ３～Ｍ６グリッドを中心に分布する。また、垂直分布では、前述したように中・近世を含む比較的新しい堆積層と考えられる１層から２層を除いた縄文時代のプライマリーな土層では３層から５層までの出土が大半を占める。

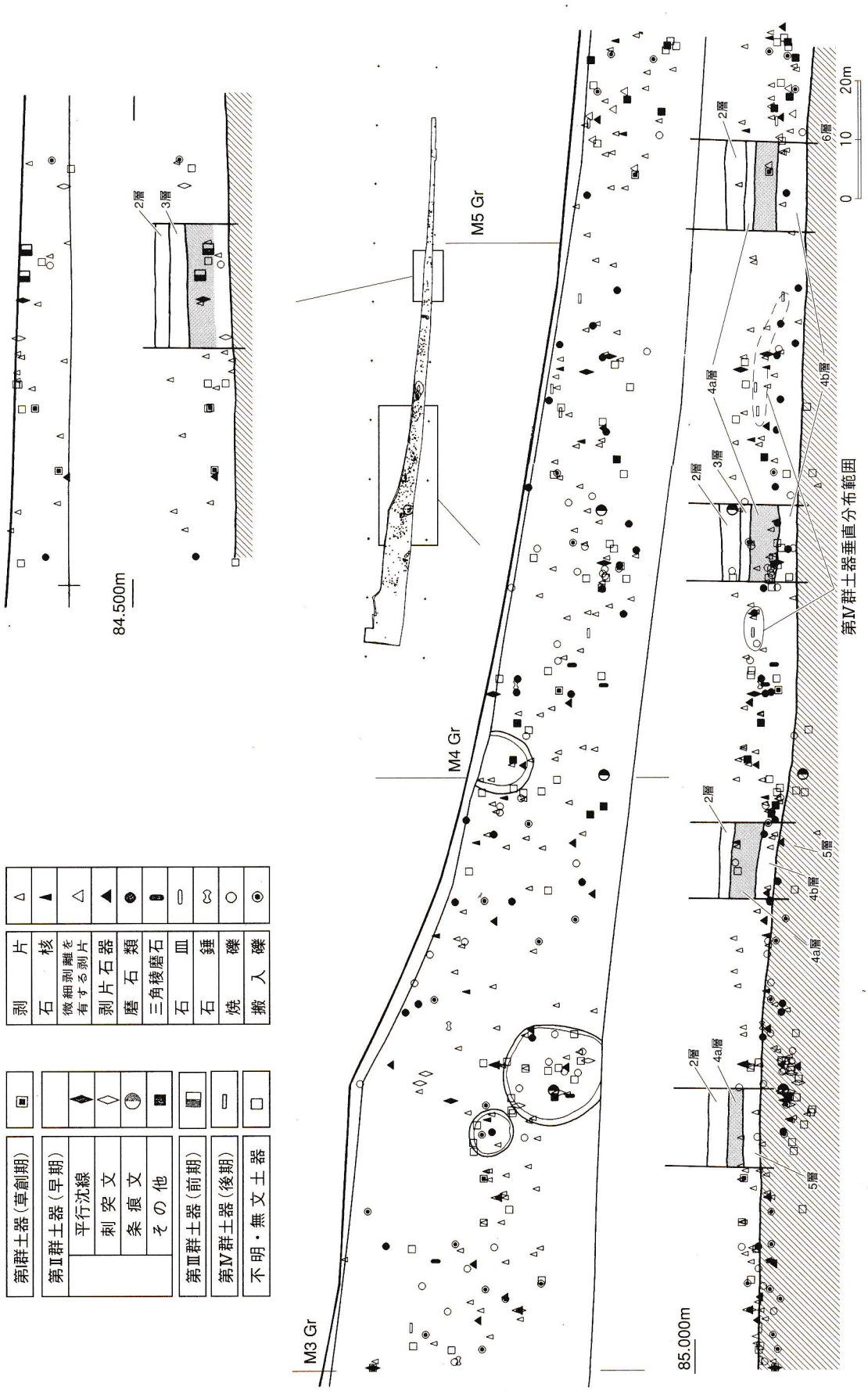
出土遺物の観察から、土器では縄文時代早期中葉から後葉（以下、第Ⅱ群土器）（註９）を主体として、前期前葉（以下第Ⅲ群土器）、後期前葉（以下第Ⅳ群土器）、および草創期と考えられる遺物（以下第Ⅰ群土器）が出土している。小破片での資料が多く時期判別の困難なものが多いが、無文のものでも繊維を含有するものや薄手のものが多いことから、大半が縄文時代早期中葉から早期後葉の時期幅に収まるものと推測される。また、出土石器からは時期特定が困難であるものの、三角稜磨石や刃部磨製石斧など縄文時代早期に特徴的とされる遺物（注10）が検出されている。

第13図は遺物分布図に縄文時代前期以降に所属する縄文土器の分布を貼付したものである。少数ながら、他の遺物同様Ｍ３～Ｍ６グリッドに分布が集中している。

図示した遺物分布図から旧地形は北に向かって緩やかな斜面地形となっており、Ｍ９グリッド付近で斜面の傾きが微妙に変化していることから窪地状の地形をなしている可能性が考えられる。遺物が集中するＭ３～Ｍ６グリッドは急地形から平坦面から緩斜面への地形の変換点付近に位置するものと判断される。なお、平面分布図のＭ１からＭ２グリッドにおいて遺物分布が希薄となっている部分があるが耕作時の包含層の削平に加え、立木根や倒木痕等による撹乱によって包含層が破壊されていたことによるものである。特にＭ２グリッドでは倒木痕から多数の遺物が検出されていることから、遺物の分布は本来もう少し南側に広



第13図　Ａ区遺物分布図（1）



第14図　A区遺物分布図（2）

がっていたものと推察される。

今回分布図には載せなかったが、３層から４ａ層にかけて拳大から人頭大の円礫の集中が確認された。第２次調査での集石検出レヴェルと同一面上であり、また出土遺物と同様な垂直分布を示すことから同様の遺構と考えたが、Ｍ１からＭ３グリッドでは礫の分布が面的に広がることが確認されるものの、Ｍ４グリッド付近から北側では垂直方向に点在することが多く、纏まりとして捉えることはできなかった。したがって、廃絶された結果、もしくは自然営力によるものと捉えた。なお、包含層中に砂利や小礫がそれほど含まれているものではないため、土砂災害によるものではないと判断している。

第２項　垂直分布（第14図）

ここでは、本調査区で出土した遺物の垂直分布から、縄文時代草創期から後期までの遺物群の出土層位および各時期の生活面復元のための確認をおこなっておきたい。第14図は本調査区で最も遺物が集中するＭ３～Ｍ５グリッドおよび、爪形文土器（第Ⅰ群土器）の出土したＭ７グリッドでの遺物の垂直分布を示した。なお分布図に投影した土層断面柱状図は調査区西壁のセクション図として作図したものを用いている（註11）。

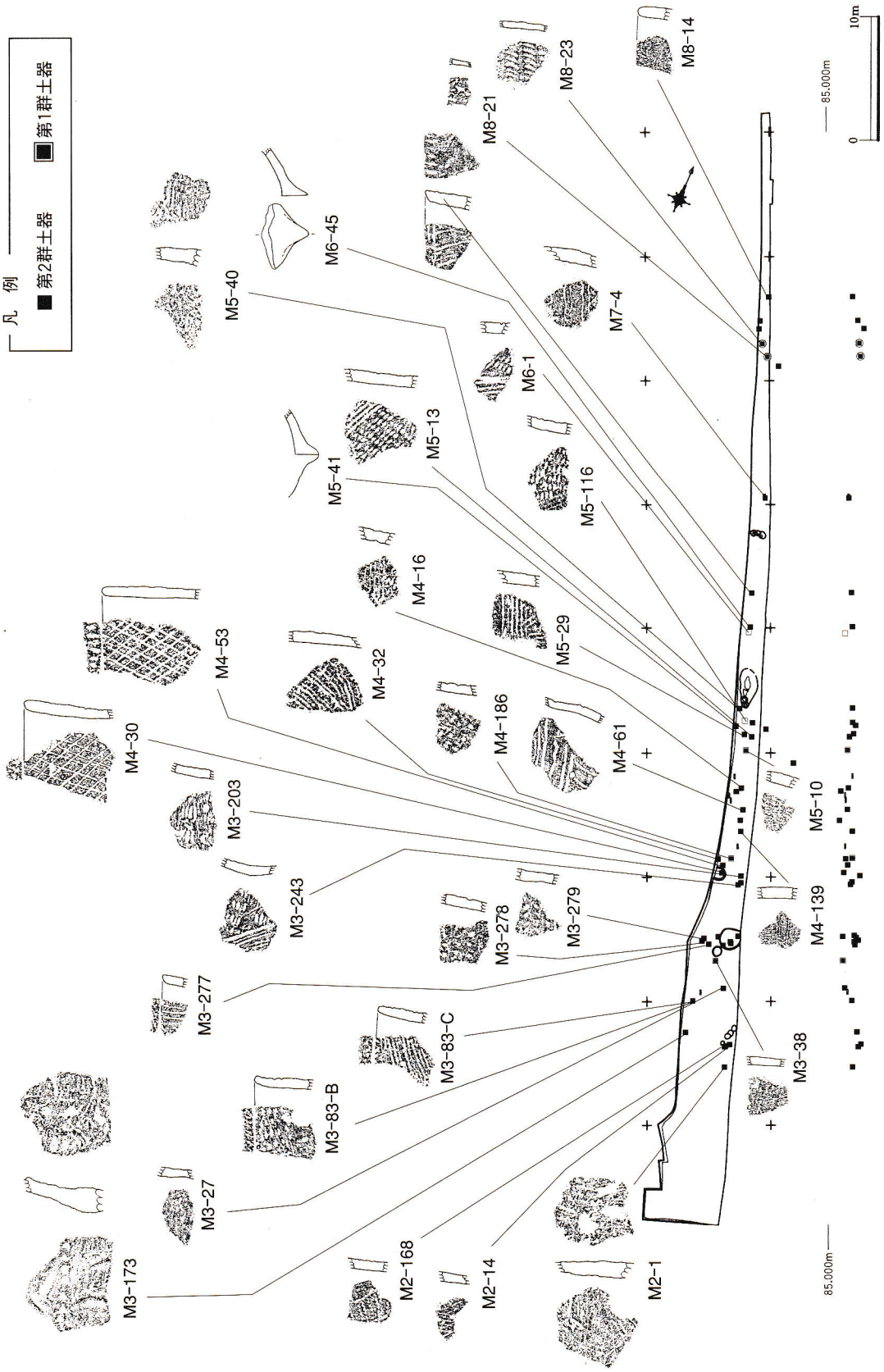
本調査区において出土遺物の主体となる第Ⅱ群土器群の垂直分布は４ａ層から５層中にピークをもって分布している。ここで少数ながら他時期の遺物の分布を見た場合、第Ⅳ群土器は４ａ層での分布が確認されるものの同層中でも遺物のピークとなるレヴェルよりもやや上位に分布する。このことから、４ａ層を時間的に細分できる可能性が考えられる。第Ⅲ群土器と識別されたものは３点のみであったため、出土層位を特定するにはやや難がある。現状では３層～４ｂ層中に分布し、第Ⅱ群土器とは出土層位での分離は不可能である。

出土が少数であったため断定はできないが、遺物の垂直分布から第Ⅱ～Ⅲ群土器使用時の生活面は５層～４ｂ層中、同様に第Ⅳ群土器では４ａ層上層に存在したものと推察される。したがって第Ⅳ群土器出土層位の関係を重視した場合、３層以上に含まれる遺物については縄文時代後期以降の二次的な堆積の可能性が考えられる。なお、第Ⅰ群土器については前回調査での出土層位である６層（シルトローム漸移層）から出土したものはなく、概期出土層位の追認とはならなかったことを付け加えておく。

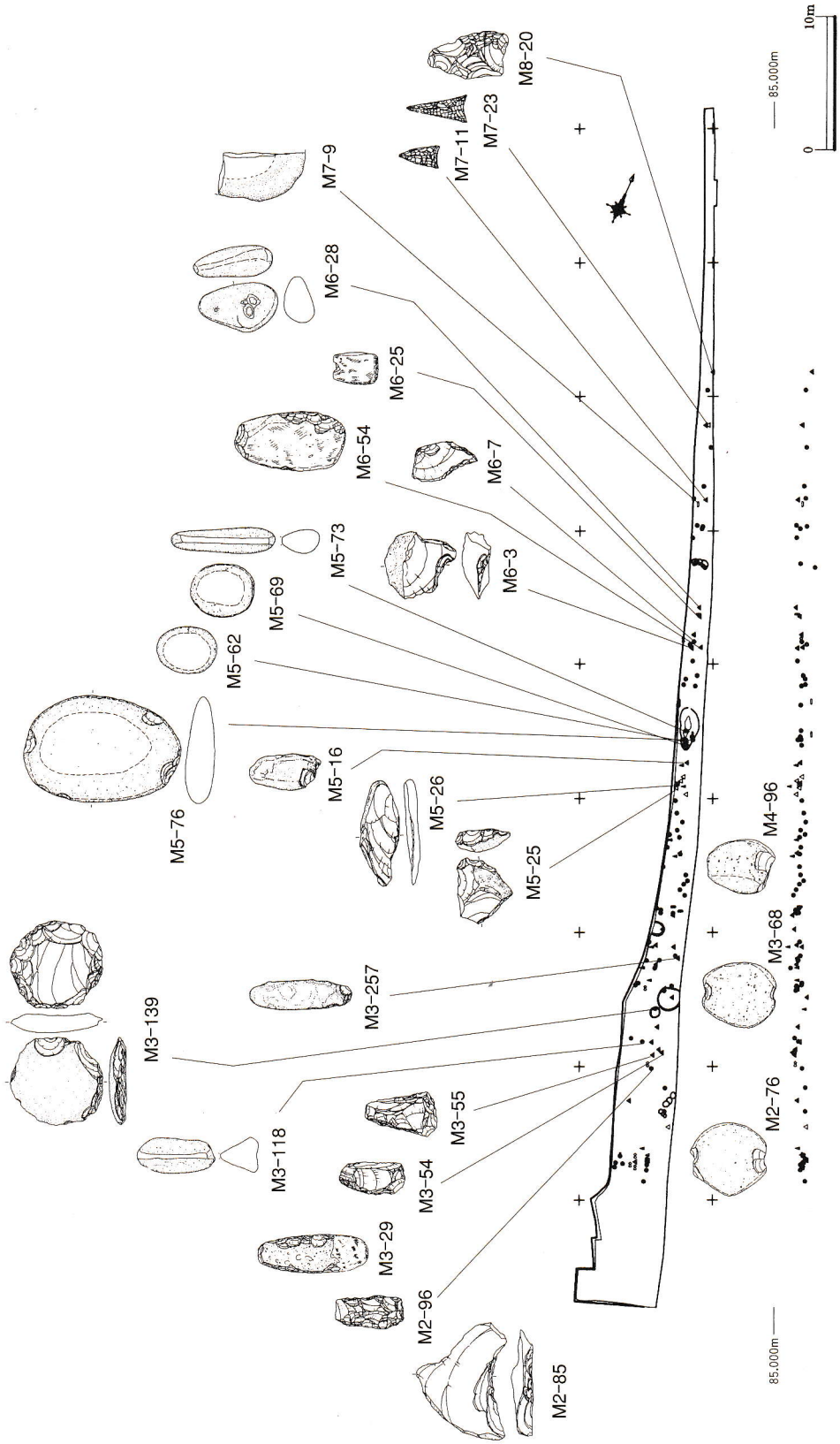
第３項　平面分布（第15～16図）

第15図に第Ⅰ群土器～第Ⅱ群土器の時期別の分布図を示す。時期別に見ても第13図同様にＭ２からＭ６グリッドにわたって遺物の密度の高いことが確認されるが、出土した遺物のあり方を考慮すると縄文時代早期後半段階を主体とする時期にＭ２～Ｍ６グリッドを中心とする範囲に本調査区における生活の主体的な場があったものといえる。

また、石器の平面分布（第16図）からは、石鏃がＭ７～Ｍ８グリッドに分布しており、石錘と打製石斧がＭ２～Ｍ３グリッドに纏まっている状況とは対照的な分布を示す。生産用具である打製石斧や石錘などとともに土器の集中が重なって分布している点は活動の拠点が調査区の南側にあったことを示唆するものといえる。



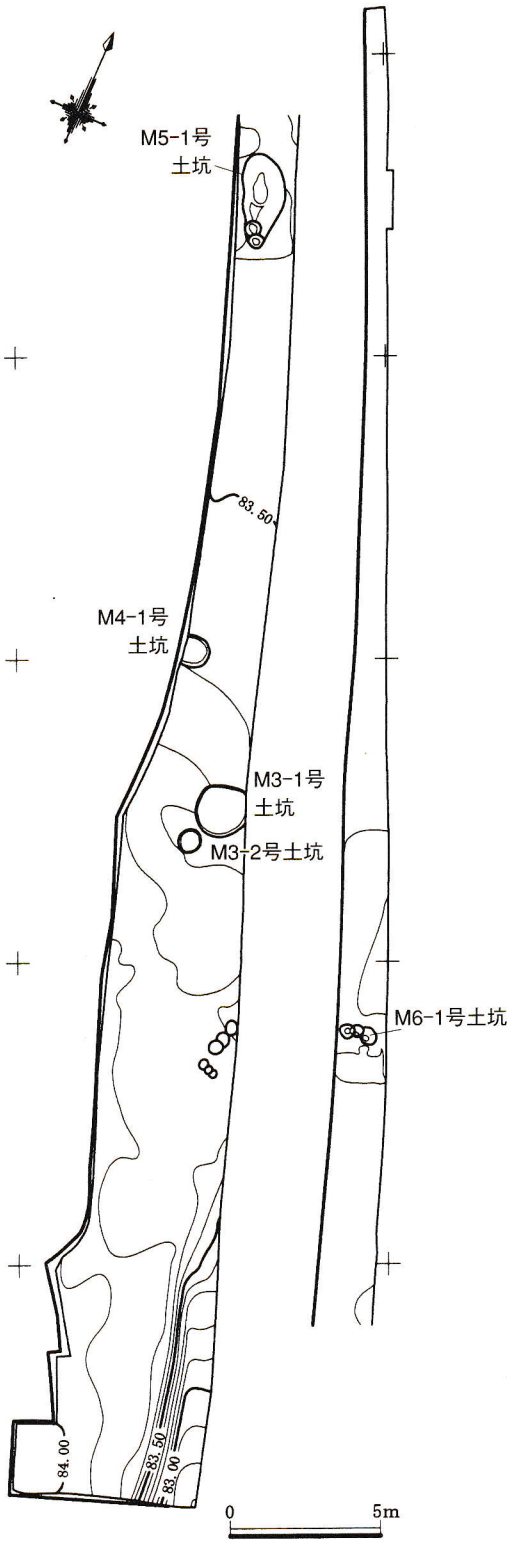
第15図　早期・草創期土器出土分布図



第16図　石器出土分布図

第５節　検出遺構（第17～21図）

Ａ区調査区では、６層上面からの遺構検出によって、４基の土坑と複数のピットが検出されたが、ピットに関してはそのほとんどが植物痕によるものと判断される。また、遺構の設置面に関しては４ｂ層から遺構検出を試みたが、確認されなかった。検出された遺構の覆土上層の堆積土が４ｂ層に似たものであったことを考慮した場合、遺構確認面である６層上層よりも上位から設置された可能性も考えられる。



第17図　Ａ区遺構全体図

第１項　Ｍ３－１号土坑（第18図）

Ｍ３グリッドの調査区東側境界線に切られる形で検出された。平面形は略円形を呈し、長軸は残存長で187cm、短軸は165cm を測る。確認面から底面の深さは31cm である。土層断面は３層に分層され、１～２層において遺物出土が顕著にみられた。三角稜磨石１点の他、沈線文系の土器片が検出された。本調査区で確認された遺構の中で最も遺物量の多い土坑である。

第２項　Ｍ３－２号土坑（第18図）

Ｍ３グリッドに所在。平面形は概略円形を呈し、長軸83cm、短軸76cm を測る。断面形は椀形を呈し、確認面からの深さは25cm である。土器片が出土しているが、無文の小破片であるため、帰属時期は不明である。

第３項　Ｍ３－３号土坑（第18図）

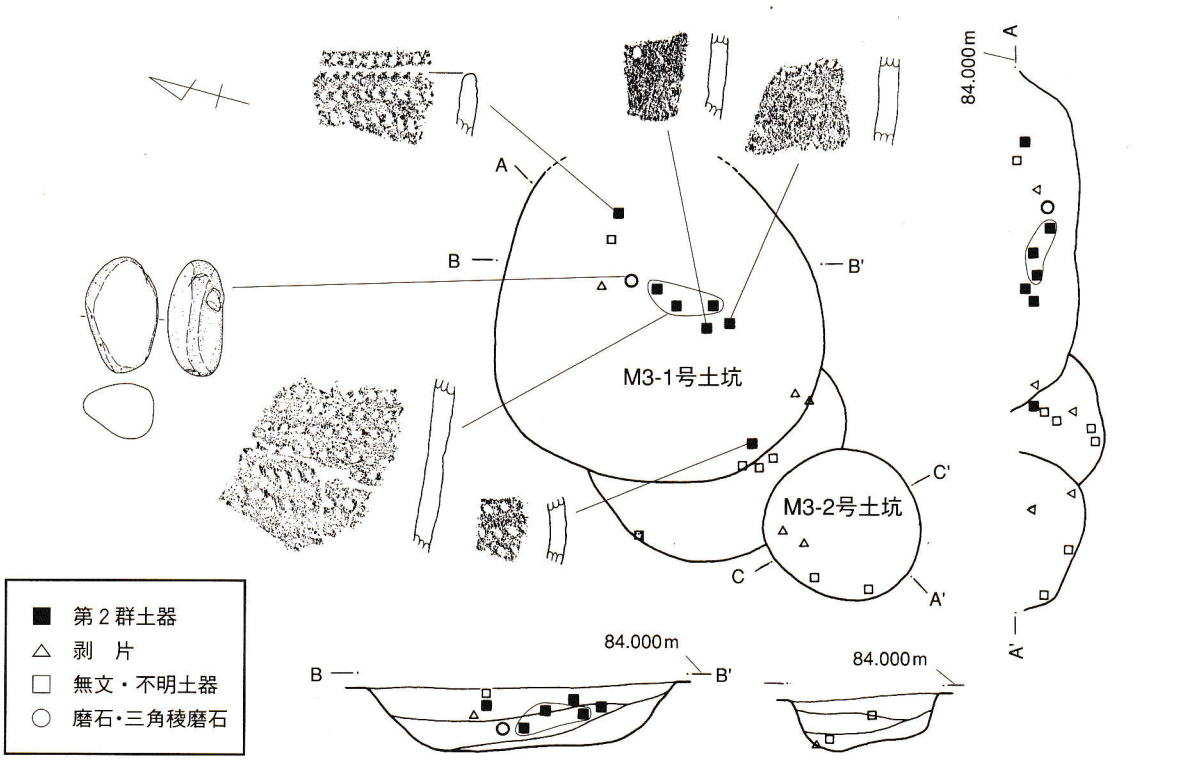
Ｍ３－１号土坑および、Ｍ３－２号土坑に切られているため土坑の平面形は不明である。確認面からの深さは28cm を測る。

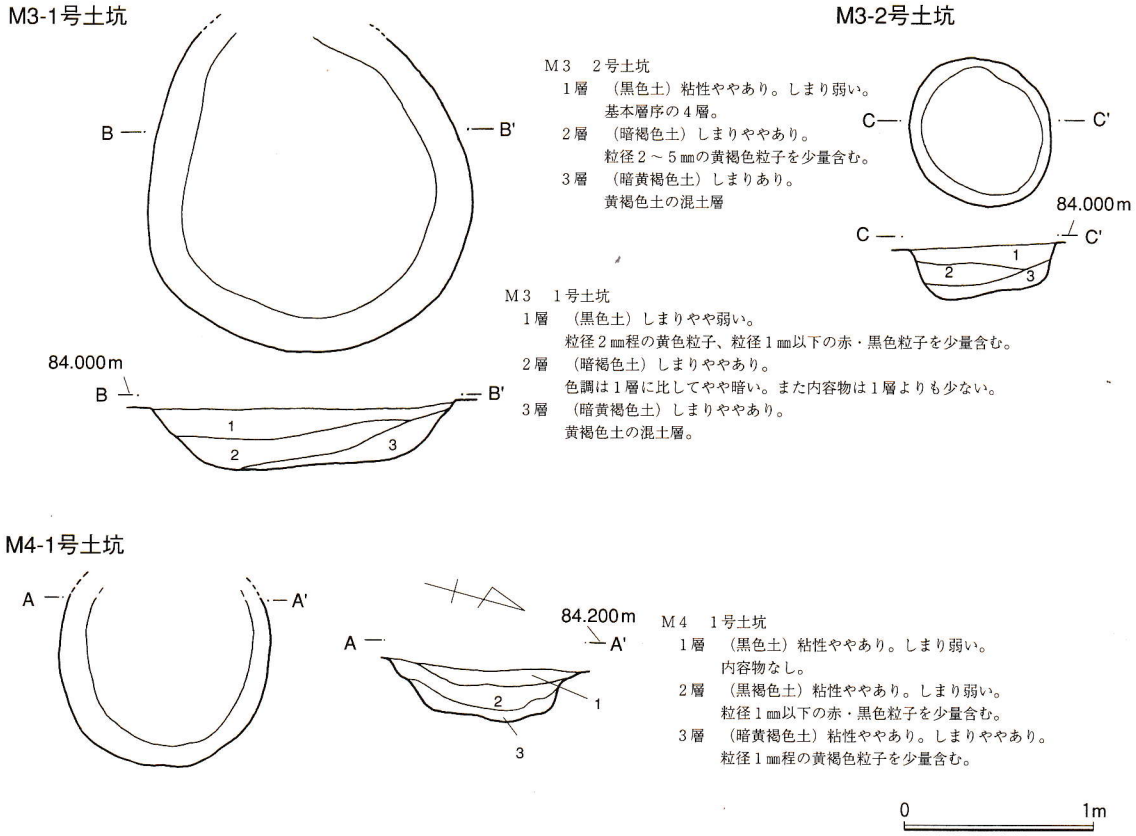
第４項　Ｍ４－１号土坑（第18図）

Ｍ４グリッド西側調査区壁に接しており、全体の概ね半分の範囲が調査区内で検出されている。遺構の土層断面は調査区西壁で記録し、土坑設置面を検証した結果、６層上面から掘り込まれているものと判断された。断面形は椀状で確認面からの深さは31cm、短軸は112cm を測る。平面形はおよそ長楕円形を呈する。出土遺物は無いものの、土坑の構築面を考慮した場合、早期に所属すると判断される。

第５項　Ｍ５－１号土坑（第19図）

サブトレンチ調査時に検出されたため、立ち上がりが一部破壊されている。また北側に本土坑よりも新しいピットが２基確認されるが植物痕によるものと判断した。平面は長楕円形を呈し、長軸296cm、短軸136cm を測る。断面形は擂鉢状を呈し深さ71cm を測る。

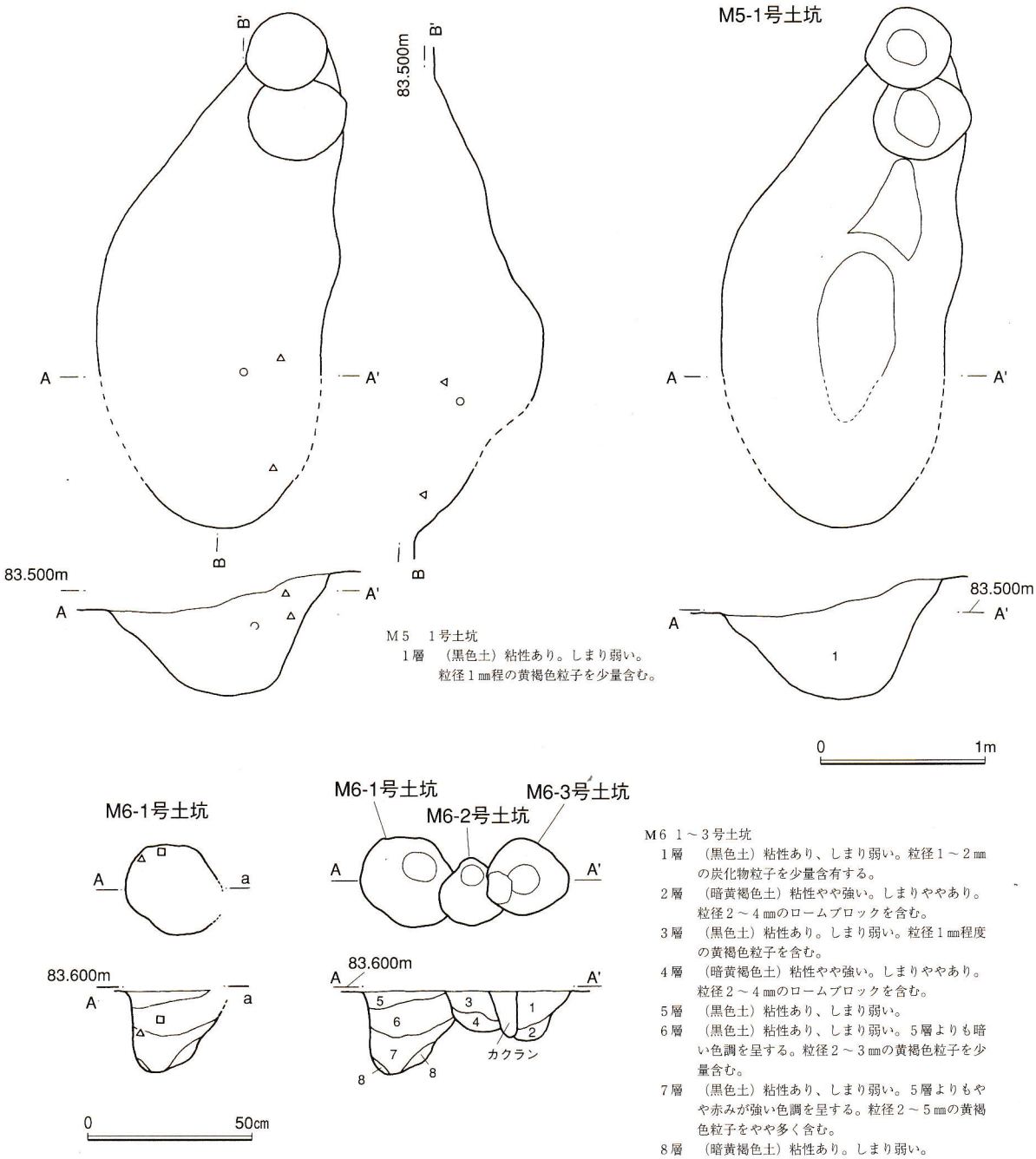

M3-1号土坑
M3-2号土坑
84.000m
84.000m
84.000m
A
A'
B
B'
C
C'
第２群土器
剥　片
無文・不明土器
磨石・三角稜磨石


M3-1号土坑
M3-2号土坑
B
B'
C
C'
84.000m
84.000m
1
2
3
M4-1号土坑
A
A'
84.200m
M３　２号土坑
１層　（黒色土）粘性ややあり。しまり弱い。
基本層序の４層。
２層　（暗褐色土）しまりややあり。
粒径２～５㎜の黄褐色粒子を少量含む。
３層　（暗黄褐色土）しまりあり。
黄褐色土の混土層
M３　１号土坑
１層　（黒色土）しまりやや弱い。
粒径２㎜程の黄色粒子、粒径１㎜以下の赤・黒色粒子を少量含む。
２層　（暗褐色土）しまりややあり。
色調は１層に比してやや暗い。また内容物は１層よりも少ない。
３層　（暗黄褐色土）しまりややあり。
黄褐色土の混土層。
M４　１号土坑
１層　（黒色土）粘性ややあり。しまり弱い。
内容物なし。
２層　（黒褐色土）粘性ややあり。しまり弱い。
粒径１㎜以下の赤・黒色粒子を少量含む。
３層　（暗黄褐色土）粘性ややあり。しまりややあり。
粒径１㎜程の黄褐色粒子を少量含む。
0
1m

第18図　土坑実測図(1)

第６項　Ｍ６－１～３号土坑（第19図）

Ｍ６グリッドのやや北側に位置する。径20cm 前後のピット状の土坑が３基重複している。１号土坑と２号土坑の間に電柱を固定する杭によって撹乱される。第３号土坑からは無文土器と剥片それぞれ１点出土しているが、時期は不明である。



Ｍ５　１号土坑
１層　（黒色土）粘性あり。しまり弱い。
粒径１㎜程の黄褐色粒子を少量含む。

Ｍ６　１～３号土坑
１層　（黒色土）粘性あり、しまり弱い。粒径１～２㎜の炭化物粒子を少量含有する。
２層　（暗黄褐色土）粘性やや強い。しまりややあり。粒径２～４㎜のロームブロックを含む。
３層　（黒色土）粘性あり。しまり弱い。粒径１㎜程度の黄褐色粒子を含む。
４層　（暗黄褐色土）粘性やや強い。しまりややあり。粒径２～４㎜のロームブロックを含む。
５層　（黒色土）粘性あり、しまり弱い。
６層　（黒色土）粘性あり、しまり弱い。５層よりも暗い色調を呈する。粒径２～３㎜の黄褐色粒子を少量含む。
７層　（黒色土）粘性あり、しまり弱い。５層よりもやや赤みが強い色調を呈する。粒径２～５㎜の黄褐色粒子をやや多く含む。
８層　（暗黄褐色土）粘性あり。しまり弱い。

第19図　土坑実測図(2)

第６節 出土遺物

第１項　縄文土器

このたび調査した調査区から出土した縄文土器の総数は395点を数える。前頁で触れたように、３層からは縄文時代中期・後期の遺物を主体に一部、早期の資料が混在していた。４層～５層に掛けて早期の遺物がまとまって出土した。また、第２次発掘調査では６層のシルトローム層から草創期に帰属する爪形文土器が出土したが、このたびは６層からの遺物の出土は皆無である。

出土した土器群のうち、特徴的な土器を抽出し、分類して紹介する。

＜第１群土器＞　（第20図１～３）

縄文時代草創期後半に帰属する土器群を一括した。その特徴は４層から出土した爪形文土器である。１の表面色調は暗赤褐色を呈する。幅約10㎜を計る湾曲度の少ない爪形文である。施文はローアングルで右方向から行われたことによりＤ字状の刺痕が確認できる。器面は横帯の凹凸面を有し、凹面幅と刺痕幅がほぼ一致している。裏面には炭化物が付着していることから、器面調整について観察が出来ないが、指頭状の成形痕跡と推定される凹凸面がある。文様構成は、横位密接斜位爪形文（右肩上がり：１㎝幅での刺痕は３回）であり、本資料から密接３段が確認できる。胎土には細かな金雲母粒が混入している。器壁厚は約３㎜を計る。

２の表面色調は淡橙色を呈する。幅約９㎜を計る湾曲度の少ない爪形文である。その刺痕は１に比べると右肩上がりが緩く、その刺痕回数は１㎝幅で４回である。文様構成は１同様に横位密接斜位爪形文であり、資料上で上下２段の施文が観察できる。裏面には炭化物の付着はない。明瞭な器面調整は観察できない。胎土には細かな金雲母粒が散見される。器壁厚は約3.5㎜を計る。

３の表面色調は淡灰橙色を呈する。１・２と比較すると異なる刺痕資料である。幅約５㎜の長方形に近い爪形状を呈している。刺痕方向は下から上に突き刺すように観察できる。刺痕は３箇所で確認できるが、文様構成の把握には至らない。明瞭な刺痕は上下交互に施され、刺痕長軸は器軸に直交して横位に施してある。胎土には少量の白色軟質粒子が混入している。器壁厚は約２㎜を計る。

＜第２群土器＞　（第20図４～第23図76）

縄文時代早期中葉に帰属する沈線文系土器群を一括した。

（１類）（第20図４～12）

１類は細く短い絡条体圧痕文を施文する資料である。２層～３層に掛けて散在していた。草創期の絡条体圧痕文の可能性もあるが、４の並行沈線による区画線の存在と器壁厚が、外の第２群土器に類似することから早期に帰属する資料として扱った。

５は外反する口縁部資料である。口唇部は不安定な面（約４㎜）を有し、施文はない。口端直下から密接横位多段の施文構成を持つ。圧痕は右肩上がりの斜位である。原体は【長さ６㎜：最大幅3.5㎜：４条】である。その原体圧痕の方向は器面に対してほぼ並行に押し当てている。

５を基準に原体および原体圧痕方向を観察する。観察可能な資料は、４・６・９・12である。４は【長さ10㎜ ＋：最大幅2.5㎜：６条＋】であり、１条に２節が観察でき、他と異なる。また、幅３㎜の並行沈線で横帯区画を施している。器壁厚は約４㎜を計る。６の原体は【長さ９㎜：最大幅４㎜：４条】

で、器壁厚は約８㎜を計る。９の原体は【長さ６㎜：最大幅３㎜：４条】で、器壁厚は約８㎜である。12の原体は【長さ５㎜：最大幅３㎜：２条】で、器壁厚は約６㎜である。この一連の観察から、４は複節縄文原体を使用し、５・６・９・12は単節縄文原体を使っていることが判明した。また、圧痕の条数と長さは、原体の太さと強い相関関係が予測される。さらに圧痕手法には、器軸に比べ原体軸をやや右斜めにして、平坦に押すＡ種（５・７・８・12）と器軸に比べ原体軸をやや右斜めにして、右から左に押すＢ種（６）、器軸に原体軸をほぼ直交させ、下から上へ押すＣ種（９･10）の３種がある。以上のように多様な絡条原体を持ち合わせ、多様な施文手法があったと予測され、本遺跡では３種が確認された。文様構成は、器軸に対して原体をやや右斜めに横位多段構成する一群（４～７）と器軸に対して原体をほぼ直交させ横位多段構成する一群（９・12）の２種がある。

（２類）（第20図13～18）

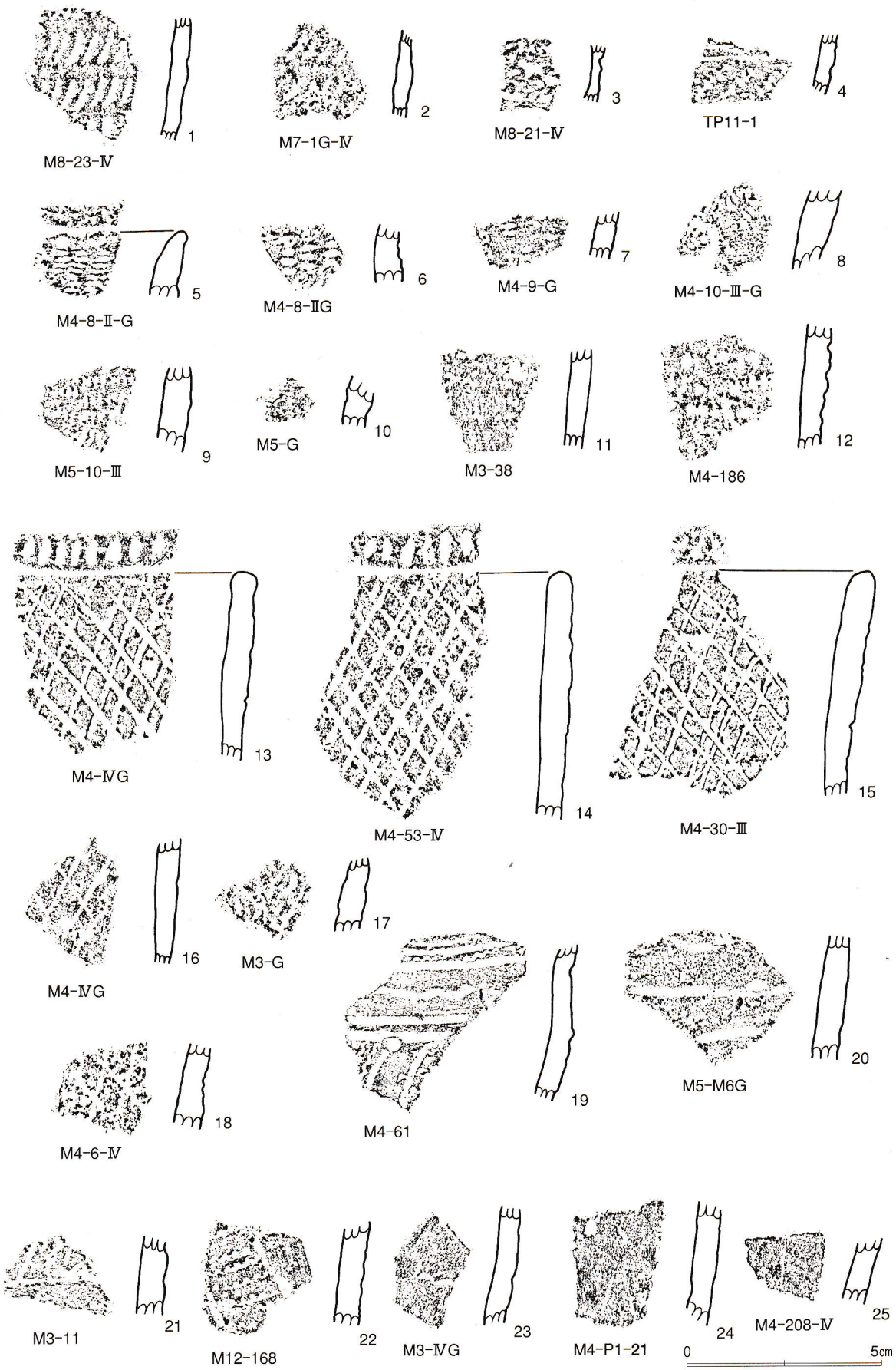
２類は棒状工具による沈線文土器である。沈線は幅約1.5㎜ 前後の幅狭く、鋭角に深く施される特徴がある。沈線文様は、まず間隔を開けて右肩上がりの斜線を描き、次に左肩上がりの斜線を間隔開けて施すことで、斜格子目文が生じる。斜格子目文は口縁端部から施される。資料が細片であることから胴部区画線の有無はわからない。13～15は口縁部資料である。直上あるいはやや外反りの形態を示す。口唇部は指頭状を呈し、刻みを施す特徴がある。刻みはやや太く鈍角で施され、胴部の沈線施文工具とは異なると判断される。本資料群は極めて類似する資料であるが、胎土や焼成色調などから２～３個体の資料群であると判断している。

（３類）（第20図19～25）

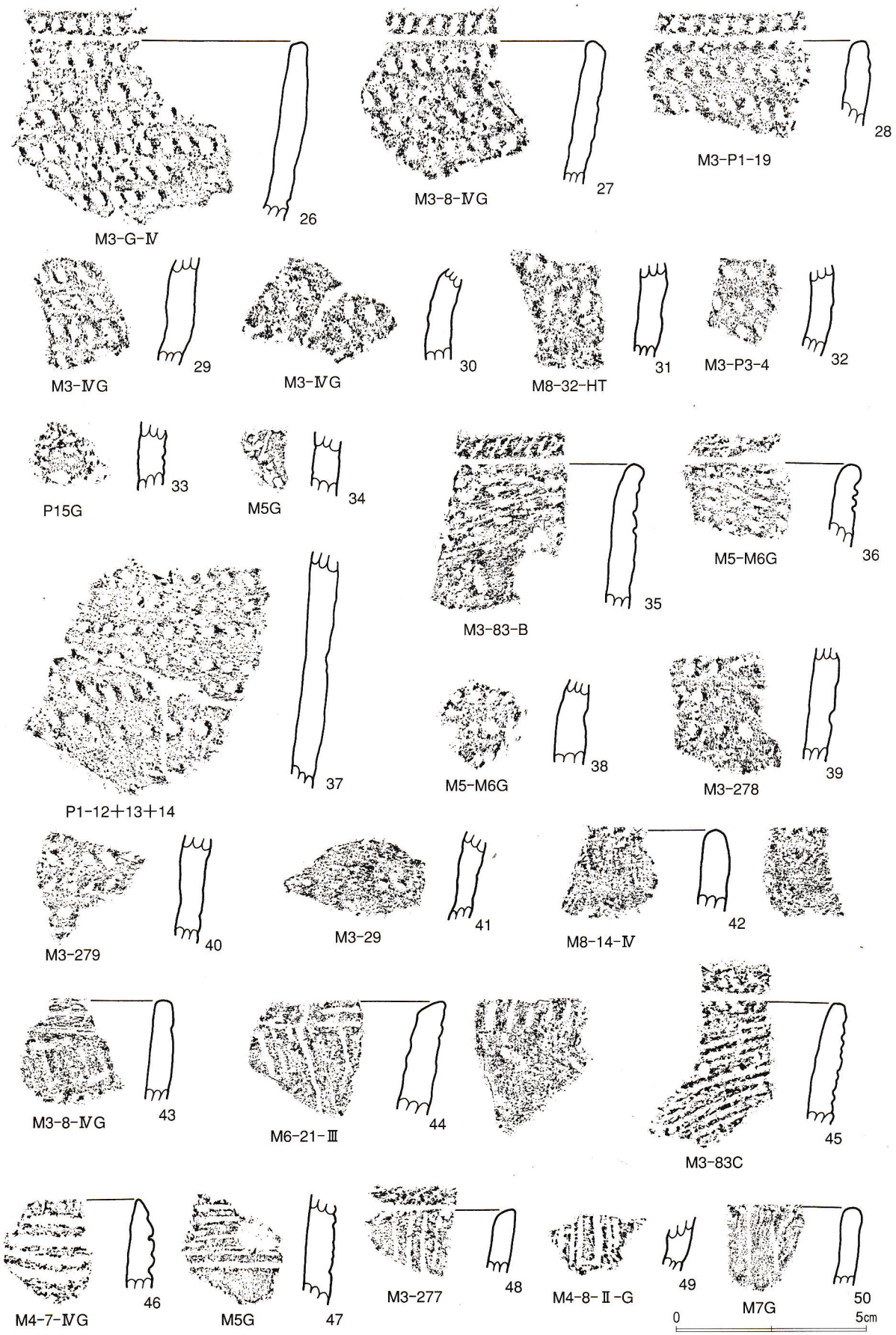
３類は、貝殻沈線文土器である。19～21などは横帯構成区画であり、22は曲帯構成区画である。共に区画内には貝殻腹縁文を充填している。その充填文は、19が示すように幅狭い横位区画内では区画線に沿って、ほぼ並行に押圧し、横帯区画内を沈線で鋸歯状モチーフを描けば、それに則して鋸歯状に押圧している。口縁部形態や器形などは、細片資料であることから不明であるが、19の観察から口縁部付近で器形変換部位を持ち、その部位に区画線が引かれている様子がわかる。区画内部は、貝殻腹縁文の充填のほかに、沈線による横位波状文の充填もある。また、横位区画線と内部に施された鋸歯状モチーフとの交点には径約３㎜の円形刺突文が施されている。原体は一部の資料から計測することができる（19：長さ約10㎜・４山、22：長さ約16㎜・６山）。

（４類）（第21図26～41）

４類は棒状工具による刺突文土器である。資料群を概観するならば、口縁部はやや内傾する一群（26～28）と外反する一群（35）があり、胴部上半部に器形変換部（29・30）を持つ。口唇部はやや太めの刻み（26～28）と細く鋭角の刻み（35）の２種がある。刺突文様は、横位密接構成を示し、胴部下半部まで施す一群（26）と口縁部付近まで施す一群（35）があるようである。刺突を施した工具を推測するには、その刺痕の観察が大切である。刺痕部にＢ字状の凹凸が観察され、細い骨の半截工具が想定される一群（26～28・32）と、反転したＤ字状の刺痕（29～31・34・37～40）、対と推定される極細の円形刺痕（33・35・36・41）がある。その刺し方は、器軸に対して右から左方向に刺突している。35・36は右から左方向に刺した後に、右方向に抜くことで浅い沈線状の跡が残る。


M8-23-Ⅳ
1
M7-1G-Ⅳ
2
M8-21-Ⅳ
3
TP11-1
4
M4-8-Ⅱ-G
5
M4-8-ⅡG
6
M4-9-G
7
M4-10-Ⅲ-G
8
M5-10-Ⅲ
9
M5-G
10
M3-38
11
M4-186
12
M4-ⅣG
13
M4-53-Ⅳ
14
M4-30-Ⅲ
15
M4-ⅣG
16
M3-G
17
M4-6-Ⅳ
18
M4-61
19
M5-M6G
20
M3-11
21
M12-168
22
M3-ⅣG
23
M4-P1-21
24
M4-208-Ⅳ
25
0
5cm

第20図　土　器（1）


M3-G-Ⅳ
26
M3-8-ⅣG
27
M3-P1-19
28
M3-ⅣG
29
M3-ⅣG
30
M8-32-HT
31
M3-P3-4
32
P15G
33
M5G
34
M3-83-B
35
M5-M6G
36
P1-12+13+14
37
M5-M6G
38
M3-278
39
M3-279
40
M3-29
41
M8-14-Ⅳ
42
M3-8-ⅣG
43
M6-21-Ⅲ
44
M3-83C
45
M4-7-ⅣG
46
M5G
47
M3-277
48
M4-8-Ⅱ-G
49
M7G
50
0
5cm

第21図　土　器（2）

（5類）（第21図42）

5類は極細の有節沈線を施す資料である。幅約1㎜前後の工具を刺す引く行為で、口縁部の直下に縦位密接横帯構成で有節沈線文が施されている。口縁部はやや内傾し、口唇部には細い沈線による斜位刻みが施されている。また、口縁内側にも、対の円形刺突列が斜位密接横帯構成で配されている。

（6類）（第21図43～第22図63・77）

6類は平行沈線文を主体とした一群である。全体を概観するならば、口縁部は直立（43・48・50）や外反り（44・55）などがあり、その口唇部には刻みが施される。刻み原体は、半截工具（44）や箆状工具（48）、絡条体（55）などがある。口縁部に平行線を1条から3条ほど横位密接一帯（43・46・55など）や多帯構成（45）があり、一部には縦位の分節（55）が確認される。口縁部文様の下位には、縦位密接横帯（44・48など）や区画内充填文（55：絡条体圧痕文）が配される。頸部に横位区画が三条一帯ほどで行われ（58）、胴部は縦位区画が施され、区画内を鋸歯状に分割し、分割空間を半截工具による斜位の刺突文で充填している（55～63）。77は本類で整理したい。半截工具を器面に押圧して5㎜程度、横引きする手法で平行短沈線文を施す。平行短沈線文は上下二単位構成で配されている。また、部分的に円形あるいは半円形の刺突文が確認される。

（7類）（第22図64～70）

7類は器面を半截工具で縦・斜位に条痕文状に施文する一群である。

（8類）（第23図71～76）

8類は器面を先端が粗い箆状工具または植物繊維の束を縦・斜位に条痕文状に施文する一群である。

（9類）（第23図83・84）

9類は第2群土器群に帰属する尖底土器資料と考える。その形態は乳房状を呈する。尖底の突出部位は、83に比べて84のほうがやや鋭角で長い。共に立ち上がり部位の器壁厚は薄く、83：5㎜、84：5㎜を計測し、胎土などは第2群土器群に酷似する。

＜第3群土器＞　（第23図78～82）

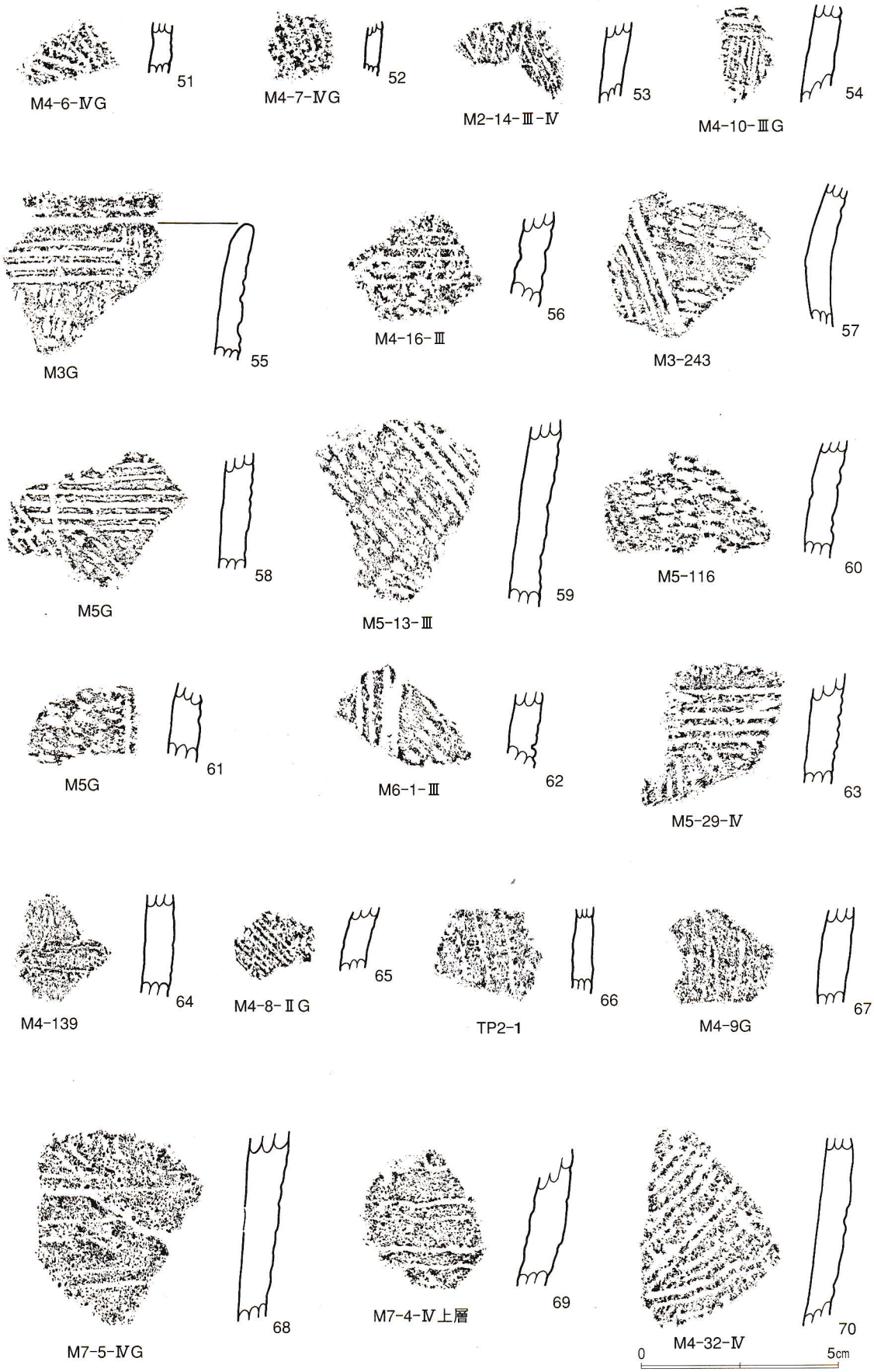
第3群土器は、縄文時代早期後葉に帰属する条痕文系土器群を一括した。

（1類）（第23図78）

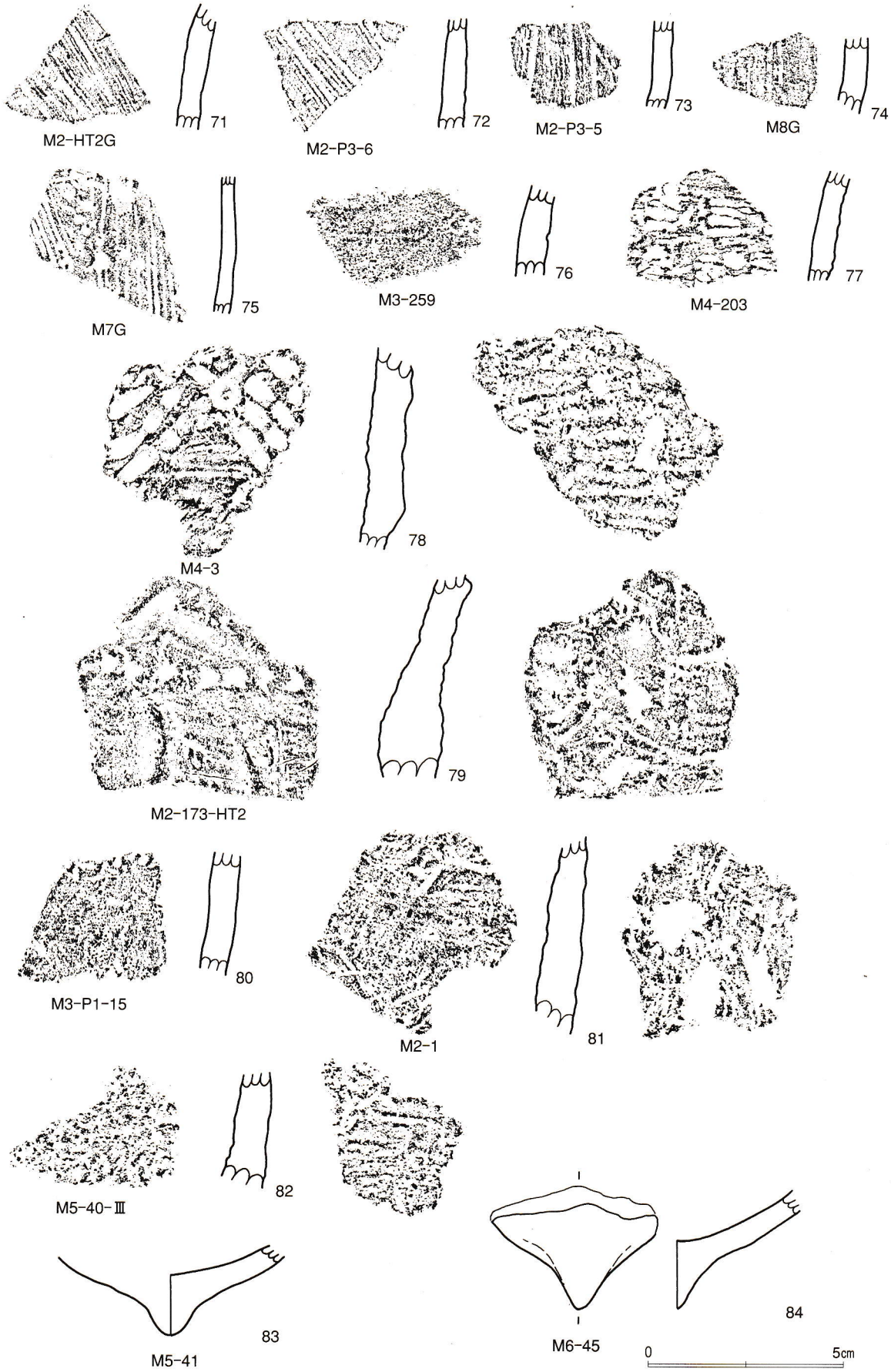
1類は胴部上半に襷状構成のモチーフを有する資料である。径約8㎜の円形刺突文（刺突痕の中心には突部を持つ）を交点として三条一帯の有節沈線で襷状のモチーフを描いている。施文の稜には鋭角さはなく、器面が柔らかなうちに施文したと推定される。表裏面を幅5㎜程度の条痕調整を器軸に対して直交して施している。胎土には少量の植物繊維と6㎜ほどある片岩粒？が混入している。

（2類）（第23図79）

2類は粘土紐の貼付手法と棒状工具の刺突手法が確認される資料である。貼付文の横断面は、略三角形を呈する。資料上位には鋸歯状あるいは襷状に貼付文が展開していたと推測できる。その下位には区画としての刺突列が一条巡る。刺突は先端が平坦な棒状工具を器面に対して約45°角で右から左（正位の土器扱い）へ施文していることから、刺痕はD字状になっている。その区画刺突列の下位には、縦位の貼付文が観察されるが長さは不明である。貼付文の間隔は約25㎜程であり、上位の鋸歯状モチーフの


M4-6-ⅣG
51
M4-7-ⅣG
52
M2-14-Ⅲ-Ⅳ
53
M4-10-ⅢG
54
M3G
55
M4-16-Ⅲ
56
M3-243
57
M5G
58
M5-13-Ⅲ
59
M5-116
60
M5G
61
M6-1-Ⅲ
62
M5-29-Ⅳ
63
M4-139
64
M4-8-ⅡG
65
TP2-1
66
M4-9G
67
M7-5-ⅣG
68
M7-4-Ⅳ上層
69
M4-32-Ⅳ
70
0
5cm

第22図　土　　器（3）


M2-HT2G
71
M2-P3-6
72
M2-P3-5
73
M8G
74
M7G
75
M3-259
76
M4-203
77
M4-3
78
M2-173-HT2
79
M3-P1-15
80
M2-1
81
M5-40-Ⅲ
82
83
M5-41
M6-45
84
0
5cm

第23図　土　　器（4）

変換部位と位置関係的に相対している。刺突列は口頸部と胴部上半を区切る区画と推定される。裏面には指頭圧痕調整とややランダムな条痕調整が確認でき、指頭圧痕調整が条痕調整を切っている。

（3類）（第23図80）

3類は極細の条痕調整が表裏面に浅く施され、刺突列が施される資料である。径約2㎜程度の円形状の刺突列が一条器面を巡る。小破片であることから単列あるいは複列かの判断は出来ない。刺痕は平坦でなく、角度を持つことからやや厚みのある箆状工具の角を斜めに刺突している可能性がある。

（4類）（第23図81・82）

4類は表裏面に条痕調整を施し、意匠文などが観察できない胴部資料である。82の裏面には略長方形や略楕円形の凹痕が確認される。

＜第4群土器＞　（第24図85～87）

第4群土器は縄文時代前期初頭に位置付けされる一群である。結束羽状縄文でなく、原体の回転施文方向を縦と横に変えて施文した非結束羽状縄文である。

＜第5群土器＞　（第24図88・92・93）

第5群土器は縄文時代中期に帰属する一群である。

88は地文に単節縄文を転がし、幅約6㎜の半截工具を器面に軽く押し当て縦位二帯の区画を引いた資料である。その特徴から中期前葉に位置付けされる。

92は器軸に並行して縦位に撚糸文を回転施文した深鉢形土器の口頸部資料である。口縁部との区画に幅約10㎜程度の粘土紐を一条貼付し、左から右へ工具を押捺（正位の土器扱い）することで粘土紐が鎖状化している。押捺した部位は、幅約13㎜を計測する。

93はＲＬ縄文を施文した縄文土器である。器壁厚は約12㎜を計測する。

＜第6群土器＞　（第24図89～91）

第6群土器は縄文時代後期前葉に帰属する一群である。

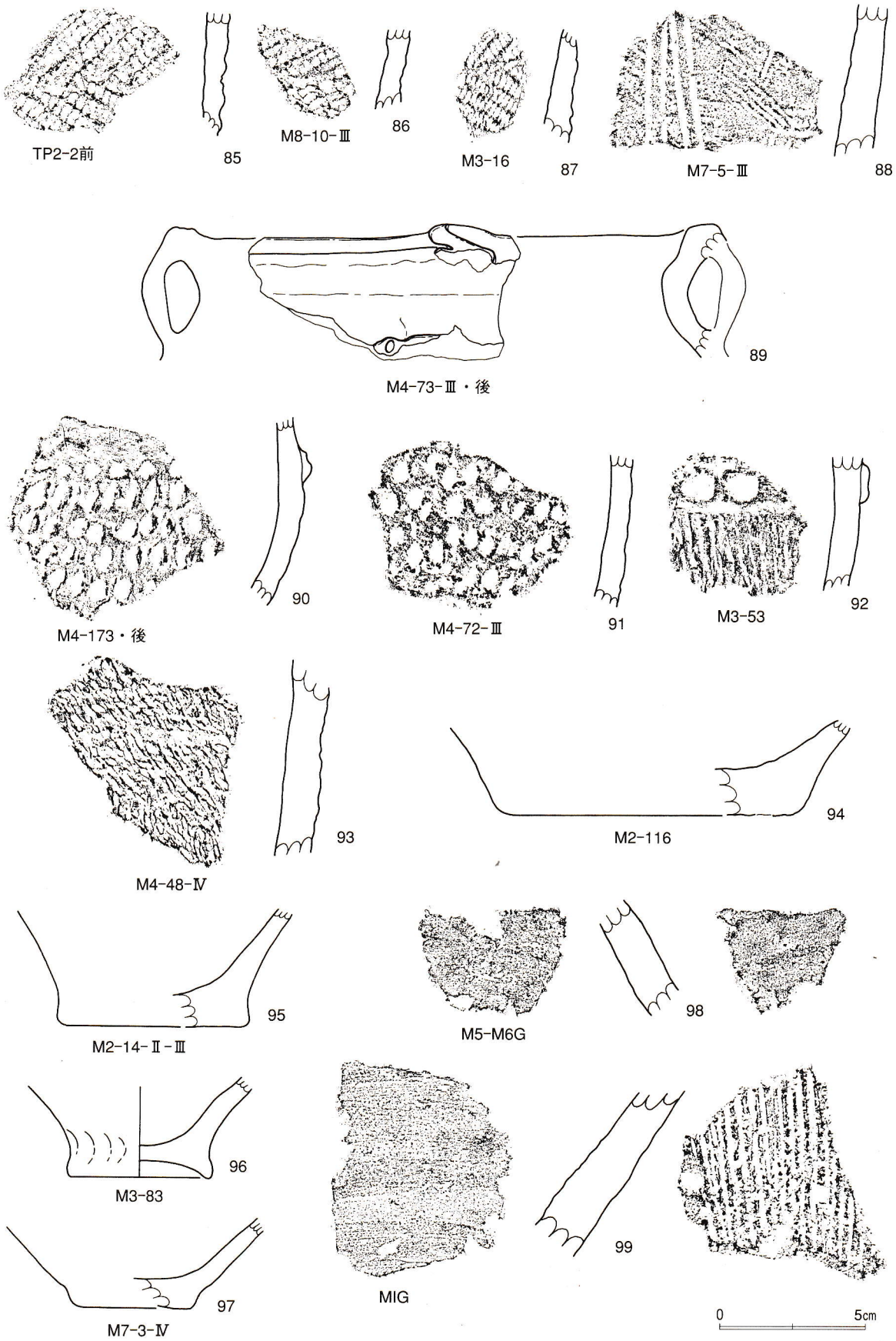
89と90は同一個体資料と推定される。口縁部は強く外反し、口唇部に面を有する。橋状把手の残存部位から捻転状の把手が付されていたと推定される。胴部区画は薄い粘土紐を一条貼付し、棒状工具を右から左にややローアングルで刺突（正位の土器扱い）している。胴部には反転Ｄ字状の刺突文が横位多段密接構成で施文されている。すなわち、左から右方向へ、先端部がやや湾曲している箆状工具を刺突している（同一人物で右利きであれば、土器を逆位で扱った可能性がある）。91も90同様な手法で刺突文が施文されている。これら一群は、その特徴から三十稲葉式土器に分類される。

＜第7群土器＞　（第24図94～97）

第7群土器は素焼き土器の平底資料を一括した。94・95はやや厚手土器で、96・97は薄手土器である。96は上げ底が特徴である。帰属する時代は不明である。

第2項　中世陶質土器　（第24図98・99）

表土層から2点の中世陶質土器が出土した。周辺を丹念に精査したが、他資料や関連遺構を確認することが出来なかった。98は壷の胴部資料と推定される。99は卸目（おろしめ）を明瞭に残す擂鉢の下半部資料である。


TP2-2前
85
M8-10-Ⅲ
86
M3-16
87
M7-5-Ⅲ
88
89
M4-73-Ⅲ・後
M4-173・後
90
M4-72-Ⅲ
91
M3-53
92
M4-48-Ⅳ
93
M2-116
94
M2-14-Ⅱ-Ⅲ
95
M5-M6G
98
M3-83
96
MIG
99
M7-3-Ⅳ
97
0
5cm

第24図　土　　器（5）

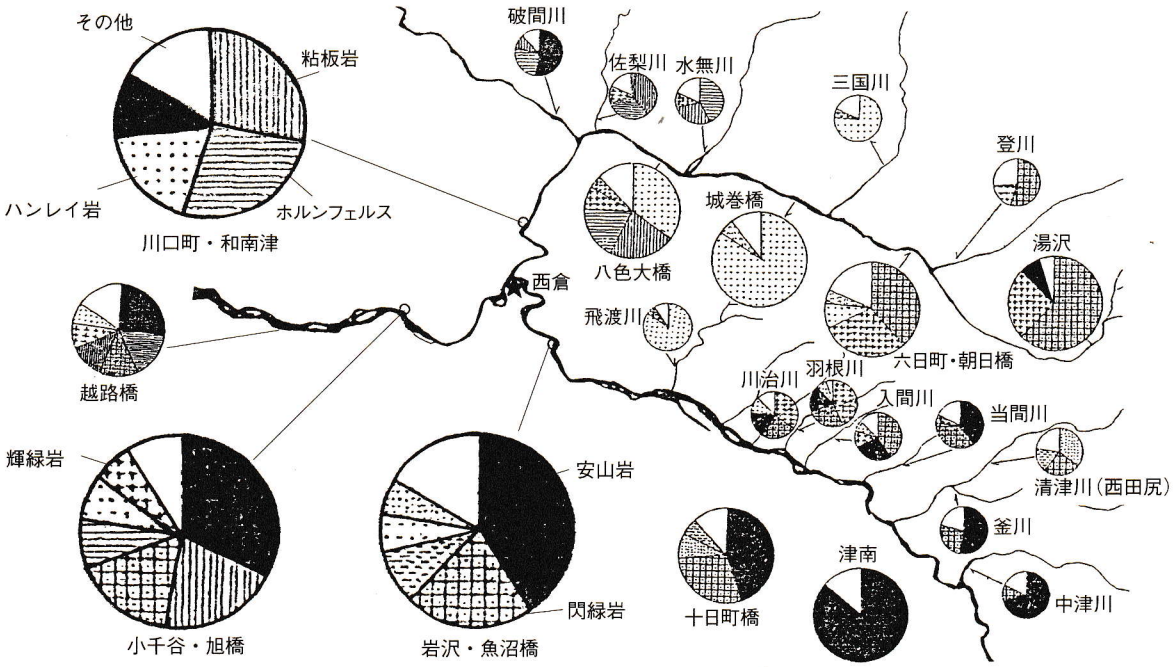
第３項　石　器　（第25～29図・第４表）

概　要

本調査区からは遺構出土と包含層出土をあわせて総数395点の石器類が出土している。その内訳は第４表に示したように石器127点、剥片245点、石核23点である。また石器の器種別の内訳は石鏃３点、石錐１点、石匙１点、打製石斧４点、ピエス・エスキーユ２点、不定形石器25点、磨製石斧６点、石錘７点、三角稜磨石６点、磨石類65点、石皿５点となっている。これらの石器群は、遺物分布で見てきたように、出土土器との関係において垂直的にも平面的にも同様な分布領域を示している。したがって、本調査区出土土器総数の大半が縄文時代早期中葉から前期前半期に所属するものであることを考えた場合、本石器群も当該期に所属するものである蓋然性が高いものと判断される。ただし、磨製石斧としたものの中で蛇紋岩製の小形定角式が１点含まれる。不整形なものであるが、当該期のものとしては事例が少ないため、後世の所産であることも考えられる。

石　材

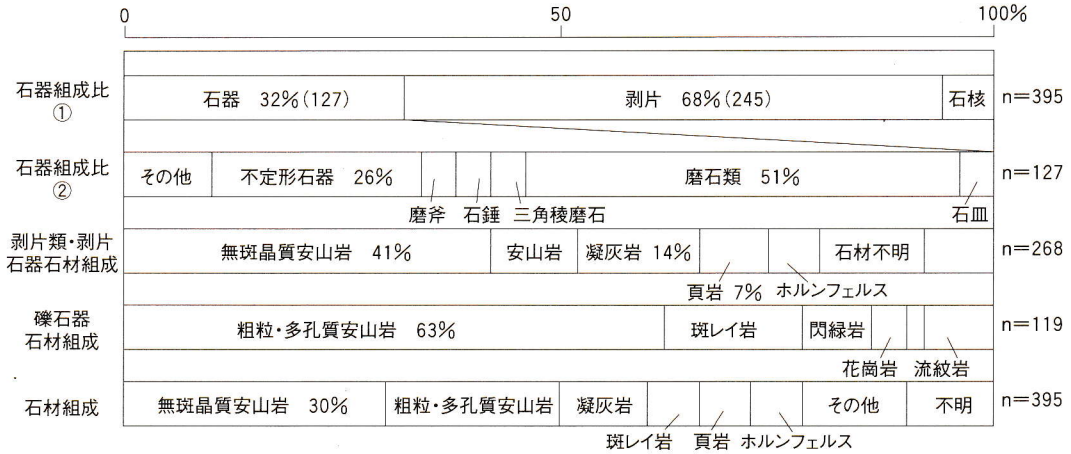
本遺跡出土の石器群に使用される石材は、安山岩を主体とし、それに斑レイ岩、凝灰岩、粘板岩、ホルンフェルス（註12）などが加わる。遺跡は前述したように信濃川と魚野川の合流点からやや上流の信濃川左岸に位置しており、こうした石材のほとんどは両河川での採取が可能な石材である。両河川の礫組成は第25図に示すように解析される基盤層の地質によって大きく異なっており、信濃川（岩沢）では安山岩と閃緑岩で全体の64％を占めるのに対し、魚野川（川口）では粘板岩類とホルンフェルス、斑レイ岩で全体の72％を占める組成比を示す。本調査区より出土した石器群は安山岩を多用する特色を持つことから石材組成は信濃川での礫組成に近似する。これは安山岩の使用頻度の高い器種が剥片類や磨石類、次いで不定形石器、打製石斧など出土数量の多い器種によって占められている事に起因するもので、他



第25図　遺跡周辺の石材環境（小千谷市教育委員会　1976を改変）

の定形石器で見た場合、点数の少ないこともあるが、それほど安山岩に片寄らない石材組成を示している。したがって安山岩使用率が高い磨石類や石皿、不定形石器、剥片類などはより手近な石材によって賄われた石器という側面を反映したものと推察される。なお、安山岩については磨石類などの礫石器、打製石斧に用いられる安山岩（多孔質・粗粒安山岩）と剥片類、不定形石器に用いられる事が多い黒色安山岩（無斑晶質ガラス質安山岩・無斑晶質安山岩）(註13) に大別され、以下の記述からはことわりが無い限り同様の意味として用いることとする。

この他、頁岩、流紋岩、チャート、玉髄、蛇紋岩などが希少石材として上げられる。特に頁岩、玉髄と蛇紋岩については具体的な産出地を求められないが、遠隔地からの搬入が考えられる石材である。



第４表　Ａ区石器組成表

石器各説

石鏃（第26図１～３）　石鏃は未成品と考えられるものを含め３点が出土しており、すべて図化した。１と２は頁岩製の凹基無茎石鏃である。基部の抉入は非常に浅く作り出しており、抉りの深さと幅の比率は１：８となる。３は石鏃の未成品と考えられるもので、左脚部が欠損している。凝灰岩製である。

石錐（第26図４）　１点のみ出土した。４は原面を打面とする凝灰岩製の貝殻状剥片を素材として両側縁に不連続な細部調整を施し、それぞれの端部で交差することによって尖頭部を作り出したものである。ここでは機能部を錐部として捉えたが、機能部の断面形状がやや扁平な台形を呈する点、打瘤を除去した痕跡が認められる点などから石鏃の未成品の可能性も考えられる。

石匙（第26図５）　１点のみ出土した。５は先端部が尖頭状となる縦形の石匙である。頁岩製の縦長剥片を素材とし、裏面から表面の順に周縁部分にのみ押圧剥離による浅い細部調整を連続的に施した後、裏面からの急角度剥離によりつまみ部分を作出したものであり、両面には素材面を大きく残している。

打製石斧（第26図６～８）　片刃の小型打製石斧や箆状石器に近似するものがあり、ここでは斧形に仕上げられた打製の剥片石器を本類とした (註14)。４点出土しており、欠損品を除いた３点を図化した。３点とも横長剥片を素材とし、刃部は片刃に作出されたものである。６はやや急角度な剥離を基部中心に施すことで刃部裏面に素材剥離面を大きく残す撥形を呈しており、刃部形状や形態的特徴から小型打製石斧との関連が指摘されるものである (註15)。側縁部調整と刃部調整の関係を観察すると刃部再生の可能性がある。７の刃部裏面にも素材剥離面を残すものだが、やや急角度の剥離をほぼ全面に対し施しており、

６とは異なるものである。８は表裏面からの急斜度剥離を側縁周縁に施すことで、両面に素材面を大きく残すものである。刃部左側に欠損が認められる。

ピエス・エスキーユ（第26図９）　両極剥離痕を有する石器を本類とした。２点出土しており、１点は欠損資料である。すべて２極１対の粘板岩製である。

不定形石器（第26図10・第27図11～14）　定形石器以外の剥片石器を本類とした。25点出土している中で５点を図示した。10は黒色安山岩製の厚みのある剥片を素材とし、刃部は右側縁に対し裏面からの急角度剥離を連続的に施し鋸歯縁状の刃部を作出している。11・12は刃部に使用によると考えられる微細な剥離が観察される石器である。11は黒色安山岩製の貝殻状の剥片を素材として打面付近に調整加工を施している。13・14は刃部がノッチ状に内湾する刃部を持つ石器で、片面からの急角度剥離を連続的に施すことによって刃部を作出するものである。

円盤状石器（第27図15）　円盤状を呈する大形の石器であり、１点のみ出土した。片面に礫面をもつ半割礫状の剥片を素材として裏面を中心に周縁からの平坦剥離を求心状に施されたものである。左側縁下部に角度の深い剥離が認められ、使用によって生じた欠損の可能性がある。

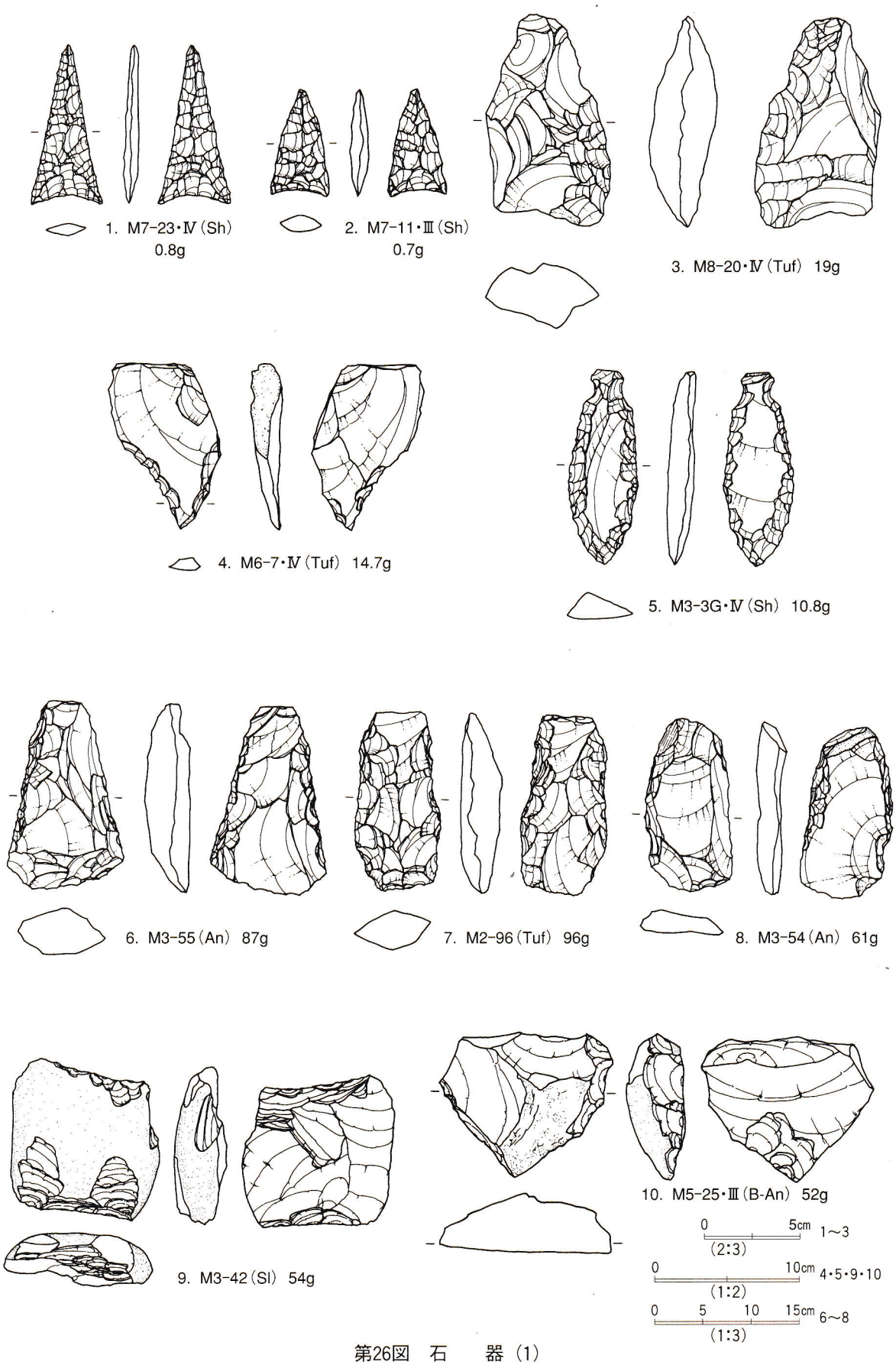
磨製石斧（第28図16～20）　刃部磨製石斧と定角式の小形磨製石斧が出土しており、定角式は小形のものが１点のみ出土した。欠損品の１点を除く５点を図化した。石材は定角式小形磨製石斧の蛇紋岩以外はホルンフェルスと斑レイ岩である。17・18は扁平な自然礫を素材とし、側縁に対し垂直方向からの剥離を施したものである。17は石器表面が風化しているためか、刃部の研磨痕は確認されなかったが、成形加工から判断して本類に含めた。18は扁平な自然礫の先端の両面に対し研磨によって刃部を作り出しているものであり研磨以外の加工は成されていない。19は全面に入念な敲打を施すことによって乳棒状に仕上げているもので、他の刃部磨製石斧とは異なっている。表裏両面に対し刃部を研磨している。20は定格式の磨製石斧。刃部には斜位の使用痕が観察される。

石錘（第28図21～23）　７点出土しており、うち３点を図化した。すべて敲打によって糸掛け部が作出された礫石錘である。大形のものが多く、平均重量は311ｇを測る(註16)。出土分布ではＭ２からＭ４グリッドの比較的狭い範囲に分布が纏まっている。

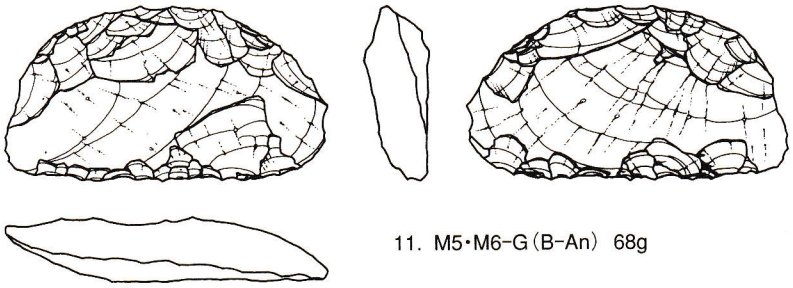
三角稜磨石（第29図24～27）　亜角礫あるいは長楕円形礫を素材とし、その石材の稜線上に磨り面を持つ石器。いわゆる「穀磨石」「特殊磨石」である。７点出土しており、機能面にはすべてざらついた磨り痕が確認される。水平運動と垂直運動を反復することによって生じた痕跡と考えられるが、機能面の側面に剥離痕を持つものは確認されなかった。

磨石類（第29図28～30）　楕円礫または扁平礫を素材とし、磨痕、敲打痕、凹痕を有する石器をさす。64点出土しており、５点を図示した。微弱な使用痕を残すものも本類に含めたため、数量的には多めになっている可能性がある。

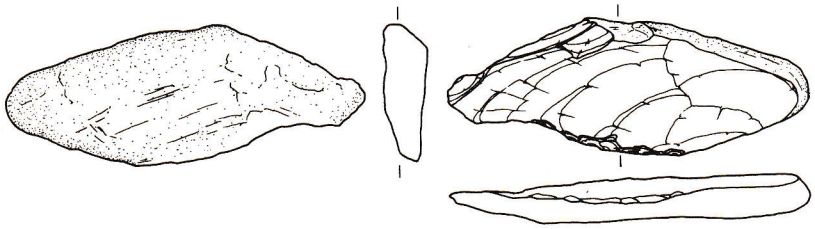
石皿（第29図31～32）　扁平な自然礫を素材とするもののみ。５点出土しており、２点を図化。31は板状石皿である。32は作業部に緩やかなくぼみを有するものである。


1. M7-23・Ⅳ(Sh) 0.8g
2. M7-11・Ⅲ(Sh) 0.7g
3. M8-20・Ⅳ(Tuf) 19g
4. M6-7・Ⅳ(Tuf) 14.7g
5. M3-3G・Ⅳ(Sh) 10.8g
6. M3-55(An) 87g
7. M2-96(Tuf) 96g
8. M3-54(An) 61g
9. M3-42(Sl) 54g
10. M5-25・Ⅲ(B-An) 52g
0 5cm 1～3
(2:3)
0 10cm 4・5・9・10
(1:2)
0 5 10 15cm 6～8
(1:3)

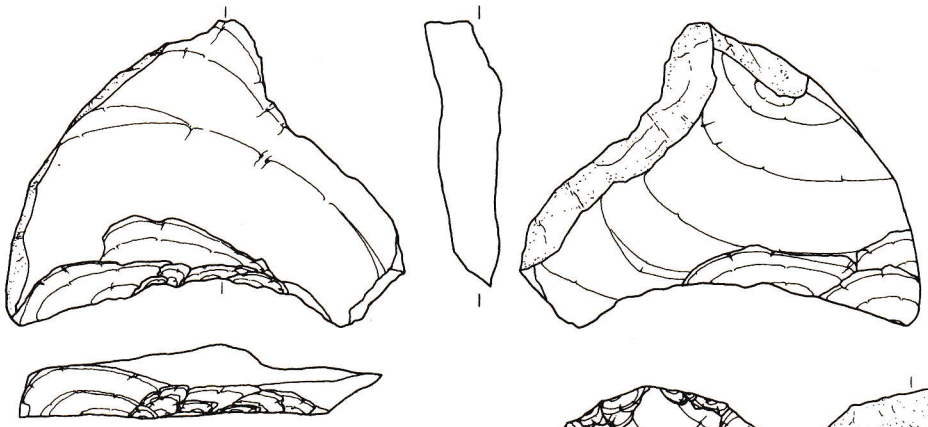
第26図　石　　器（1）



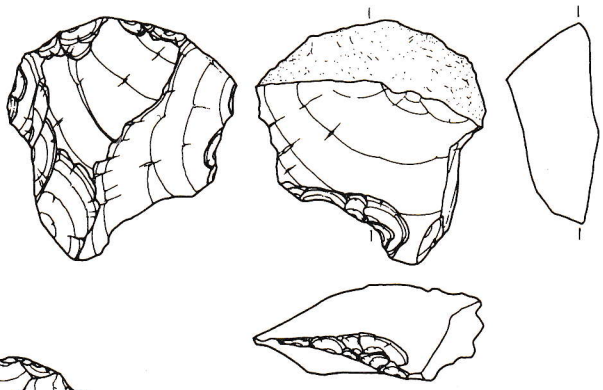
11. M5・M6-G (B-An) 68g



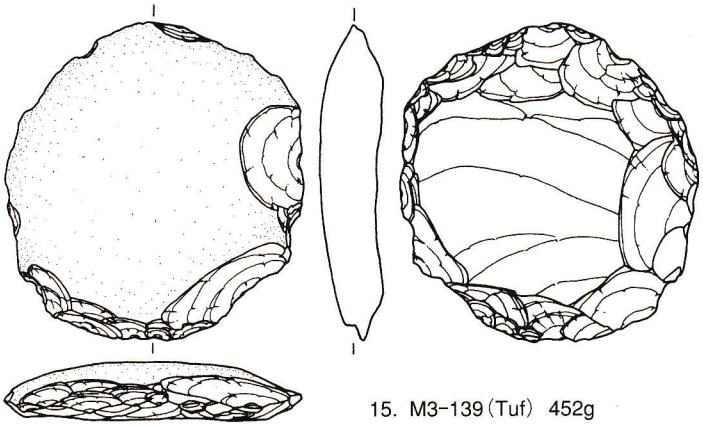
12. M5-26・Ⅲ (Ho) 41g



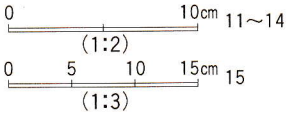
13. M2-85 (B-An) 122g



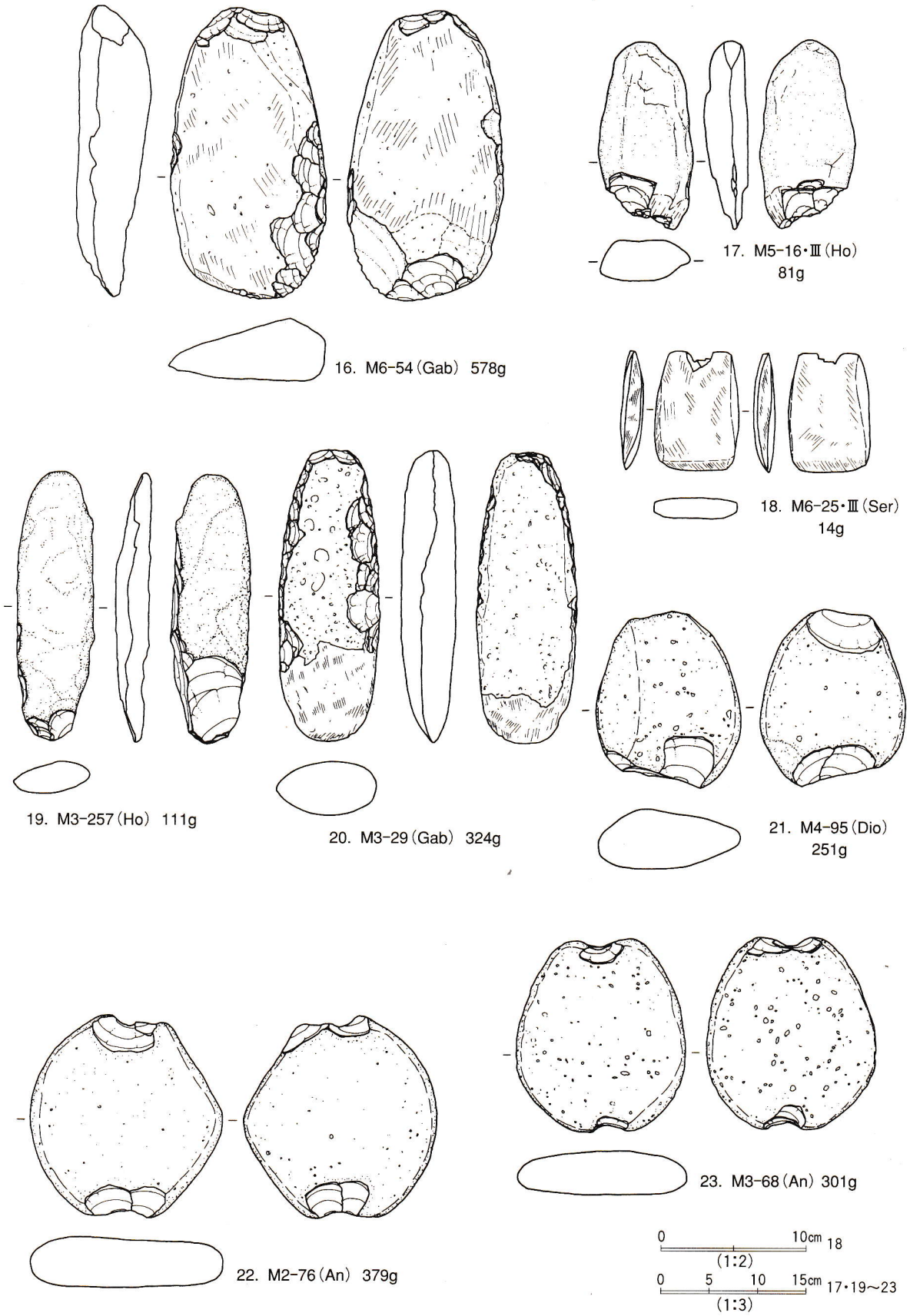
14. M6-3 (B-An) 74g



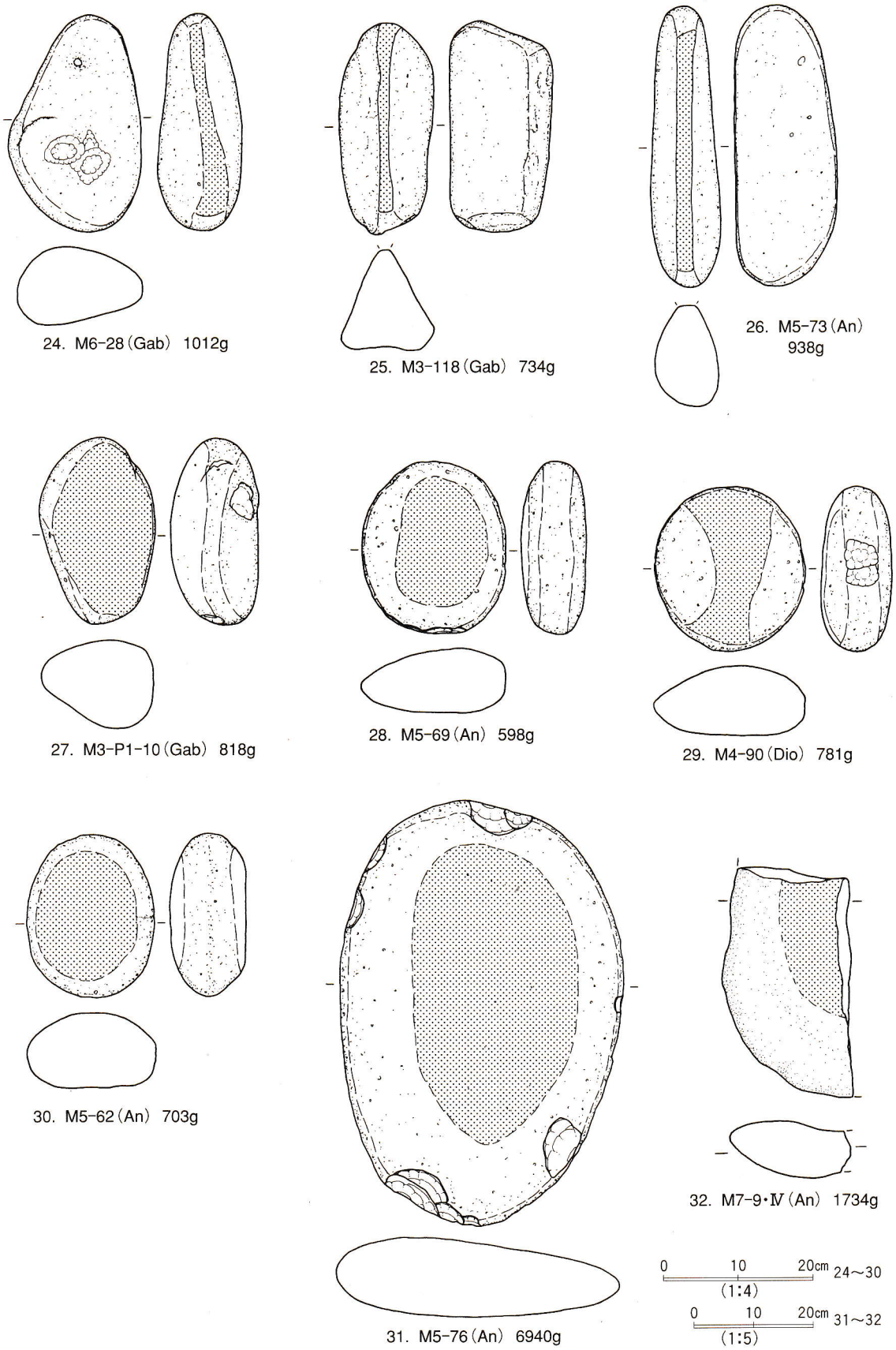
15. M3-139 (Tuf) 452g



第27図　石　　器 (2)


16. M6-54(Gab) 578g
17. M5-16・Ⅲ(Ho) 81g
18. M6-25・Ⅲ(Ser) 14g
19. M3-257(Ho) 111g
20. M3-29(Gab) 324g
21. M4-95(Dio) 251g
22. M2-76(An) 379g
23. M3-68(An) 301g
0 10cm 18
(1:2)
0 5 10 15cm 17・19~23
(1:3)

第28図　石　　器 (3)


24. M6-28 (Gab) 1012g
25. M3-118 (Gab) 734g
26. M5-73 (An) 938g
27. M3-P1-10 (Gab) 818g
28. M5-69 (An) 598g
29. M4-90 (Dio) 781g
30. M5-62 (An) 703g
31. M5-76 (An) 6940g
32. M7-9・Ⅳ (An) 1734g
0 10 20cm 24～30
(1:4)
0 10 20cm 31～32
(1:5)

第29図　石　　器 (4)

第Ⅳ章　ま　と　め

第１節　総　括

このたび実施した第３次発掘調査を含め、西倉遺跡での活動痕跡を確認することができた。

第１期：縄文時代草創期初頭（土器は不明）

第２期：縄文時代草創期後半（爪形文土器群）

第３期：縄文時代早期中葉　（沈線文系土器群）

第４期：縄文時代早期後葉　（条痕文系土器群）

第５期：縄文時代前期初頭　（羽状縄文系土器群）

第６期：縄文時代中期前葉　（千石原式土器対比）

第７期：縄文時代中期後葉　（沖ノ原式土器対比）

第８期：縄文時代後期前葉　（三十稲葉式～南三十稲葉式土器対比）

第９期：中世

これら９期に区分される活動痕跡のうち、第６期～第８期は第１次発掘調査成果（註17）を追認し、第２期と第３期は第２次発掘調査結果（註18）を補強するものである。また、第４期・第５期・第９期の小規模活動痕跡は、このたびの調査で新たに確認したものであり、第１期は確認できなかった。

第１・２期は完新世初頭に位置付けられ、遺跡範囲が信濃川氾濫源に位置し、時折、増水に見舞われると冠水する地形環境にありながらも人間集団が訪れて活動を行っていたことが判明している。具体的には、離水期直後（第１期）と縄文時代草創期後半の爪形文土器を保有する集団（第２期）である。その土器散布は第２・３次発掘調査区から東側崖線沿いまで確認でき、広い活動痕跡が残されている。また、遺物の散布のみでなく、小形土坑が検出され、破損したオニグルミ核片が1.3ｇ出土した（註19）。

第３期は、第２次発掘調査で確認された縄文時代早期中葉の沈線文系土器群である。第２次発掘調査段階では類例が無かったが、その後の周辺調査で小千谷市堂付遺跡（註20）が確認された。また、このたびの調査で小破片資料であるが、土器群のバリエーションをさらに把握することができた。

第４期・第５期は、小規模活動痕跡であり、全体像を把握するに至らなかった。

第６期～第８期は、本遺跡で行われた大規模な活動痕跡であると推定される。その位置は第２次・第３次発掘調査区より東側の約20㎡に、その中心があると推測される。また、その範囲から多量の円礫や扁平礫が出土していることから配石遺構が構築されていた可能性が極めて高い。この段階になると関連遺跡が判明してくる。特に、対岸には荒屋Ｂ遺跡が存在し、強い関連が予測される。他に、上の原Ⅱ・中山Ⅰ・強清水・大平遺跡などが関連していたと想定される。

第９期は、出土した擂鉢と壺の小破片から15世紀後半と判断される。今後、周辺に分布する中世山城跡や館跡などと関連して考察する必要性がある。

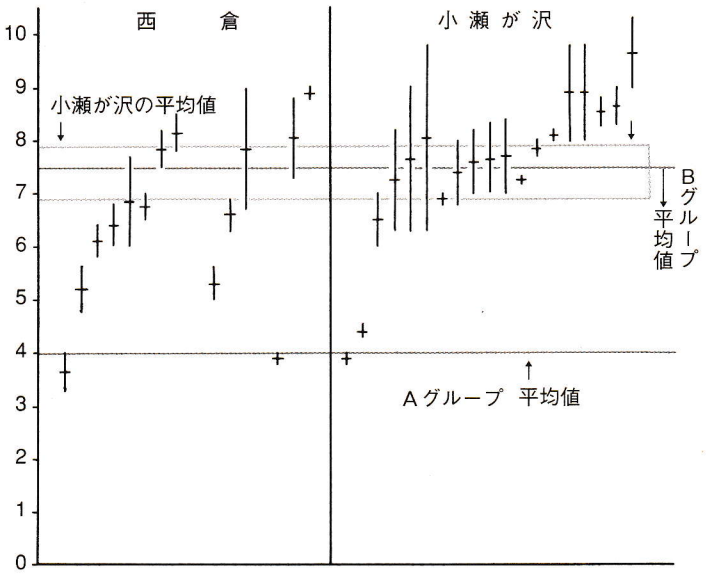
以上のように、このたびの調査は、面積253㎡・調査期間のべ31日の小規模調査であったにも拘らず、西倉遺跡と登録されている範囲で、９期に亘る大小の活動痕跡を記録することができた。その中でも15世紀後半の第９期の確認は重要であり、川口が中世における交通の要所として、確実たる歴史を本遺跡周辺に埋蔵している可能性が高くなってきたことが、最大の成果であったと言えよう。

第２節　西倉第１群土器について（第30図）

第２次発掘調査によって、縄文時代草創期後半に位置する土器群が確認され「西倉第１群土器」として周知された（註21）。その後、岡　修司による追加報告によれば横位一段・横位多段・横位羽状多段・斜位多段の構成が確認され、施文具幅・施文方向・施文密度の検討を加えると３つのカテゴリーに分類されるという（註22）。

ここで西倉遺跡（以下、西倉と略す）と小瀬が沢洞窟遺跡（以下、小瀬が沢と略す）から出土した爪形文土器の刺痕長を比較してみたい（註23）。

第30図は計測した爪形文の刺痕計測値の最大・最小をプロットして垂線で結んだ。縦線が長いほど計測値にばらつきがある。また、垂線の横棒は計測平均値を示す。



第30図　爪形文の比較

西倉資料の平均最小長は3.65㎜／平均最大長は8.15㎜である。小瀬が沢の平均最小長は3.9㎜／平均最大長は9.65㎜を計測する。全体の計測値分布を概観するならば、稀薄ではあるが刺痕長の平均値が５㎜以下のＡグループと５㎜以上10㎜以下のＢグループに大別される。

Ａグループは４点を数え、比較資料全体の約12％に当たる。最小長は3.3㎜で最大長は4.55㎜を計測する。その平均値は3.95㎜である。

Ｂグループは29点あり、そのうち最小長は4.8㎜で最大長は10.3㎜を計る。西倉の平均値は6.9㎜であり、小瀬が沢は7.91㎜である。その差は1.01㎜で、小瀬が沢がやや長い傾向がある。両遺跡の平均値間に収まる資料は、29点中11点あり、Ｂグループの約37.9％である。この11点中に西倉資料は１点のみである。両遺跡全体の平均値は7.44㎜である。この平均値の上下で分類した場合、西倉では12点中５点（41.6％）が平均値より上に計測平均値がある。小瀬が沢では17点中12点（70.5％）が平均値より上位の計測平均値がある。

以上のように、西倉と小瀬が沢から出土した爪形文の長さを比較した場合、約４㎜前後のＡグループと約7.5㎜前後のＢグループに二大別できる。Ｂグループはその平均値を境界に二分した場合、計測平均値が7.5㎜以上の資料が、西倉で約41％、小瀬が沢で約70％を占めた。よって、機械的であるが、計測平均値7.5㎜を境界にＢグループが分類できる。平均値より長いＢ１グループと小さいＢ２グループである。西倉の主体（約59％）がＢ２グループであり、小瀬が沢の主体（約70％）がＢ１グループである。共に、計測長が短いＡグループを稀薄ながら含む。

西倉では斜位刺痕・横位刺痕による横位一段・横位多段・横位羽状多段・斜位多段の文様構成が確認でき、他に絡条圧痕文（多段斜位構成）とハの字爪形文＋絡条圧痕文（ハの字爪形文：正位横位２段.

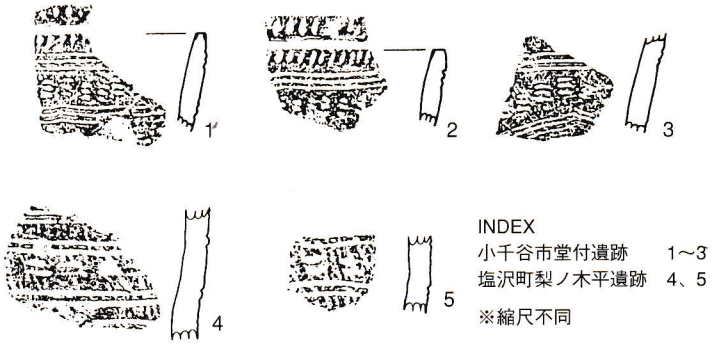
絡条体圧痕文：縦位横位）が出土している。小瀬が沢では斜位刺痕・横位刺痕による横位多段構成が基本である。他に、隆起線文＋ハの字爪形文（正位）、ハの字爪形文（正位・横位）、押圧縄文＋ハの字爪形文（正位）がある。

以上、概観したように西倉と小瀬が沢で出土した爪形文土器は、その刺痕長の微妙な違いと刺痕構成に違いがある。また、宮井英一の爪形文の変遷観によれば単方向多段⇒無文部を持つ横帯文構成・羽状等多様化⇒爪形文の衰退が予察されている（註24）。それを踏まえて推察するならば、小瀬が沢の斜位多段構成（Ｂ１グループを主体とした単一方向刺痕）⇒西倉（Ｂ２グループを主体とした単一方向斜位多段構成・横位羽状多段構成など：ハの字爪形文＋絡条体圧痕文：絡条体圧痕文：円孔文）への変遷が予測される（註25）。

西倉の重要な点は、絡条体圧痕文とハの字爪形文、円孔文の存在である。これら一群が共存していると考えた場合、壬遺跡を含めて慎重に編年的位置付けを行う必要性がある。現段階では共存していた可能性が高いと判断し、押圧縄文土器段階の古相に編年することが妥当と考える。また、今後、爪形文土器の単独時期が存在するか否かについても慎重に議論する必要があろう。したがって、近い将来、西倉遺跡において慎重なる学術調査が実施されることについて、不確実の部分が明らかになるであろう。

第３節　西倉第２群土器について（第31・32図）

西倉第２群土器は、第２次発掘調査の成果として認知された縄文時代早期中葉の沈線文系土器群である。当時、県内の沈線文系土器群は①一本引き沈線多段構成＋貝殻腹縁文（薬師堂・中土奥入・大崩・岩原Ⅰ・穴川）、②一本引き沈線による入り組み状モチーフ＋貝殻腹縁文（元卯ノ木・通り山）、③平行沈線による変形菱形モチーフ（元卯ノ木･梨ノ木平）、④貝殻条痕調整を施し一本引き沈線による変形菱形モチーフ（岩屋洞窟・岩野Ｅ）⑤一本引き沈線の横位区画内の充填文が貝殻腹縁文から一本・二本の沈線文に置換（上ノ原）、などの資料群があると認識した（註26）。そして、西倉第Ⅱ群土器の類例は県内に出土している沈線文系土器群になく、異端児的存在であると形容したのであった（註27）。



第31図　西倉第Ⅱ群土器の類例

その後、小千谷市堂付遺跡（第31図１～３）塩沢町梨ノ木平遺跡（第31図４・５）から類例が確認された（註28）。

第２次発掘調査報告書では、平行沈線文を施す（１類）と平行沈線文＋一本引き沈線文（２類）、平行沈線文＋円形刺突文（３類）が第Ⅱ群土器を構成するとした。さらに、口縁部は平縁を基本として、波状口縁や小波状口縁を呈し、口唇部や口唇部から内側にかけて絡条体圧痕文・刻目文（一本・平行線）が施される。口縁部直下に幅狭い区画文があり、口縁部文様帯と胴部文様帯に分帯されている。一部には、円形刺突文や貼瘤文が散見される。器壁は平均７㎜前後で、胎土には植物繊維は含まない。そして、最大の特徴は貝殻腹縁文を持たないとした。

このたびの第３次発掘調査の結果、第Ⅱ群土器の全体構成を再認識するに至った。すなわち、６類以外に、絡条体圧痕文（１類）、沈線文（一本引き：２類）、貝殻腹縁文（３類）、刺突文（４類）、有節沈線文（５類）、平行線による条痕文（７類）、植物束による条痕文（８類）に分類される多様な文様要素が確認され、尖底部資料（９類）も検出された。多様な要素が確認された事実はあるが、土器群全体の約７割は、平行沈線文を多用した一群（６類＝第２次：第Ⅱ群土器）である。

まず、これら一群が一括性の高い資料群として評価されるのであろうか。現段階では、第２群土器と第３群土器がほぼ同一層位から出土していることから時期の異なる資料群が混在して出土したと言える。また、土坑一括資料はＭ３－１号土坑だけであるが、４類のみの出土である。したがって、第２群土器としたまとまりの同時性については、さらなる吟味検討が必要である。

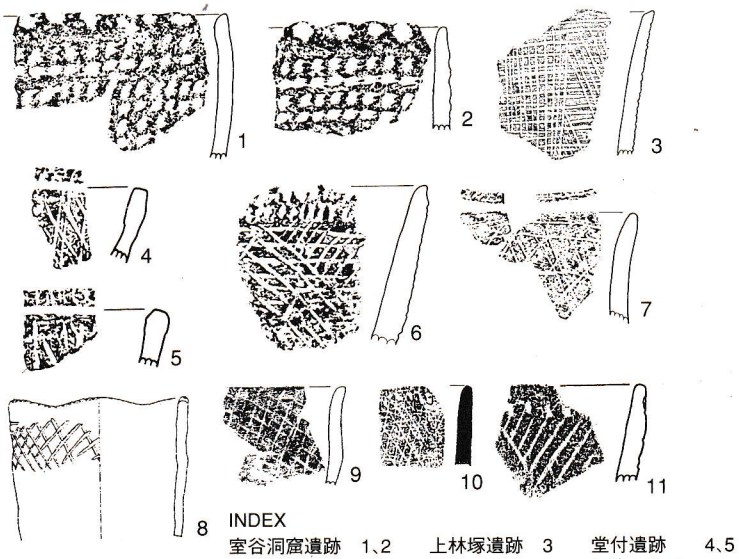
特に、第２次調査成果と比べた場合、①貝殻腹縁文の存在（３類）、②条痕状文の存在（７・８類）が問題であろう。とりあえず、①と②を除いた一群と第２次調査成果と重ね合わせて検討してみたい。

まず、主体となる平行沈線文を多用した一群（６類＝第２次：第Ⅱ群土器）を概観したい。その基本に、Ａ.口唇部への施文、Ｂ．口縁直下の区画、Ｃ．胴部区画＋菱形モチーフ、Ｄ．半截工具による平行沈線文や刺突文がある。この特徴が検討する一群で確認できるであろうか。その中でも、Ａの特徴は、他の口縁部資料が存在する１類・２類・４類・５類で確認できる要素であり、強い類似性として認められる。また、特徴Ｂは５類で確認できる。特徴Ｃは４類（第21図35）に類似する可能性がある。特徴Ｄである刺突行為は、４類・５類で確認できる。以上のように、１・２・４・５類には少なからず関連性を見出すことができる。

次に、稀薄ながら確認された平行沈線を引き掻きした条痕状文（７類）と植物束によると思われる浅く薄い条痕状文（８類）は、第３群土器（条痕文系土器群）と比較した場合、器壁厚や胎土に大きな違いがあることから、このたびは第Ⅱ群土器の一員として扱いたい。

一番の問題は、貝殻腹縁文（３類）である。胎土や焼成からやや異なる可能性がある。このたびは第Ⅱ群の一員に含めずに扱いたい。

次に、第Ⅱ群土器と周辺遺跡との関連を見たい。４類は、上川村室谷洞窟遺跡（以下、室谷洞窟と略す）の第二類［貝殻沈線文系土器］のうち、Ｅとされた口縁部に連続的な刺突文を横位多段に施文した一群（谷口：1996）に類似する（第32図１・２）。谷口康浩によれば、常世１式およびその前後に比定される。その一群には、二本歯状の施文具による連続刺突文、絡条体圧痕文の横位多段構成、細かい条痕があるという（註29）。



INDEX

室谷洞窟遺跡	1、2	上林塚遺跡	3	堂付遺跡	4、5
湯倉洞窟遺跡	6、7	上谷原遺跡	8	新水Ｂ遺跡	9
判ノ木山西遺跡	10	芦ヶ崎西平遺跡	11		

※縮尺不同

第32図　類例資料

２類とした一本引きの沈線による斜格子目文の類例を管見資料で検討した。三戸式に対比された湯沢町上林塚遺跡にも沈線による斜格子状文も散見できる（第32図３）。しかし、沈線が深く鋭角で偶然性の斜格子状文であるが、検討資料の沈線はやや幅広い鈍角の施文であることや意識された斜格子文であることから異なると考える。また、信濃川上流域に位置する長野県湯倉洞窟Ｘ層から斜格子文が出土している（第32図６・７）が、口縁直下に横位二条の区画線が確認でき、本例とやや異なる（註30）。東京都上谷原遺跡の第Ｖ群Ｈ２類の沈線で格子目文を描出したものに類似する（第32図８）。佐々木克典によればこの一群は、緩やかなくびれを一段持つ深鉢形土器で口縁下に沈線を施し無文帯を持つ特徴があり、鵜ケ島式に対比されるという（註31）。沈線の感じや口唇部への施文は類似するが、口縁下に配する無文帯は、検討資料にないと判断したい。よって、類例とみなせない。他に長野県新水Ｂ遺跡（第32図９）がある。口唇部に施文がない点は異なる。長野県判ノ木山西遺跡（第32図10）がある。口唇部の施文が口縁直下に移動して刺突列化したのか、上谷原遺跡例のように沈線区画を刺突列化したのか不明であるが、類例から外れる（註32）。提示した資料は、斜格子沈線として類似するが、細部で異なる要素がある。よって、類例としては近郊に位置する小千谷市堂付遺跡（第32図４・５）に求めることができる。一本引きの斜行沈線による斜格子文と口唇部への刻みが酷似している。

以上、第Ⅱ群土器は異端児的な在地土器として認識されてきたが、その土器群の多様性を第３次調査で確認することができた。しかし、少量かつ細破片であるという限界性からなかなか実態究明の鍵を得るまでには至っていない。ただ、２類とした一本引き沈線による斜格子文は、平行沈線文を多用した一群（６類）と共に近郊の堂付遺跡に存在することから同時性の可能性が高い。また、４類として扱った刺突文は、室谷洞窟に類例があり、常世式に対比されている。

以前、第Ⅱ群土器の編年的位置を検討した際には、大枠として田戸上層式併行期に対比した県内には、田戸上層式併行期の常世式との関連が指摘される資料も散見されるが、西倉第Ⅱ群土器は在地性の高い土器であるとした（註33）。

近年、小熊博史は早期中葉を沈線文系（貝殻沈線文系）土器群の段階とし、田戸下層式＝明神裏式＝室谷洞窟Ⅱ２Ｄ⇒田戸上層式＝常世式＝室谷洞窟Ⅱ２Ｅと編年整理を試みた（註34）。そして、西倉第Ⅱ群土器を取り上げ、室谷洞窟Ⅱ群第二類Ｅに併行させた。すなわち、田戸上層式＝常世式に併行するという。ここで問題なのは、沈線文＋貝殻腹縁文の一群の扱いである。すなわち、室谷洞窟Ⅱ２Ｄに代表される一群を小熊は、田戸下層式併行期の中で理解したのである。

しかし、筆者の疑問は田戸下層式⇒田戸上層式の変化は、器形および文様帯構成に大きな変化が生じている。果たして、明神裏Ⅲ式土器や室谷洞窟Ⅱ群二類Ｄが田戸下層式に併行するものか疑問である。室谷洞窟Ⅱ群第二類Ａは田戸下層式期で理解できると考える（註35）。

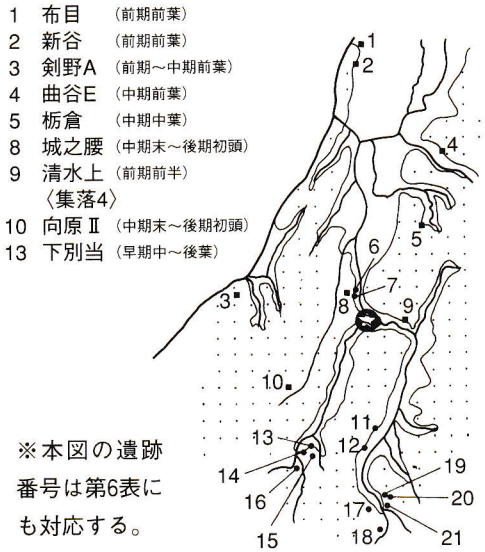
よって、西倉第Ⅱ群土器の文様要素や文様構成、そして器形から判断して、田戸上層式併行期に位置付けられる。但し、細い沈線文で描いた幅狭い横位区画や曲線・幾何学モーチフ内に貝殻腹縁文を充填する一群（室谷洞窟Ⅱ群第二類Ｄ）と西倉第Ⅱ群土器は共伴しない事例が多いことから田戸上層式併行期において新旧二段階に区分される可能性が推察できる。

今後の資料増加を待ち、県内における田戸上層式併行期～子母口式併行期を検討したい。

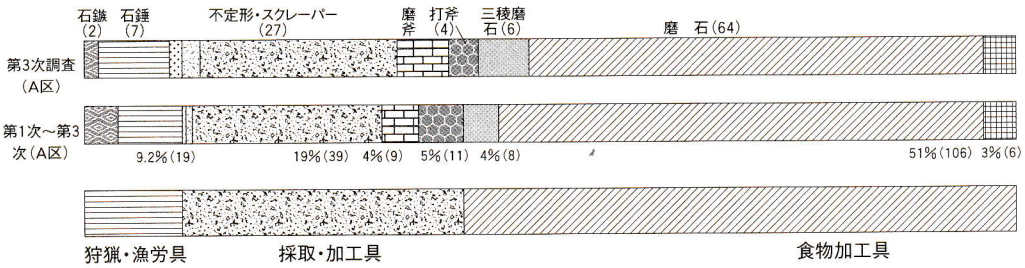
第４節　西倉遺跡の石器群とその組成（第33～34図・第５・６表）

西倉遺跡のこれまでの調査によって得られた石器のほとんどが包含層中出土資料であることから所属時期を特定することは困難であるが、出土土器の遺物観察から概ね縄文時代早期中葉から前期前葉の様相を示すものと思われる。近年の石器組成の検討が進められてきたことにより新潟県内での当該期の石器群の様相は徐々に明らかになってきている（註36）。ここでは他遺跡との対比を踏まえ本遺跡石器群について纏めておきたい。

【石器組成】磨石類を中心とする食物加工具が全体の58％を占め、採取・加工具、狩猟・漁労具が続く用途別の石器組成を示す（第５表）。こうした食物加工具優位の組成は岩原Ⅰ(20)で471点、新谷（２）で581点の磨石類の出土に示されるように、山間部や海岸部問わず、早期後半以降の石器組成の一様相を示すものと考えられる。また、当該期の山間部の組成では、下別当(13)、上林塚（21）、岩原Ⅰで打製石斧の優位性が示される一方、海岸部の布目（１）、新谷で磨製石斧や石錘の出土比率が高い（註37）。西倉では打製石斧の占める割合が低く、むしろ石錘や磨製石斧の占める割合が比較的高い点から山間部と海岸部に中間に位置する地理的環境を反映している可能性が考えられる。



第33図　遺跡位置図



第５表　石器組成表

【三角稜磨石】本調査において縄文時代早期沈線文段階の遺構に伴って三角稜磨石の出土が確認された。魚沼地域ではこれまでにこの種の石器の所属時期についてあまり触れられていない現状であるため、名称および定義上の確認を含め、周辺地域における分布と消長について触れておきたい。

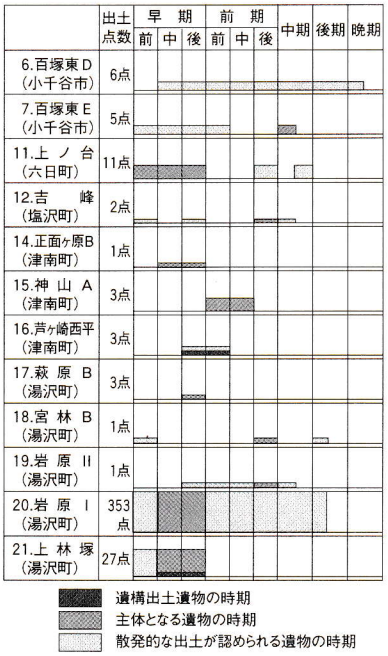
定　義　素材となる礫の長軸に平行する稜を機能面として「ざらついた磨面」を有するもので、断面形が三角形またはそれに近い形状を呈するもの（註38）。

すなわち、素材選択の段階で特定の形状に執着していると見られる点に本石器の特殊性があるものと考えられるため、他の磨石類と同様な形態を持つものについては形状に固執しない合目的的な素材利用を行なっているという点で区別しておく必要があるものといえる。したがって本石器の分類は石器の使用用途の違いを示すものではないという点に留意する必要があろう。

用　語　これまで「穀磨石」「特殊磨石」「稜磨石」など様々な名称が付けられていたが、上記したように、本石器は断面三角形状を呈する素材形状という点が重要であることから、想定される用途と著しく異なる用語よりも、形状を示す『三角稜磨石』の用語を使用したい。

分　布　中部高地地域および新潟県上越地域では、縄文時代早期押型文土器に伴うことが知られている（註39）が魚沼地域では、これまで押型文に伴う事例は無く、早期末から前期初頭の段階から安定した出土傾向が認められる（第６表）。西倉遺跡のＭ３－Ｐ１から出土したものは現在までのところ魚沼地域で最も古い事例となる。出土分布では魚野川流域に集中し、岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡で突出した出土量を示す。また岩原Ⅱや吉峰、萩原Ｂなど前期諸磯Ｂを主体とする遺跡で出土が確認されており、概期を下限とするものと考えられる。

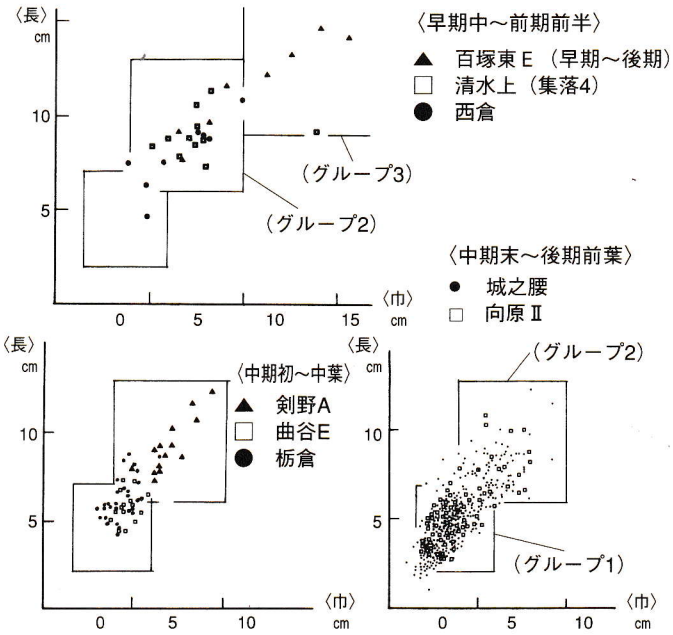
なお、「三角稜磨石」の機能面の痕跡について八木（1976）は水平及び垂直運動によって残されたものとしており、その機能もなめし具など、他の磨石類とは異なる用途が考えられるとする。こうした使用痕に対する用語については、これまであまり触れられていないが、磨石類側面にも見られる「ざらついた磨面」との関連も含め、今後の課題と言えよう。



第６表　三角稜磨石出土遺跡表

【石 錘】信濃川中流域から海岸部周辺では石錘が多く出土する地域とされる。こうした周辺遺跡での石錘の様相と対比し、西倉遺跡出土石錘の位置付けについて触れておきたい。

第34図は石錘の長幅分布を時期別に纏めたものである。分布のピークから判断すると、長さ２～６cm・幅２～５cmに集中するもの（グループ１）、長さ７～10cm・幅６～８cmに集中するもの（グループ２）、長さ10～15cm・幅９～16cmに集中するもの（グループ３）に視覚的に分離される。遺跡単位では、グループ２主体の遺跡：清水上・西倉・剣野Ａ、グループ１主体の遺跡：曲谷Ｅ・栃倉、グループ１・２で構成される遺跡：城之腰・向原Ⅱに分けられる。こうしたグループのあり方は石材環境よりも用途によって石錘の大きさを選別し利用した結果を反映するものと考えられる（註40）。西倉と同様な大きさの分布を持つ清水上遺跡（集落４）の石錘が時期的・地理的にも近いものであることから今後、地形環境との結びつきにも留意する必要があろう。



第34図　石錘の大きさ

＜註＞

註１．作成にあたり、以下の論文を参考とした。
新潟平野団体研究グループ　1972「新潟県小千谷市周辺の第四系―新潟県の第四系そのＸⅥ『新潟大学教育学部高田分校紀要』17、
新潟平野団体研究グループ　1979「信濃川の河岸段丘」『アーバンクボタ』17、
新潟平野団体研究グループ　1995「新潟県下のローム層について　そのＩ－信濃川ロームについて」『地球科学』49
早津・新井　1981「信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代」『地質学雑誌』第87巻 第12号
地質調査所　1986『小千谷地域の地質』
渡辺・新潟平野団体研究グループ　1999「新潟県のローム層の火山灰の層序」『第四紀』31、
渡辺秀男・稲葉明　1988「第４章４ 信濃川流域」『日本の地質４　中部地方Ｉ』
渡辺秀夫　2001「信濃川段丘群の形成と構造運動の考察」

註２．前掲、註１の文献を参考にして下記の文献に使用された図に加筆・修正を加え作成したものである。
佐藤雅一　1988「第Ⅱ章　２．周辺の遺跡」『西倉遺跡　－第２次発掘調査－』川口町教育委員会

註３．星野亀吉　1959『不思議なお祭り　闘牛の神事』

註４．星野・井口両氏は昭和30年頃から遺跡分布調査を行なっており、荒屋遺跡の発見や月岡遺跡を発見したことでも知られる。埋蔵文化財の周知と保護の基盤を固められた。

註５．遺跡台帳には荒屋Ａ遺跡で登録されているが、学史上の遺跡名を重視し荒屋遺跡とした。
芹沢長介　1959「新潟県北魚沼郡荒屋遺跡」『日本考古学年報』11
芹沢長介　1960「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について」『第四紀研究』１－５
東北大学文学部考古学研究室　1990『荒屋遺跡―第２・３次発掘調査概報－』川口町教育委員会
川口町教育委員会　2002『荒屋遺跡－範囲確認調査発掘調査報告書』

註６．蟹沢・強清水・狐原に石囲炉のあったことは新潟県遺跡台帳に記載されている。また、上ノ原Ⅱ検出の石囲炉は川口町教育委員会で移築し保管している。川口町歴史民俗研究同好会　1980「川口町西倉上ノ原遺跡ノ炉」『会誌』２号

註７．佐藤雅一・星野洋治・石坂圭介・岡修司　1993「信濃川水系における縄文時代草創期遺跡の様相」『環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟大会実行委員会

註８．魚沼地域において複数の遺跡で確認される黒ボク土層を色調的に区別できる栗褐色～暗赤褐色～淡紫黒色を呈する完新世の堆積土層の総称である。栗褐色土層に包含された遺物群は遺跡ごとに齟齬があり、縄文時代草創期末～平安時代の時期幅を持つ。包含される遺物群の時期から本土層が複数のグループに纏まることが指摘されており、それぞれの時期の土層と生成要因とが相関する可能性がある。またテフラの含有する土層が含まれる可能性もあり、鍵層の手掛りに成り得る重要な土層といえる。なお黒ボク土層との色調の差異の要因については腐食含有量の量比や鉱物組成、テフラ含有の有無などの要因が考えられている。

註９．ここでは第Ⅱ群土器という言葉を縄文時代早期中葉～後葉の時間軸にあてはまると考えた土器に対して使用したため、第２次調査で使用した「第Ⅱ群土器」とはやや異なった内容を持つ。
佐藤雅一　1988『西倉遺跡　－第２次発掘調査－』川口町教育委員会

註10．八木光則　1976「いわゆる「特殊磨石」について－中部地方における縄文時代早期の石器群研究への問題提起―」『信濃』第28巻　第４号　信濃史学会

註11．地形が東に向かってやや傾斜しているため、特に調査区幅の比較的広いＭ３グリッド付近では土層断面図よりもやや 低いレヴェルに遺物のドットがプロットされる傾向がある。

註12．石材名称についてホルンフェルスとした石材は堀川秀夫先生から「細粒砕石岩」と呼ばれているとのご教示を得た。また、本報告では泥質の頁岩については「粘板岩」という名称を使用している。

註13．黒色で緻密な安山岩質の石材をここでは一括して黒色安山岩とした。
中束耕治・飯島静男　1984「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材－黒色頁岩と黒色安山岩」『群馬県博物館報』５

註14．阿部芳郎　1989「箆状石器の系統と変遷」『半蔵窪遺跡調査報告書』学校法人東京純心女子学園

註15．大工原豊　2002「打製斧形石斧の系譜」『石斧の系譜－打製斧形石斧の出現から終焉を追う』笠懸野　岩宿文化資料館

註16．本遺跡出土資料のような大型の石錘は小千谷市の縄文時代早期の遺物を出土する遺跡でも出土しており、百塚東Ｄ遺跡で重量500～1300ｇ、百塚東Ｅ遺跡で100～300ｇ、堂付遺跡で100～400ｇの石錘の重量分布が示されている。こうしたあり方は小千谷市の縄文時代後期遺跡である城之腰遺跡出土石錘の重量のピークが10～40ｇに分布することと比較した場合、重量の変化が機能を表しているものと捉えられる。

註17．安藤文一　1982『西倉遺跡　－第１次発掘調査報告書－』川口町教育委員会

註18．佐藤雅一　1988『西倉遺跡　－第２次発掘調査－』川口町教育委員会

註19．渡辺　誠　1988「付編　新潟県川口町西倉遺跡出土の植物遺体」『西倉遺跡　－第２次発掘調査－』川口町教育委員会

註20．遠藤孝司　1996「第Ⅵ章６Ａ．縄文土器」『国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ　堂付遺跡　百塚東Ｅ遺跡　百塚東Ｃ遺跡　割目Ｂ遺跡』小千谷市教育委員会

註21．前掲、註18の文献を参照願う。

註22．岡　修司　1997「川口町西倉遺跡採集の爪形文土器」『越佐補遺些』第２号　越佐補遺些の会

註23．小瀬が沢洞窟遺跡の資料計測は、以下の再報告から原寸復元を試み計測した。
小熊博史他　1994「新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『環日本海地域の土器出現期の様相　－1993年度　日本考古学

協会シンポジウムー』 雄山閣

註24. 宮井英一　1988 「基調講演　爪形文土器と押圧縄文土器」『埼玉考古』第24号　埼玉県考古学会

註25. 中島　宏 「Ⅱ列島における縄文土器型式編年研究の成果と展望(1)草創期（爪形文系土器）」『縄文時代』第10号第１分冊　縄文時代文化研究会

註26. 佐藤雅一　1988 「第Ⅴ章　まとめ　1. 第Ⅱ群土器について」『西倉遺跡　－第２次発掘調査－』 川口町教育委員会

註27. 前掲、註26の文献を参照願う。

註28. 前掲、註20の文献を参照願う。

佐藤雅一　1987 『梨ノ木平遺跡』 塩沢町教育委員会

小熊博史　1997 「新潟県における押型文系及び沈線文系土器群の様相」『シンポジウム　押型文と沈線文』 本編　長野県考古学会縄文時代（早期）部会

註29. 谷口康浩　1996 「第二節　室谷洞窟出土土器の再検討」『新潟県上川村神谷地域学術総合調査報告書［人文編］かみたに　－考古－』 上川村教育委員会

註30. 広瀬昭広　2001 「第３章第１節　草創期から早期中葉」『湯倉洞窟』 高山村教育委員会

註31. 佐々木克典他　1982 「縄文時代早期の遺構と遺物」『神谷原Ⅱ遺跡』八王寺椚田遺跡調査会

註32. 小林秀夫　1981 「伴ノ木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市･原村　その３－』 長野県教育委員会

伴ノ木山西遺跡の提示資料に近似する資料が、津南町芦ケ崎西遺跡Ｃ６－Ｐ４から出土している（第32図11）。斜格子にならないが、集合沈線＋口縁直下の刺突の要素が確認できることは注目される。高橋清文氏からご教示頂いた。

註33. 前掲、註18の文献を参照願う。

註34. 小熊博史　1999 「第２章第２節第２項　早期」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会

註35. 前掲、註30の文献を参照願う。

広瀬昭広は、貝殻沈線文土器を分類する中で、沈線＋貝殻腹縁文（第３類ａ）のカテゴリーを設定し、編年的に田戸上層式に対比させており、筆者の捉え方と同様である。

註36. 鈴木俊成　1999「第２章第５節第２項　早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

註37. 前掲、註37の文献を参照願う。

註38. 佐藤雅一　1985『岩原Ⅲ遺跡』 前掲、註８の文献を参照願う。

註39. 立木由理子・寺崎裕助　1997『一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ　中の沢遺跡』新潟県教育委員会、前掲、註８の文献を参照願う。

註40. 信濃川流域での石錘の在り方として、上流域では軽く、下流域で重いというおおまかな傾向が明らかにされているが、このことからも石錘の大きさが、石材環境を反映するものではないことを裏付けている。

引用・参考文献

植田文雄　1998 「縄文時代における食料獲得活動の諸相－石皿の分布からみた発展段階の認識と復元への展望」　『古代文化』第50巻 第10号

卜部厚志・高浜信行・塚野明美・渡辺秀男・東野外志男・信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ　2000 「新潟地域における完新世の火山灰層序と対比」『日本第四紀学会講演要旨集』96-97.

遠藤　佐　1990 『市内遺跡詳細分布調査報告書』小千谷市教育委員会

小千谷市教育委員会　1976 『小千谷の自然』

川口町　1986 『川口町史』

佐藤雅一・八木次男　1988 「旧石器時代から縄文時代草創期の遺物－魚野川流域を中心として－」『新潟県考古学談話会会報』第１号

佐藤雅一　1988 「西倉遺跡第２次発掘調査概要速報」『会誌』第10号　川口町歴史民俗同好会

信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ　2002 「信濃川津南地域における第四紀末期の段丘形成と構造運動」『第四紀研究』41：199-212.

新潟県教育委員会　1987 『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』

新潟県　1983 『新潟県史　資料編１　原始・古代―考古編』

早津賢治・新井房夫　1981 「信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代」『地質学雑誌』, 87, 791-805.

藤巻正信他　1980 『上の原Ⅱ遺跡　上の原Ⅲ遺跡　木下屋敷遺跡　岩出原遺跡』新潟県教育委員会

星野洋治・佐藤雅一　1990 「北魚沼郡川口町西倉遺跡採集の爪形土器群について」『新潟考古』第１号

堀之内町　1995 『堀之内町史』

町田　洋・新井房夫　1976 「広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－」『科学』46, 339-347.

町田　洋・新井房夫　1978 「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰」『第四紀研究』17, 143-163.

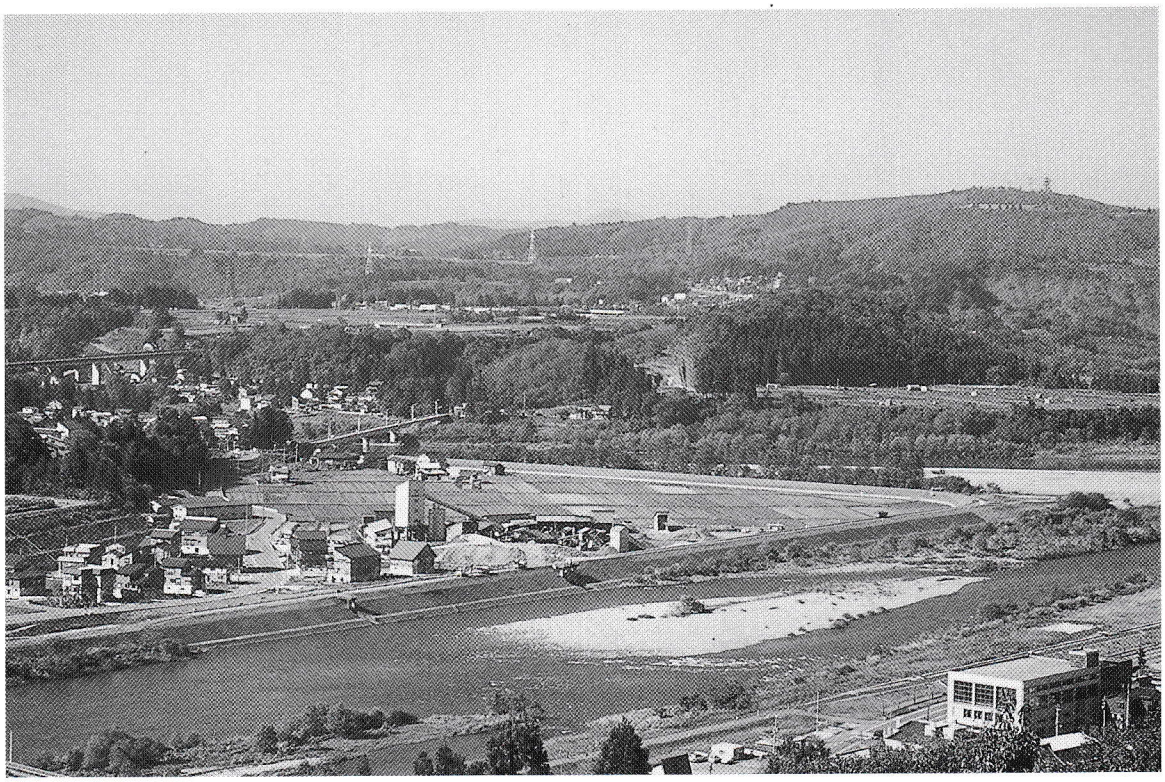
町田　洋・新井房夫　1992 『火山灰アトラス』276p, 東大出版.

新潟火山灰グループ　1981 「新潟県下のローム層について　そのⅠ－信濃川ローム層について－」『地球科学』35, 294-311.

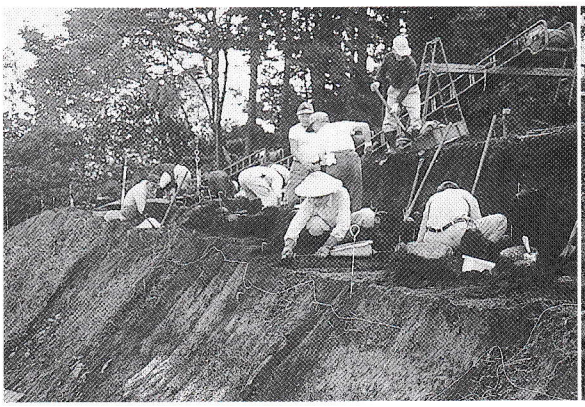
新潟火山灰グループ　1995 「新潟県下のローム層について　そのⅡ－信濃川ローム層の層序－」『地球科学』49, 188-202.

渡辺秀男・卜部厚志・荒川勝利　1999 「新潟県津南町地域の貝坂段丘堆積物中の広域火山灰」『地球科学』53：420-433.

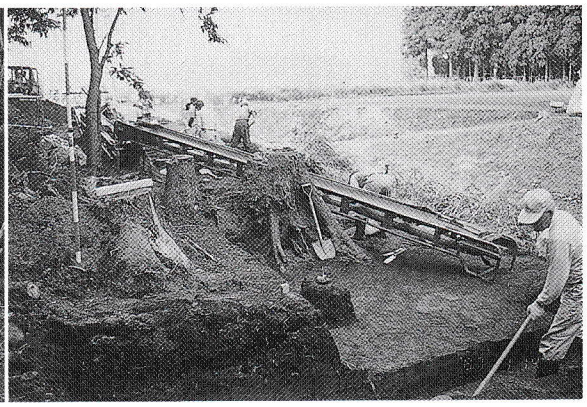
吉川周作　1976 「大阪層群の火山灰層について」『地質学雑誌』82, 497-515.



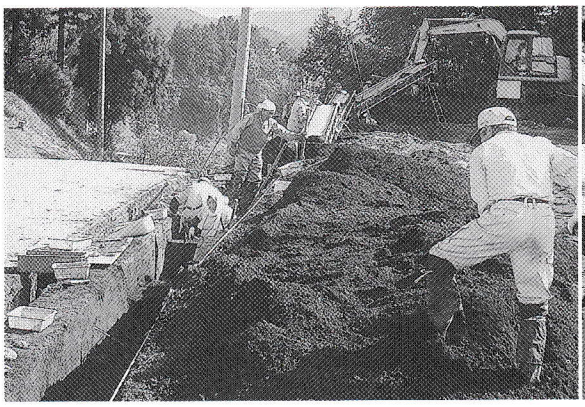
遺跡遠景（東より）



作業スナップ（1）



作業スナップ（2）

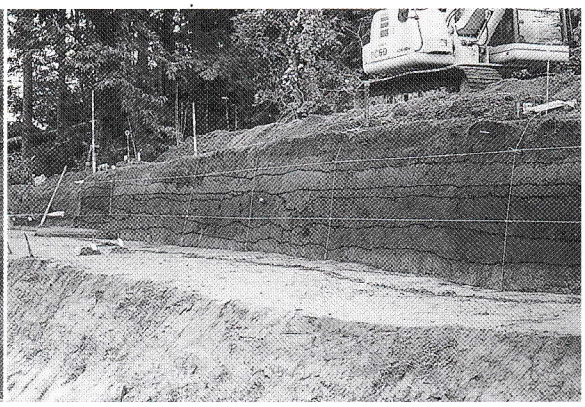


作業スナップ（3）

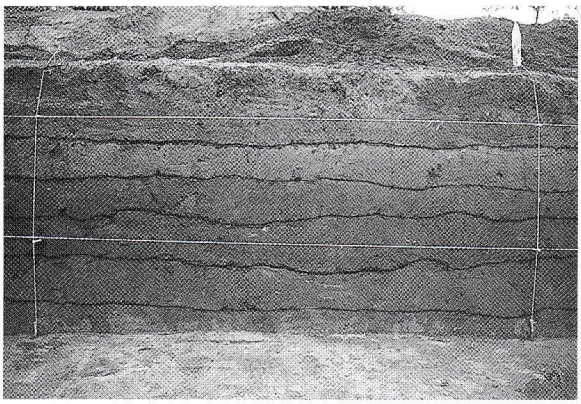
作業スナップ（4）

図版 2

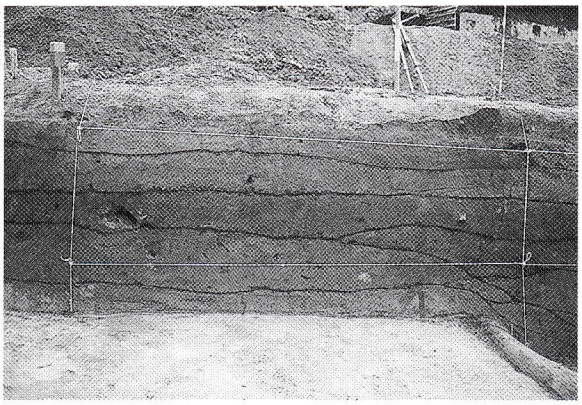
遺跡近景（北から）



土層断面（北から）



基本層序①



基本層序②

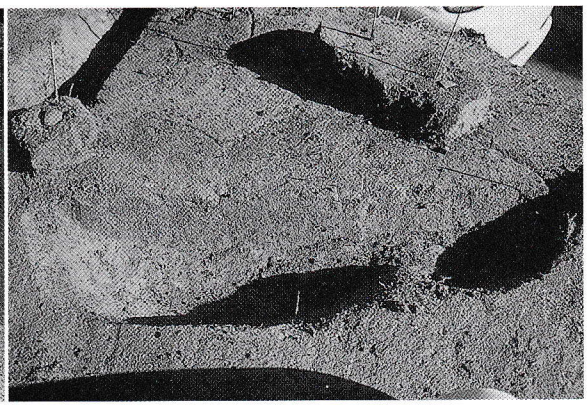
遺物検出状況①（南から）

遺物検出状況②（北から）

試掘範囲（B区ー南から）

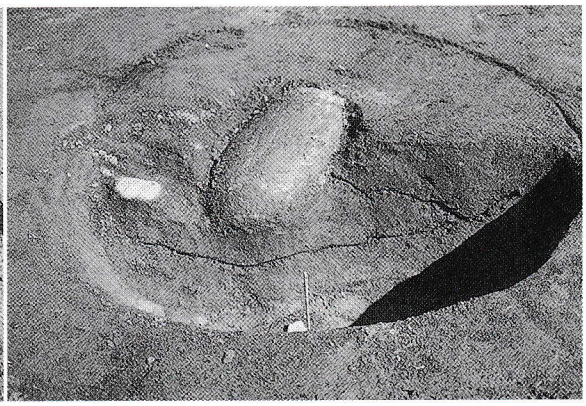
爪形文出土状況（東から）

M3ー1号土坑（北から）



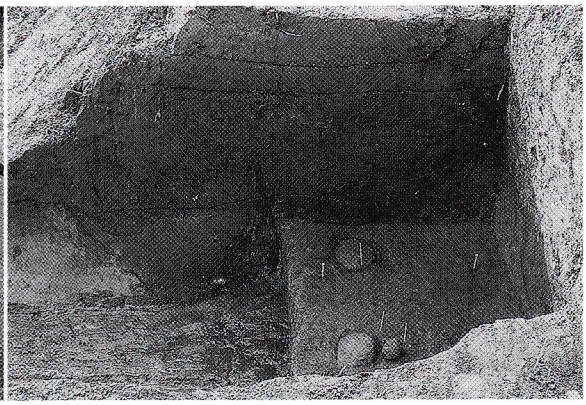
M2ー1号土坑（北から）

M3ー2号土坑（南から）



M3ー2号土坑（南から）

M4ー1号土坑（東から）

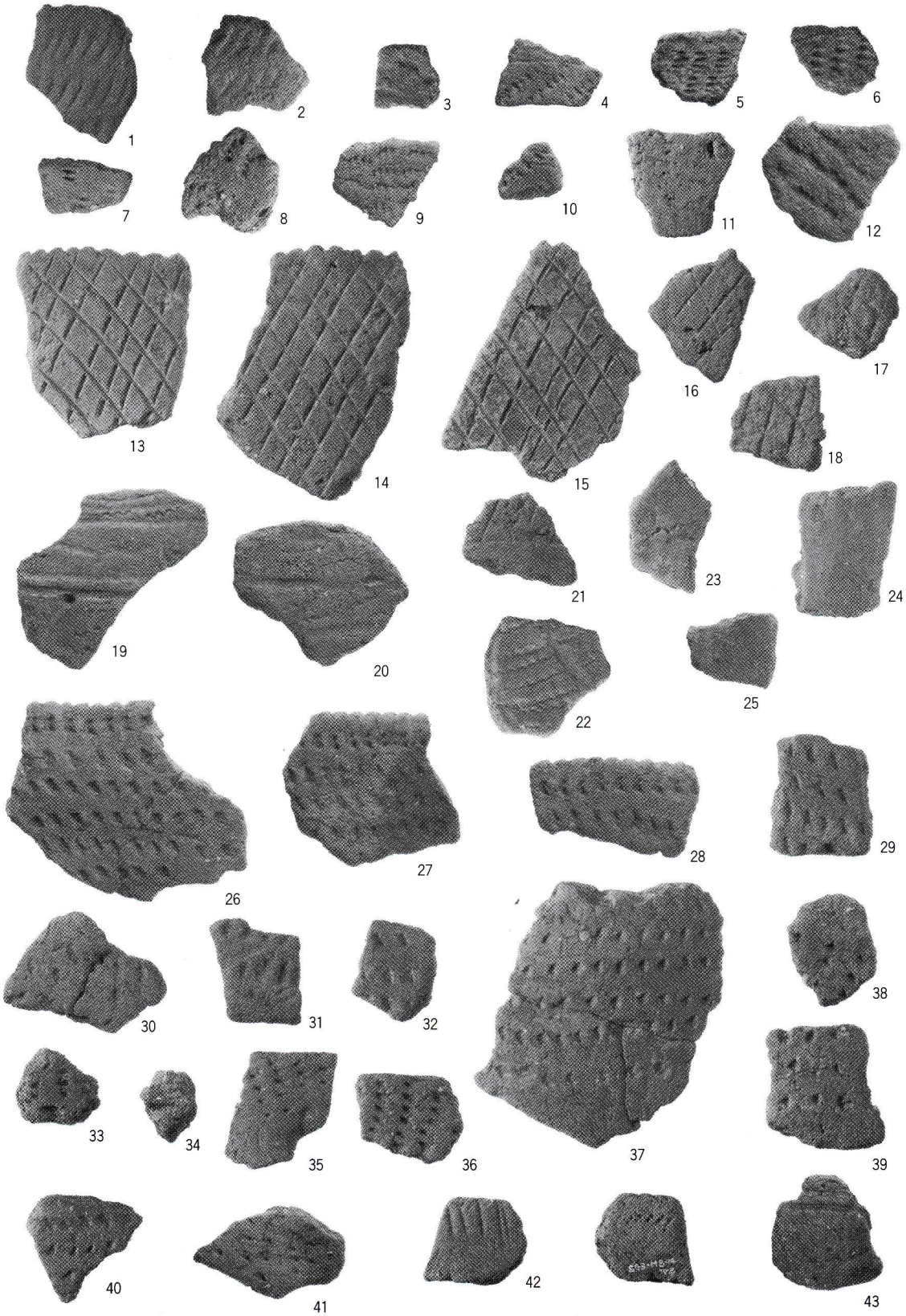


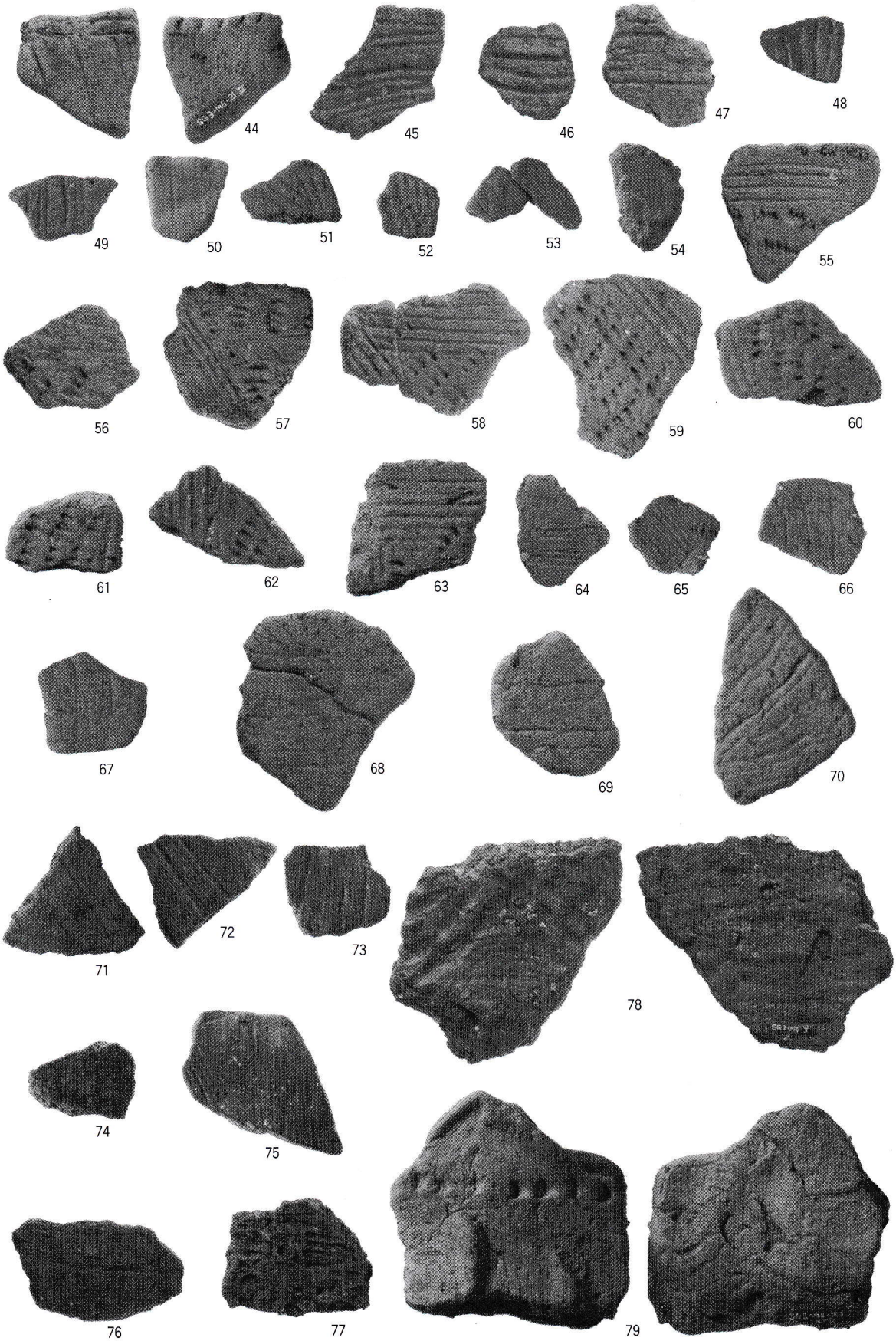
M5ー1号土坑（北から）

M6ー1～3号土坑（北から）

M5ー1号土坑（北東から）

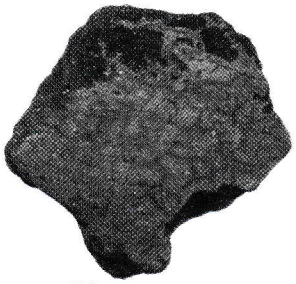
図版 4


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

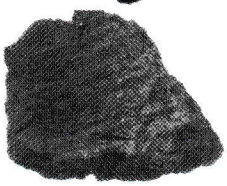

44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
78
74
75
76
77
79

図版 6

80

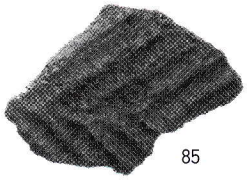

81

82



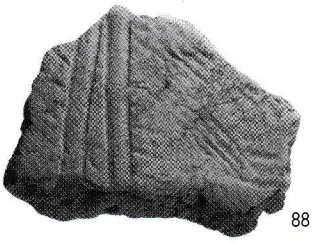
83

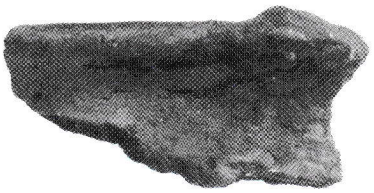
84

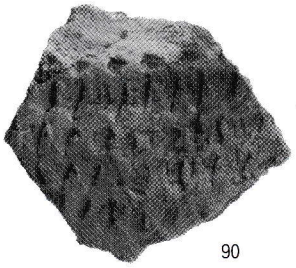

85

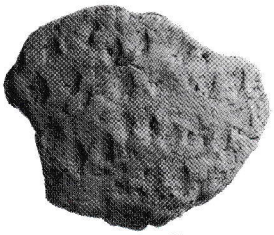
86

87

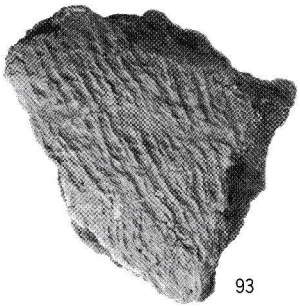

88

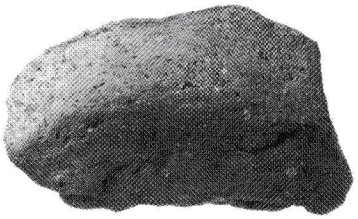

89

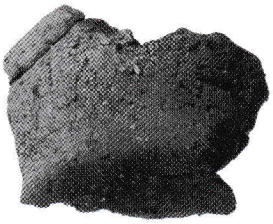

90

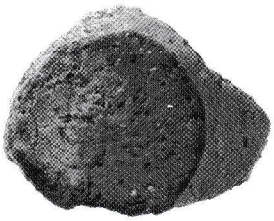

91

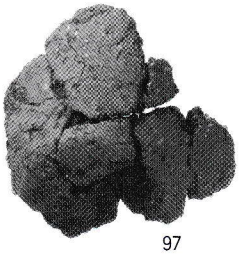
92


93

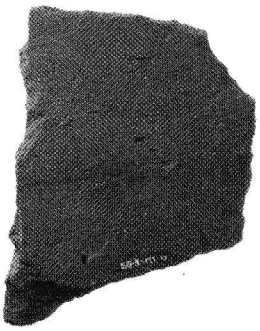

94

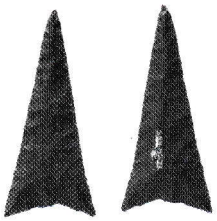

95


96

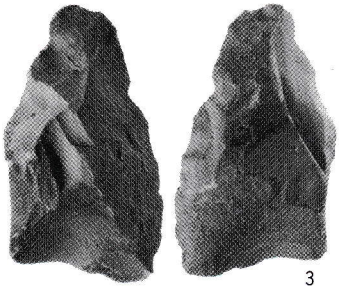

97

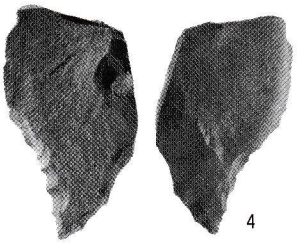
98

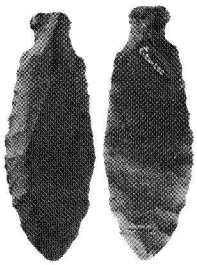

99

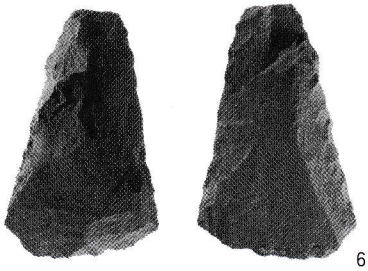

1

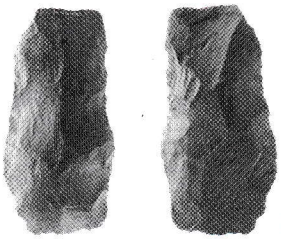
2

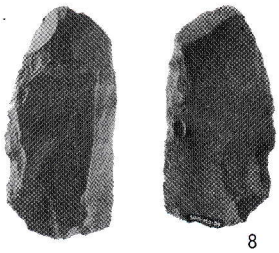

3


4

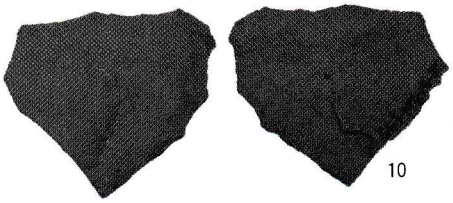

5

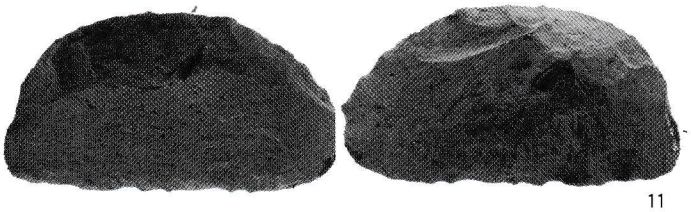

6

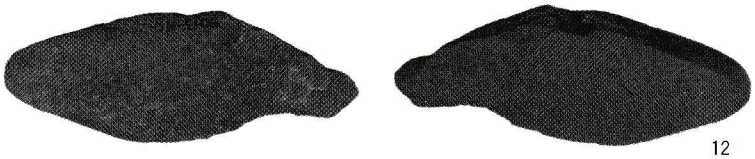

7


8

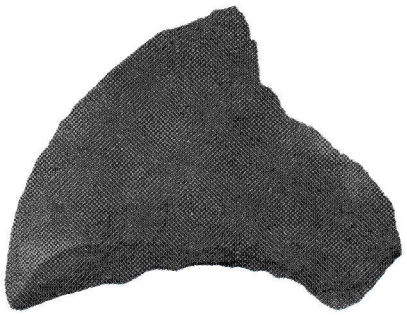
9


10

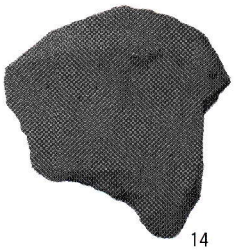

11


12

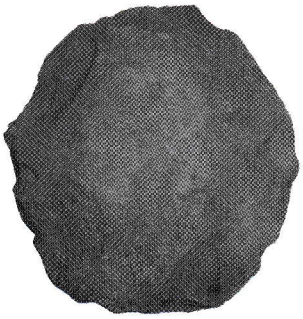
図版 8

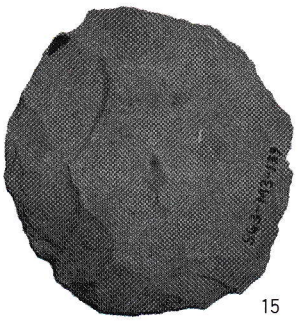


13



14





15

16

17

試掘 .TP II -2

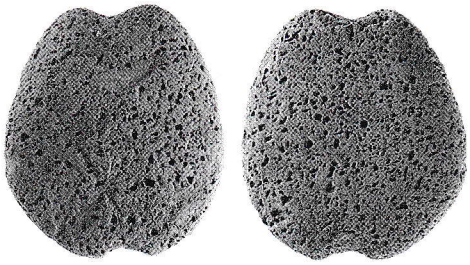
18

19

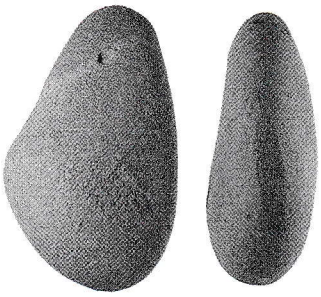
20

21

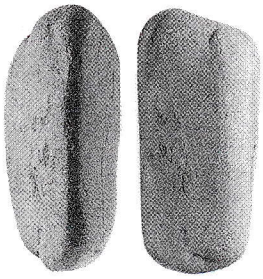
22



23

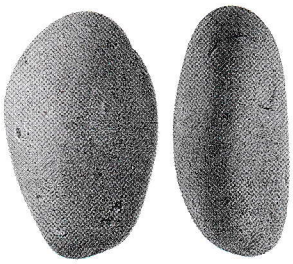


24

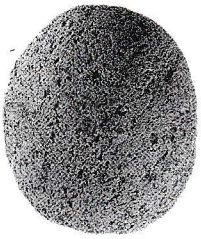


25

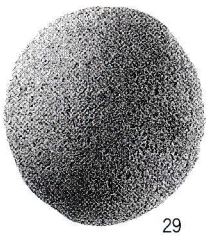
26



27



28



29

30

31

32

報告書抄録

ふりがな	さいぐらいせき だいさんじ はっくつちょうさほうこくしょ
書名	西倉遺跡第３次発掘調査報告書
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	川口町埋蔵文化財報告
シリーズ番号	第４輯
編著者名	佐藤雅一・倉石広太
編集機関	川口町教育委員会
所在地	〒949-7592　新潟県北魚沼郡川口町大字川口1974-26　TEL0258-89-2119
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さいぐらいせき 西倉遺跡	にいがたけんきたうおぬまぐん 新潟県北魚沼郡 かわぐちまちおおあざにしかわぐち 川口町大字西川口 あざいわだいら 字岩平4981･4982 他	20	37° 15′	138° 52′	2002.9.24 ～ 2002.11.1	253m²	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う遺跡確認発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西倉遺跡	遺物散布地	縄文時代早期・前期・中期・後期　中世	ピット	縄文土器・石器 中世陶器	

川口町埋蔵文化財報告第４輯

— 西　倉　遺　跡 —

第3次発掘調査報告書

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備
事業に伴う発掘調査報告書

2003年３月30日　印刷
2003年３月31日　発行

編　集
川口町教育委員会
執　筆
佐藤　雅一
倉石　広太
発　行
川口町教育委員会
印　刷
有限会社　上村印刷所
六日町田中町☎(025)772-2165